



コキュートス

## 登場人物紹介

---

登場人物紹介。

デス・ウィング 謎の女 人ならざる何か。 能力 ストーム・ブリンガー  
スフィア 少女。元々は孤児院出身の孤児だったが、貧しいながらも温かい老人に拾われて育てられる。

能力 グリーフ

ルブル 数百年の眠りから覚めた魔女 能力 カラプト  
メアリー メイド見習い。同じ孤児院出身のスフィアに憎しみを抱いている。 能力 マルトリート

アンクウ 復讐者 帝国ディーバの女王ローザに親兄弟を殺される。 能力 ソリッド・ヴァルガー

ローザ 帝国ディーバの女王。 能力 ドゥーム・オーブ

ジュダス 帝国ディーバに封印された狼の怪物。 能力 ヘル・ブラスト

ヘリックス ローザの側近の男。相談役。

+++++

挿絵 桜龍様

幻影の炎が燃えている。

炎は、何も無い、虚空から生まれたものだった。

グラニットの街の人々が、阿鼻叫喚の渦の中に放り込まれていた。

その中で、一人、笑っている女がいた。

炎の渦の中央には、メアリーが佇んでいた。

彼女は漆黒のマントを身に纏い、その下には純白のローブを身に着けていた。

いつものような、メイド服の姿じゃない。

薄っすらと、彼女は笑っている。

スフィアは思考停止する。

一体、何が起きているのか分からない。

何が、起きているのだろうか？ 頭の中で、処理仕切れずにいる。

人々の皮膚が、肉が、焦げて、崩れていく。

みな、泣き叫んでいる。

焼き殺されるというのは、想像を絶する苦しみなのだろう。

死ぬまでの時間、全身を、苦痛が過ぎっていく。それは、悪夢のような感覚なのだろう。

視界が明滅していく。

今、一体、何が起きているのか理解が出来ない。ただ、記憶が今にも、消えていきそうな感じがした。

頭の中で、理解していくのが怖い。

「何で……？」

思わず、スフィアは訊ねていた。

「仕方の無い事なんだと思う」

女は、冷たく微笑する。

「どうしようもない事なんてものはある。そうでしょう？」

冷気が、辺りを舞っている。

幻影の炎が、本物になって、人々の肌を、肉を、顔を焼いていく。

人々は、口々に、悲鳴を上げていた。

助けて、苦しい、死にたくない。

それぞれの言葉は、唱和しながら、みな、踊り狂っている。

その光景を眺めながら、メアリーはただただ、嘲笑っていた。

「それにしても、とっても美味しそうな匂いがするわね。オーブンで、パイを焼いた時のようね？ とっても、素敵ね」

肉の焼ける臭いが続いていく。

人々の皮膚が、肉が、骨が、炭化していく。

どろり、と。頭蓋骨が崩れて、脳がはみ出している者もいた。

メアリーは、くるくる、と剣を取り出して振り回しながら、更に、苦しむ人々の追い討ちを掛けていた。

「貴方は二度と、私を忘れられなくなればいい。ずっと、この光景を目に焼き付けて生きる事ね？」

彼女はずっと、微笑していた。

「ふふふふふっ、全ての者よ。呪われろっ！」

彼女の哄笑は続いていく。

まるで、ずっと、この時を。この瞬間を待っていたかのように。

「貴方の全ての未来も希望も消えればいい。そうする事によって、私は救われる。私は生きられる。スフィア、私は貴方が心の底から、大嫌いだ。生きながらにして、死ねばいい」

「何で？」

再び、問い掛ける。

スフィアは、両目から涙が零れ落ちる。

「まあ、そのね。貴方の事が妬ましくて、顔を見るだけで不快で。思い出す度に、怒りを感じていたから。どうしようもなかった。貴方がいつも幸せな顔をしているのを見る度に、それを歪める事ばかりを願っていた」

少しだけ、ほんの少しだけ。

思い出が、断片的に、流れては消えていくかのようにだった。

どうにも、ならない現実に抗う事なんて出来はしないのだろう。

強く信じていたものが崩れてしまっていく感覚がする。

大切な友情が、離れていくかのよう。

何故、彼女をこんな風にしてしまったのだろう？

スフィアは、自分自身が崩れ落ちていく感覚を確かに感じていた。

「ねえ、スフィア。私は心の底から、貴方を殺してやりたいからこそ、貴方を殺さない。出来る限り、生きて苦しんで欲しい。それが、私にとっての救いになる」

スフィアは、地面にへたり込んだ。

涙が、止まらない。

スフィアをずっと、育ててくれたガルドおじさん。友人のディファナ、コレット、ティート、みんな焼け死んでってしまった。

彼らの黒い炭のようになった骨が、雪原に埋もれていく。

全てが、凍り付いていくかのようにだった。……………。

フィズ・ウィング



## 第一幕 極寒の刃が吹き荒れる地で。

---

事件が起こる数日前の事だった。

.....。

廃墟となった城砦の中を、彼女はねぐらにしていた。

彼女は旅人だった。

たまたま、此処に放浪しながら、訪れていた。

彼女は幾つかの『貯蔵庫』を行き来して、品物を収納していた。

彼女は、人間の作り出した悪意のある物を集めるのが大好きだった。

たとえば、人を殺した拳銃だとか、誰かが首を吊った縄だとか、禁書にされた本だとか、あるいは、人間の人体の一部だとか。

そういったものが闇市などで売られていると、思わず買い集めてしまうのだった。

言わば、彼女は悪意ある品物を集めるコレクターをしていた。

いつかは、店を出そうと思う。怪しげなオカルト・ショップとして開店するべきか、お洒落なアンティーク・ショップとして開店するべきかも迷っていた。両方、やってみるのもいいかもしれない。

「“水月”さーんっ！」

彼女は、何かと騒がしくなっている場所へと眼を向ける。

先ほどまで、雪かきをしている少年達に混ざって、長い黒髪を大きなベレー帽によって隠した少女が、城砦の中で毛布に包まっている女に手を振っていた。

女は、恐ろしい程の美貌を有していた。余り手入れをしていない髪に、着古したようなニットの服と、汚らしいジーンズを身に着けているが、身なりに気を付ければ、そこいらの男など、みなが彼女の虜になりそうだった。

「おや、スフィア。来ていたのか」

デス・ウィングは、読んでいた本のページに、栞用のナイフを入れる。

「水月さん、水月さーんっ！ 今日、どうしていらっしゃるのですか？」

「生きるのを怠けている。日々、可能な限り、自堕落に生活して、睡魔と読書欲ばかりに耽溺している。そのうち、自分の店を出そう出そうと思っているのだが、私にそんな事、出来るのかな？ 金銭の管理の仕方に自信が無い。客に対する礼儀もだ。そんな私が店を出すというのは、どうにもな、拙いものだよなあ」

彼女は、どうしたものか、と唸っていた。

「あの、何、読んでいたんですか？」

「マルキド・サドとかいう作家の『悪徳の栄え』だ。対になっているらしい、『美德の不幸』も同時に買った。処で、此処の小説に書いている内容をお前で試してみたいのだが、どうなのだろうか。興味はあるか？」

そう言いながら、デス・ウィングはスフィアに本を渡す。

スフィアは、ぱらぱらと、本のページをめくっていく。

中には、えげつない性倒錯の描写が延々と書き記されていた。

更に、追撃を入れるように。

水月は、奥にしまっている春画本を大量に取り出す。

それも、年頃の年齢であるスフィアに渡した。

スフィアは、半ば、錯乱状態になっていく。

「私は思うのだが。彼女達の肌は、酷く豚肉に似ている。切り売りして、店に出してみようと考えているのだが。どうなのだろうか。それにしても、本当に不可解な顔をしているのだな。女というものは。なあ、スフィア。どうすれば、理解出来るのかな？」

デス・ウィングは、ナイフで本に載った絵を切り裂いていく。

彼女の眼は、どうしようもない程の悪趣味な嗜好が光り輝いていた。

そして、今度は、肌蹴た服から裸体を晒す女達を映した、モノクロ写真を、何枚もスフィアに渡していく。

スフィアは、半ば、興奮状態を忘れられずにいながら、写真を見ていく。

「みんな、美人ですね。でも、水月さんには叶わないですよ。顔も、プロポーションも全部。本当に、水月さん、勿体無い」

ううん、と。デス・ウィングは、顎に手を置いた。

「どうやら、花売りという職業らしいのだが。どうも、男に夢と希望を与えるらしい。私は悪意しか他者に対して、贈り物をするつもりが無いので。女衞という職業をしている男からの誘いを断り、写真だけ貰ってきたのだが。彼女達は、みな、美人なのか？ 私には、分からない」

デス・ウィングは、そんな事を言いながら。このスフィアという、まだ二十に満たない少女を面白おかしく弄繰り回していた。

そして、彼女はふうと息を大きく吐く。

それにしても、此処は寒い。

自分には、気温や温度といったものを感じる事は出来ないのだが。それでも、酷く寒いのだと思えてしまう。

この前は、何名もの、凍死者を出したらしい。

スフィアは、どうやら、薄着気味にも見える彼女の健康を案じているみたいだった。

当然、デス・ウィングにとって、気温というものは意味を為さない。

しかし、やはり人間らしい格好をしていた方が良いようにも思える。

先ほどから、スフィアは身を震わせながら、白い吐息を吐き続けている。

デス・ウィングには、当然、そのような変化というものが存在しない。

「もう、それにしても、水月さんはちゃんと、髪の手入れとかしてくださいよ、ちゃんとしていれば、本当に美人なんだから」

長い、煤けた金髪をスフィアに梳かして貰いながら、いい加減に不快に感じていた髪の中の埃を取ってもらう。

「そうか、……私は他人から見ると、そんなに容姿がいいのか？」

デス・ウィングは首を捻る。

「私、水月さんの事、本当に大好きなんです。もし、私が男だったら、絶対に絶対に、プロポーズしますもんっ！」

「そうか、それは嬉しいな」

デス・ウィングは、冷たく笑った。

その顔は、まるで死人のようでもあり、悪魔のようでもあった。

しかし、スフィアから見ると、やはり彼女は強い神秘性を持ち、玲瓏な美貌を持つ魅力的な大人の女性というものなのだろう。

デス・ウィングが、この世界と自分との間に強く感じているズレは、まるで幾重にも隔たれた断層のようにも思えてしまう。

彼女からすると、この世界自体が、極めてミステリアスに思えて仕方が無かった。

自分以外の他者というものが、理解不能な異物としか思えなかった。

デス・ウィングは、自分の顔を美しいと思った事が無かった。

しかし、女の顔を見て、おそらくはこういった女が、普遍的な者達にとって受け入れられやすいのだなあと思える事くらいは出来た。

「スフィア……お前は、本当に可愛い娘なんだな？」

スフィアの事は自分では、どう思っているのだろうか。

あるいは、人間というもの、他人というものは、デス・ウィングにとってはどういった存在なのだろうか。

……純粹無垢なスフィアを見ていると。彼女の信じているものの、何もかもを壊してしまいたくなる。けれども、それを行わない。

それは、彼女の結末を見たいからなのだろうか。

金は持て余す程、ある。

しかし、どうしようもない空虚感を埋める事が出来そうにない。

それは、幼少期の頃からだ。

人間の持っている邪悪さ、それを見つめ続けていたい。

廃墟の主は何も無い空間に向かって、笑い続けるのが好きだった。

「なあ、スフィア。旅をしてみないか？」

それは、悪魔の甘言に等しかった。

というか、明らかに、デス・ウィングは目の前にいるいたいけな少女に向かって、悪意ある提案を述べていたのだった。

きっと、霊廟のように自分の人生は閉ざされているのだろう。

もう、生きた死体なのかもしれない。

ならば、その感覚に他人も巻き込んでしまいたい。それはとてつもなく、魅惑的な事なのだ。

この少女の心を思わず、壊してしまいたくなった。

彼女は酷薄な笑みを浮かべる。

「旅をしようと思っているのだけれども、お前も付いてくるか？」

デス・ウィングは、再び、同じ言葉を口にして、少女の頭を撫でる。

スフィアは白い吐息を吐いていた。

ううううっと全身を震わせていた。

十

魔女が魔女を生み出す。

憎しみと愛情の反復が、人を魔女にする。

.....

.....

メアリーはスフィアに対して、強い嫉妬を抱いていた。

彼女の幸福を握り潰してしまいたいと願っていた。

自分の境遇は、一体、何なのか分からない。

今でこそ、経済的には、安定してきたのだが。十二の時に、この屋敷に入ってきて、メイドとして働く事になってから、彼女は自分の人生とは一体、何なのかと思い始めていた。

毎日、毎日、シーツを洗ったり、部屋の掃除をさせられたり、メイド長などから叱られたり、ずっと嫌気が差していた。

寝る間も無く、貴族達の世話をさせられるのは、本当に嫌気がしていた。特に、パーティーなどがあると。ひたすらに、忙しくなる。

そんな風に、暗渠の只中で生きているのは苦痛でしか無かったが。みんな、どうせ同じものなのだろうかとも思った。

スフィアの存在が無ければ、割り切れていたに違いない。

みんな、苦労して、苦悩して、立派に大人になっていくものなのだ。そして、自分は衣食住を十分に与えられている。恵まれている存在なのだ。

しかしだ。

割り切る事が、どうしても出来なかった。

そう。

自分だって、平等な筈なのだ。他人を支配する権利が与えられている筈なのだ。

そんな捻じ曲がった歪な棘が、彼女の心の中で、徐々に生まれていった。

幼馴染の少女。

スフィアを見ていると、みなから愛されていると思った。

どうせ、彼女は二十歳を過ぎれば。今よりも、ずっと綺麗になって、街の若者から愛されて、玉の輿にでも乗るのだろう。そんな妄想と呪詛に支配されて仕方が無い。

.....私だって、お姫様になりたい。豪勢な生活がしたいんだ.....

そう思いながら、彼女は这个世界を憎んでいた。

二十歳を過ぎれば、憎しみなんて無くなるのだろうとも思った。けれども、無くならなかった。ただ、ひたすらに大人という糊塗された笑顔の仮面ばかりが顔に張り付いていた。

ぼんやりと。

まるで、空ろな幻影のように。孤児院時代の事を思い出す。

スフィアの顔が、ちらついている。巧く、くっきりと思い出せない。

自分はその頃は、幸せな世界にいたような気がする。

今の状況を、どうにか抜け出せないだろうか。思ってしまった。

メアリーは、他のメイド達を密かに軽蔑していた。

おそらくは、後、何十年もの間、貴族達に仕えて。適当に、忙しく人生を送って。適当に、同じ事の繰り返しで、生きていくのだろう。楽しい事と言えば、同僚との間で交わす愚痴や休憩時間のティータイム。そして、寝る前に読むラブ・ストーリーの短編小説。何もかもが、下らない。

大体、メイド達はお見合いによって結婚していく。そして、たまの休日に夫と会って、ささやかなバカンスを楽しむ。子供が出来れば、しばらくはその子の専用の部屋に預けられて、しばらくしてその子供が成長すると。大体、その子供は何処か別の場所へと奉公に出される。

抜け出す為の希望、それは。

この地方に伝わる魔女の物語。

もし、自分が魔女だったらいい。そうすれば、今の自分を変えられる。

スフィアが悪いのだと、思った。

彼女がいけないのだ。

メアリーの心を掻き毟る彼女がだ。

窓から、夜風が入ってくる。

メアリーは、暗闇を見ていた。

見上げれば、暗黒の天空が広がっている。

ふと、何かが聞こえたような気がした。

「……まさか、ね？」

彼女は渡されている、十字架を握り締める。信仰の証だ。

幼い頃に、思っていた。誰かが、自分を連れ去っていくのだろうと。幼い頃だけじゃない、貴族達に仕えるようになってからも、ひたすらそんな事を感じていた。

「どうせなら、いっそ。此処を逃げ出して、飢え死にしようかしら？ それもいい。それも悪く無い」

逃げ出した処で、何があるのだろうか？

生き残ってしまっても、後はもう、娼館にでも行って、娼婦として生きていくしか無いんじゃないのだろうか。彼女達は、酷く軽蔑されている。最後の職業なのだとされている。一部の男達は、夢見がちで、彼女達をロマンスの対象にしているが。現実には、彼女達は、極めて差別的に見られていて。それに、心が病んでいる者達ばかりなのだと、聞かされている。

彼女は、ぼんやりと、虚空を眺めていた。

虚空の中には、薄っすらと、炎が燃え出していた。鬼火だろうか？ この辺りの伝承で伝わっている、謎の怪火。

メアリーは、両目を擦る。

何も、いない筈だ。

近くでは、雪兎が走り回っていた。

可愛らしいが、何だか最近では、憎らしくもある。ああいった生き物は、何処までも自由だ。何処か、スフィアの輪郭と重なる。

突然。

雪兎の周りに、幻影の焰がちろちろと、燃え始めていた。

メアリーは絶句していた。

見る間に、兎は焰によって、焼かれて、燃え殻へと変わっていく。

「魔女が……、いや、違う。……これは、私がやったの？」

……………。

それは、一年近く前の事だった。

メアリーは、約一年もの間、この力の使い方をコントロールしようと思っていた。

どうせ、未来に何の希望も無いならば。全て、何もかも、壊れてしまえばいい。

そんな、悪魔的な選択を彼女は選んだ。

## 十

グラニットの街では、聖夜祭が行われていた。

燦々と、街が松明の明かりで輝いている。

スフィアの家は、この何ヶ月かで少しずつ生活費から削って溜め込んだお金を使って、それなりに楽しいささやかな聖夜祭の準備が行われていた。

彼女は樅の木などに、飾り付けを行っていた。

拾った松の実や、どんぐりなどを飾りにしていた。

これから先の一年も祝福出来るように、それぞれお星様に見立てているのだ。

彼女は願い。自分の周りの者達が、みんな幸せになればいいかなあ、と。

この辺りの者達は、貧困なりに。それなりに人生を楽しく送りたいと願っている。

スフィアは、聖夜祭に向けて、買出しに出掛けていた。

街は凍えそうなくらいに寒い。

「あら？ スフィアじゃない？」

彼女は、ううん？ と、見知った。その声を知る。

「あ、メアリー。久しぶりだねっ！」

スフィアは久々に見た、年上の友人に会って笑顔が零れ落ちる。

メアリーは淡い金髪の中に、黒檀のような黒の髪が混ざり、長い髪を縛っている。

彼女はスフィアの数歳年上の友人で、スフィアと同じように孤児院育ちだった。

孤児院の人間は、十二を過ぎると。色々な場所にもらわれていたり、働きに出される。メアリーは、十二を過ぎてから、十年くらいの間、街の領主の下でメイドとして働きに出された。

スフィアは運よく、たまたま、流行病で子供を無くした老夫婦の下へと送られたのだった。彼女は苦労人なんじゃないかなあ、とスフィアは漠然と思っている。

「ふっ、スフィア。髪の毛がぐしゃぐしゃよ」

「あっ、先ほど降っていた雪が髪にこびり付いて、頭、ぐしゃぐしゃに塗れちゃって」  
メアリーは、強くスフィアを抱き締める。

どうやら、メアリーは街の下まで、買い出しに来ていたみたいだった。

丁度、領主の誕生日が聖夜祭の日の一日前だ。

その時のパーティーの為に、今、コックなどが忙しく料理の仕込みを行っているらしい。

「あ、そうだ。スフィア、一緒にお茶でもいかがかしら？」

「あ、うん」

スフィアは貧乏ながらも、慎ましく暮らしていくのがいいなあと思っていた。

これから、どんな風に生きていくのか、まだ分からずにいる。

十代のぼんやりとした頭では、とても色々な事を考えられる余裕なんて無かった。

.....

それから、数日後に、メアリーは、スフィアの前で、グラニットの者達を燃やした。

何故、彼女がそんな事をしたのか、スフィアにはまるで理解が出来なかった。

## 十

スフィアは茫然自失に陥っていた。

グラニットの街にある、スフィアが住んでいた村は、聖夜祭の日に焼け爛れてしまった。

生き残った村人は、どうやら、何名かいたみたいなのだが。いずれも、たまたま、買い出しの為に。村の外に出ていた者達ばかりだった。

スフィアは放心状態のまま、自分の家の中に閉じ籠っていた。

戸棚の中などに入っているパンや林檎、葡萄酒や干し肉などを口にして、飢えを凌いでいた。農業と牧畜を行っていたガルドおじさんは、もうこの世にいないのだと、どうしても、頭の中で理解する事が難しかった。

暖炉の炎を燃やすのが、怖かった。あの炎が、眼に焼き付いて離れなかったから。

ただ、何故だか、メアリーを憎む気にはなれなかった。

むしろ、彼女が何故、自分を此れ程までに憎悪していたのか分からない。

何が、彼女をそこまで追いやってしまったのだろうか？

自分には、一体、何の責任があるのだろうか？

理解しなくてはいけない。けれども、理解する事が酷く難しかった。

どうすればよかったのだろうか。

何が、彼女を追い詰めてしまったのだろうか？

.....いくら考えても、分からなかった。

スフィアは、あの廃城へと向かった。

確か、水月がいる筈なのだ。

ふと、スフィアは気付いた。

此处、数日間くらいの記憶が朦朧としている。

記憶が、まるで抜け落ちているかのようだった。確かに、食事を取ったり、寒い中、毛布に包まっていたりしたのだが、どうしようもなく、現実感が剥がれ落ちていた。

助けを求めるのならば、彼女しかいないと思った。

メアリーの事……何故、彼女はある事をしたのだろうか？

まるで、理解する事が出来ない。

水月は不思議な感じがした。

何か、相談してみたいくなる。

今は、何もかもを、考える余裕が無くなっている。

自分は、まるで、生きている事が罪なんじゃないかと思わずにはいられない。実際、メアリーは、そのような事を言っていた。

……何故、メアリーは私の事を大嫌いと言ったのだろうか……？

全て、混乱している。

ただ、あの虐殺の映像ばかりが、何度も頭の中を反復していく。

どうやっても、消し去る事が出来そうにない。

ぞぞっ、と。風が吹き抜けてくる。

コートの中にも、風が入り込んでくるかのようだった。

「おや、元気にしていた？」

廃墟の暗闇の中から人影が現われる。

煤けたニットの服にマフラー、ズボンを着ている。

この寒空の下、何故、彼女はそんな薄着でも平気なのだろうかと思ってしまう。

「ああ、酷い惨劇があったみたいだな？ 私は現場に向かったよ。素敵なくらいに、酷い有様だったな？」

水月は、くっくっ、と笑っていた。

その笑い方が酷く不気味だった。

スフィアは、何とも言えない感情に襲われる。

おもむろに、水月は、バッグのようなものを開けて、中から何かを取り出す。

それは、奇妙なオブジェだった。

「何ですか……それ……」

「いや、ほら。これはさ、焼け死んだ人々の死骸が沢山あった。みんな、酷い焼死体になっていたな？ 素敵だなあ、と思って、色々、加工してみたんだ。ちなみに、これはイヤリングだ」

水月は屈託の無い満面の笑顔で、黒ずんだ顎の骨の部分に、耳に取り付ける為の金属の輪を嵌め込んでいた。

「ちなみに、それから。私の後ろにあるもの、かなり拾ってきたんだ。死体達を、みんな美しい姿になっていたからな。私は、思わず見惚れながら、沢山、拾ってきてしまった。だから、私の後ろには、結構、置いてあるよ？」

見ると。

水月の背後には、無数の炭化した死体達が、横たわっていた。

もしかすると、スフィアの知っている村の人達の誰かだったものかもしれない。

スフィアは思わず、呟いていた。

「悪魔……」

スフィアは心の底から、目の前にいる女が、異常者以外の何者でも無い事を理解する。

スフィアを此れまで支えてきていた価値観が、見るも無残に崩れ落ちてしまいそうだった。

今、感情を整理する事が出来ない。

どうすればいいのかわからないし、現実感がまるで無くて、夢の中を彷徨っているかのようだった。

きっと、酷く悪い夢を見ているのだろう。

だから、今度、会う時は。きっと、メアリーは優しく、スフィアに話し掛けてくれる筈なのだ。

早く、夢から醒めればいい。

そうすれば、以前と同じような生活が待っている筈なのだ。

思考を整理出来ずにいる。

そうだ。水月と……彼女と、出会ってから、自分の人生が少しずつ、おかしくなり始めているような気がする。

「スフィア。私はお前の結末を見てみたい。お前がどういう人生を歩むのかを見てみたい。ふふっ、くっ、今、とっても楽しい。お前の顔が絶望に歪んでいるのがな？」

目の前の女の瞳に映るのは、底知れない程の漆黑だった。

「私は人間の持っている邪悪さを可能な限り見てみたい。お前がどんな舞台劇を演じるかが、見たいんだ。分かるかな？」

メアリーは……。

彼女のせいで、おかしくなったんじゃないのか？

そんな思いがしてならない。

「貴方のせいで……メアリーは、私の友達は……」

水月は、くっくっ、と笑いながら首を横に振った。

「何があったのか知らないけれども、スフィア。お前の友達の話なんて、私は知らない。私はただ観察してただけだ。お前の友人達には、余り、何も興味が無かったから。友達がどうしたんだ？」

「メアリーが、みんな、殺したのっ！ とぼけないでっ！ 貴方のせいでしょう？」

スフィアは、彼女に精一杯の敵意を向ける。

水月は、首を横に振る。

そして、酷薄な笑みを浮かべる。

「メアリーとかいうのは知らない。私はお前の友人の誰にも会っていない。私は、村が火事になったのを知って、焼け跡から宝物を拾い集めただけだ。しかし、私はお前の運命が知りたい。どのような生涯を送るのかをな？」

スフィアは、理解する。

おそらく、目の前にいるこいつは、間違いなく本物の悪魔か何かなのだろう。

酷い離人感に襲われた。

終わらない悪夢の迷宮を彷徨っているかのようだった。

「……………私、これから、一体、どうすれば……………」

水月は、廃墟の中にある自身の荷物を漁っていた。

古びた筆筒の中から、何か、小さな箱のようなものを取り出す。

彼女は箱を開く。すると、中から、カードの束のようなものが出てきた。

そして、水月は、泣きじゃくるスフィアの前で、カードの束を広げる。

「そうだ、スフィア。お前のこれからの人生を、タロット・カードで決めてしまおう。きっと、良い結果になるんじゃないのか？」

「え、えっと、……………タロットですか？」

「ああ、由緒正しき歴史のある占い方法だ。占いで、お前の人生の命運を決めてしまおう。お前は人生を捻じ曲げるべきだ。そうなんだろう？」

「占いで、ですか？」

「ルーレットとか、ダイス・ロールよりはマシだろう？」

そう言いながら、水月は、サイコロを取り出す。

ぱしっ、と。水月は、カードを引いていく。

「成る程……メアリーとかいうのは、お前の事が大嫌いなんだな？」

「そうなんですか……………」

ぱしっ、と。彼女は、またカードを引いていく。

「お前に対する被害妄想と嫉妬心が強い。人格に問題があるんじゃないのか？ この女、相当、妄想癖が強い。……自分の生きている環境が嫌だったんだろうな？ お前が、どうも酷く羨ましく思えたらしい。自分の境遇のやるせなさに対する象徴を、どうも、お前に求めたらしい。いや、私は自分の事を棚上げして言うが。本当に、酷く歪んでいる女だと、思うぞ？ こいつは」

水月は、くくくくっ、と不気味に笑い続けていた。

そして、少しだけ、唇を引き攣らせていた。

「しかし、こいつ……このメアリーとかいう女、……私が言うにも、何だが……頭がおかしいんじゃないのか……？ ……中々、私好みの異常者なんだが……………」

水月は、カードを引きながら、勝手に一人で何かを納得しているみたいだった。

そんな光景を見て、スフィアは何だか、思わず可笑しくなって、不覚にも何だか、拍子抜けしたような気分になっていく。

「そ、そうなんですか？ ……………メアリーって……………」

「そうだな。大きな力をたまたま手にしてしまったから、お前に“復讐した”らしい。ああ、そうだ。こいつ、何か、大きな者に縋りたがっているのか？　しかしまあ、随分と、お前に対しては、作り上げた仮面の顔で、接していたらしいな？」

「て、て、適当な事、言っているだけなんじゃないですか？　水月さんっ！　本当は、全部、何もかも、知っているんじゃないんですか？」

スフィアは、少しだけ、腹立ち混じりに感じながらも、動揺の声を上げていた。

「馬鹿にはしてはいけない。タロットは的中するぞ？　お前達の事情なんて、私は何も知らない。どうだっていい。ただ、どういう原理か知らないが。タロットは当たる。心理学の応用なのか、対話の技術なのか何なのかは知らないが。タロットは的中する。それにほら、このカード・デッキは、私のお気に入りの一つなんだ」

くくくっ、と水月は笑い続ける。

「このカード・デッキを作った奴は、面白い奴だぞ」

「何なんですか？　その人は」

「ああ、アレイスター・クロウリーとかいう奴だ。何でも、凄い魔術師だったらしい。まあ、もっとも、このデッキ自体は割と、何処にでも出回っている。問題は、このデッキ自体、闇市で手に入れたんだが。何でも、持ち主の占い師が拳銃自殺を行ったらしい。自殺の際に、一発だけ弾丸の詰まったリボルバーで、ロシアン・ルーレットを行って、五発目で自身の頭を吹き飛ばしたらしい。そういうアイテムは、最高だ。非常にいい。何で、このデッキの持ち主は、普通に自殺しなかったのか。わざわざ、自殺をルーレットにしたのか分からない。五発、自分の頭を撃つてみて、助かったのならば、生きるつもりだったのか？　一発、自分の頭を撃つ事に、メモを残していたらしい。そのメモの内容も最高で、徐々に、自分の作り出していく狂気に引きずられながら、書いている。メモも別売りで購入した。察するに、どうやら、自身の能力を高めたくて、死の擬似体験をしようとしたのかもしれないな？　死と隣合わせになる事によって、自身の能力を引きずり出すとかいう伝承は、各地で知られている。私は、人間の持っている、そういう精神の歪さが、大好きなんだ」

水月は、明らかに異常な趣味嗜好を延々と語り続ける。

スフィアは、どんどん、彼女の言動のおかしさについて、飲み込まれていく。

「まあ、そういういわく付きの占い道具なら。信用しても構わないだろう？　という事だ」

と、水月は、飄々とした態度で落ちを付けるように言った。

「水月さん……、私の事、おもちゃか何かだと思っているでしょう……………」

「そうだな、それは、間違いないだろうな」

「うう……………」

スフィアは、地面に膝を落として、崩れ落ちる。

「で、どうしたい？」

彼女は、相変わらず、含み笑いを続けていた。

「お前の人生は、メアリーとかいう奴に。粉々に破壊されてしまった。お前は、自分の人生を、これからどう過ごせばいいか分からないんだろう？　本当に、どうするんだ？　お前にとって、

彼女は憎いのか？ どうなんだ？」

そんな事を言われて、スフィアは困惑していた。

「決め方が分からない？ ちなみに、助言なんだが。私は、お前も、メアリーに復讐する事を望んでいる。もし、そうするのなら、私はお前に存分に手を貸したいと思っている。どうだろうか？」

「嫌です……」

スフィアは首を横に振った。

「私は、私は……メアリーと、また、仲良くなりたい……誤解だから、全部……」

水月は、ふむ？ といった風に、神妙な顔になる。

「成る程。それもいい提案なんだが。いいのか？ お前は、彼女の事が憎くないのか？ お前の人生は、彼女によって破壊されたんだぞ？ お前の他の友達もみんな死んでいったんじゃないのか？ どうなんだ？ お前の親代わりだった者もだろ？」

スフィアは、声を強めて言う。

「メアリーは。私の姉みたいなものだった。私、お姉さんが、もし、お父さんを殺したとしても。私はお姉さんを全部、憎んだり、恨んだりする事なんて出来ないよ。どうやったって、私、メアリーを嫌いになり切る事なんて出来ないし、今でも、あれが現実起こった事なのか。全然、頭の中で整理し切れなくて、明日になれば、悪い夢から醒めるんじゃないかって思ってしまうんだよ、全部、幻だったんじゃないかって、まだ、思っている」

「成る程な」

水月は、これはこれで楽しげだった。

「最高だ。お前は、人間は善か悪かで。善の方を信じているんだな？ 上出来だ。もしかすると、お前のその、他人に対するどうしようも無い程の善意や愛嬌やらが、かえって、彼女の怒りを最大限に引き出した可能性があるのだとしても、それはそれで素晴らしいと思う。人間はどうしようもなく、分かり合えないな？ 私は、純粋な善意や愛が、結果として、対象を押し潰したり、対象の心を捻じ曲げて追い詰めたりしたとしても。それは、本当に素敵な事なのだろうと考えている。私は見てみたい。人間の善意の先に、何があるのかを。私は、悪意の塊でしかないけれども。それでも、善を為そうとする人間は美しいと思うし、屈託も無く、自分を不幸にしまった他人を真摯に赦そうと思える奴ってのは、本当に美しいとも思う。スフィア、私は人間というものが、一体、何なのか。未だ、分からずにいる。……そうだな」

水月は、少しだけ眼を閉じる。

「スフィア、私に生きる意味を教えて欲しい。私は、人間の悪意の先には、何があるのかを知りたいがっているのだけれども。同時に、人間の可能性も見てみたい。お前は、私の生きる理由の一つに成り得るのだろうか？ それは、とても興味深い事だな？」

十

『メアリーの回想。現実と過去の記憶の狭間。』

メアリーは、記憶を振り返ってみる。

本当は、もっと別の幸福を望めたのかもしれないし。

あのままの生き方で、ちゃんと生きる事を選択していれば、いつの間にか、それが幸せの形へと変わっていたのかもしれない。

けれども、彼女は今の生き方を選択した。

それは、もう、自分の衝動を抑え切れず、そうせざるを得なかった。

決意した事を後悔する事なんて、出来はしない。

それでも、自分が望んだものは変わらない。ただ、自分なりの幸福を模索しようとしただけなんじゃないのだろうか。

「スフィア……何で、未だ貴方が憎くて堪らないのかしら？ 憎んでいるのは、貴方の方がずっと上なんですよに」

彼女は頭を掻き毟りたくなる。

「スフィア……、きっと、貴方はいつの日か。私を乗り越えて、私を忘れていくんでしょう。それがいいのでしょうね。それが、貴方の幸せなんだと思う……」

多感な時期に受けた少女の傷は、塞がらないのではあるまいか。

メアリーは、ぼうっと、虚空を眺めていた。

自分は、弱いから、生きていた場所を抜け出した。

弱いから、力を使わずにはいられずに、村の人々を虐殺した。

少女に悪意という刻印を押したのだろう。

弱いながらも、少しずつ前に進んでいくしかない。

受け止めてやれなかったのは、何故なのだろう？

嫉妬の焰が、胸を焼いて。自分ばかりが不幸なのだと思い続けてきた。

今は、自分の弱さが齎した結末でしかない。

それでも、後悔だけはしていない。

後悔なんて、していない地点で生きなければならないし、戦わなければならない。

憎悪を糧にして、自分はこのし上がろうと願っている。

どうしようもなく、それが安息に繋がるのだから。

自分の未熟さは、何だったのだろう。

まだ、答えは出ない。

大いなるものに、縋りたい。

きっと、それが自分にとっての希望になるのだろう。

自分が、どうしようもなく、下らなく、つまらない人間でしかないのかもしれない。

只の、世間知らずでしかないのかもしれない。

それでも、今しかないと思った。

二十になる前に、行動を起こそうと思った。

けれども、二十を過ぎて、二年も経過してしまった。

幼い頃からの望みは、もっと、広くて大きな世界を見る事だった。  
館の窓から見下ろしていた漆黒の大地は、自分の心を飲み込んでいきそうだった。  
自分は何の為に生きているのだと、強い懐疑心に襲われ続けた。  
みなには、死んで貰うしか無いのだろうと思った。  
自分の中にある怪物をコントロール出来そうにない。  
ある時、血塗れの雪兎を見つけた。  
その兎は、狩猟の弓矢の矢に当たって、怪我をしていた。  
矢が深々と刺さっていた、メアリーは、それを引き抜こうとする。  
すると、兎は徐々に、身体が動かなくなって、そのまま死んでしまった。  
その兎は、矢を引き抜いた事によって、余計に寿命を縮めてしまったのではないのだろうか。

## 十

スフィアは、今も幸せにしているのだろう。  
それが、どうしようもなく、憎らしくて仕方が無い。  
あの無邪気な顔を見ていると、それが歪んでいく事を夢想している。  
どうしようも無い程の絶望を味わって欲しいと願っている。  
彼女はきっと、自分の誕生日を心から、愛しく思えて。自分が生まれてきた事に対して、祝福する事が出来るのだろう。けれども、自分には、それが出来ない。  
自分の人生は、呪われているのだと思ってしまう。  
自分の生は、悪夢のようなものなのだ。  
そうやって、その観念から、抜け出せそうにない。  
自分が生きている事、自分が生まれてきた事を、喜ぶ事が出来ない。  
二十が近付くまで、ずっとそうだった。  
そして、二十を過ぎた後も、そうだ。  
メイド長の怒鳴り声、同僚達の忙しなさ、それが後、何十年も続くのかと思うと嫌で嫌で仕方が無い。そして、多分、結婚したとしても、幸福にはなれない。  
だからこそ、全員を殺害する以外に在り得ないのだと思い続けている。  
みなの死体を眼にすれば、否が応でも彼女は苦しみ続けるだろう。  
そして、ずっとどん底の下で生きればいい。  
どうすれば、スフィアを不幸にする事が出来るのだろうか。  
思い付く限りの思索を巡らせる。  
せめて、彼女が自分よりも遥かに不幸ならば、それでいい。それで、構わない。  
これから続くであろう、何十年もの下らない無為な人生も、スフィアが自分よりも不幸である事によって、自分の魂は救われる。  
「私は権力を獲得する事なんて出来はしない。どうしようもない程に、その程度の人間なのだから。そういう程度に生まれ付いてしまったのだから」

自分の夢が叶わないのならば、せめて、他人の夢も潰してしまいたい。

スフィアは言っていた。

素敵な理想の男の子に巡りあって、幸せになればいいな……と。

もう、数年も前に聞かされた、彼女の言葉だ。

その言葉が、どうしようもなく、忌々しく思う。

彼女の家庭は、貧乏だが、無数の可能性に恵まれている。

それが、どうしようもない程に、赦せなく妬ましい。

自分は日陰の人間のままで、せいぜい、後、数十年頑張っ、領主辺りから認められて。どんなに頑張っ生きてたとしても、メイド長という地位で、後輩などを叱り付ける日々を続けて、そして、対して好きでも無い男性と、たまに出会って、下らない雑談を交わして。そうやって、生涯を終える事になるのだろう。

けれども、スフィアは違っ。

彼女は、きっ、と何だっ出来るのだろうから。

まるで、翼を広げ、何処までも飛んでいける鳥のようなものなのだから。

そして、自分よりも、数年も年下なのだ。

だから、可能性は、更にその数年分、広がっている。

もう、二度と会わない方がいいのかもしれない。

顔を思い出すだけで、はらわたが煮えくり返ってくる。

自分は何の為に、生きているのだろうと、空しく思わずにはられない。

衣食住が、こんなにも保障されているのにも関わらず、全然、幸せになれない。

きっ、と、彼女はもう、好きな人に巡り合えて、幸せな恋をしているのかもしれない。

そんな事を思い浮かべるだけで、掃除の最中など、憎しみが膨れ上がってくるのだ。

自分と他人の差異が、何故、こんなにも自分を苦しめるのだろう？

可能な限り、スフィアの不幸のヴィジョンを思い描いた。

あんな風に、酷い目に合えばいいだとか。死ぬまで、ろくでもない一生を送ればいいだとか。

スフィアに出会わなければ、自分は自分の人生を肯定出来たのだと思う。

彼女の誕生日を思うと。とにかく、酷い災厄に合えばいいと願ってしまう。

彼女の誕生日が来る度に、最大限の不幸に見舞われればいいと願っている。

きっ、と、街の男達に囲まれて、わいわいとやっているんじゃないのだろうか？

そんな風に、無邪気な顔の彼女をイメージしてしまう。

どうしようも無い程に、憎くて、彼女の似顔絵を描いては、刃物で切り刻んでしまおうかと考えている。

何故、自分は報われないのだろう。

それが、どうしようもなく、納得がいかない。

全部、自分の妄念が生み出した幻想なのだとっしても。

自分の力は、幻想を形に出来るものだったらいい。

少しずつ、自分の力の輪郭が、はっきりしてきた。

イメージを形にしたい。

幻想を具現化させてしまいたい。

メアリーは、自分の力が何であるのか、少しずつ、分かってきたような気がする。

「……スフィアも、きっと、私と同じような力に目覚めるのかしら？」

そんな事を、心と思う。

考えたくない事実だ。

自分よりも、優秀な力だったら、本当に最悪だと思う。

時計の秒針の音が、酷く煩わしい。

何故、時間は流れ続けるのだろうか。

時間というものは、可能性を奪っていくものなのだろう。

ちょうど、三年前に彼女にしてやった事を後悔している。

その時の彼女は、とても嬉しそうだったのだが。今は、その時の彼女の笑顔を、ズタズタに引き裂いてしまいたくなる。

自分の嫉妬の焰は、いつになれば消えるのだろうか。

あの少女の殺害によって、それは為されるのではないのだろうか？

どうしようもなく、幸福と不幸の量の差異に狂いそうだ。

自分は、少なくとも、幸福を感じていない。

そして、あの少女はとてつもなく、幸せそうに思えて仕方が無い。

風の音が鳴っている。

鼓膜の奥底に染み渡り、全身が震え出してくる。

何か、遥か遠くの異界からの声が、聞こえてくるような気がした。

自分は街中を徘徊して蔑まれるホームレスや、娼館の人間などよりは、遥かに恵まれている。

それでも、自分は今の自分の生活を憎まずにはいられない。

自分よりも、不幸な人間の存在が幾らいたとしても、自分が彼女よりも不幸なのは、屈辱以外の何物でもない。

だから、今の地位を捨て去ろうと思った。

彼女よりは、絶対に幸福になってみせる。

それだけは、自分自身に強く誓っていた。

ただ、どうしようもないくらいに、自由を欲しているのだと思う。

この辺りに満ちている宗教観によると。

神様は、与えられた今の自分の人生を大切にすべきだ、と問いている。

そんなもの、苦痛でしかない。だから。

信仰を捨て去ろう。

自分は、神に背いて、今の自分から抜け出そうと思う。

彼女は、右手を振り翳す。

右手の中には、ぼうっと、漆黒の焰が燃え始めていた。

これは、自分だけが見える幻覚だ。

しかし、壁にそれを近付けると。壁が、じわっと、焦げ始めた。

それから、物が焼かれた臭いが充満していく。

メアリーは、この力に戦慄を覚えている。

どうしようもなく、溢れ返ってくる弱さが、自分の心を絶望の底へと突き落としていく。

一体、自分の人生は何なのかとってしまう。

たとえ、たった数キロ先の地区に、どうしようもないくらいに、飢えによって苦しむ者達が何名いようとも、自分の幸福や不幸とは関係が無い。

邪悪な儀式を始めよう。

それには、無数の生贄が必要なのだ。

スフィアが、自分よりも、ほんの少しだけでも、ずっと不幸であればいい。

それだけで、自分が生まれてきた意味があるような気がするのだ。

他人の不幸を願う事で、自分が幸せになれる。

それを信じて、生きていくしかない。

信仰という名前の、巨大な建造物は、みな、形にして残したがる。

自分には、権利がある筈なのだ。

幸福になる権利がだ。

メアリーは、ふと、この世界そのものが幻覚で出来ているんじゃないのかと思った。

全てが虚像の世界なんじゃないのか？

この力を手にしてから、そういった懐疑心も強く出てきてしまった。

## 十

「スフィア。貴方はきっと、これからの人生において。素敵な男の人と巡り会って、素敵な恋をして。子供なんかも、育てるのかもしれない。そして、私の記憶は過去の物となって、私は置き去りにされていく」

彼女は、眼に映るもの全てに対して、憎しみを覚えてしまっていた。

「スフィア。私を殺害して、前に進むべきね」

教会の鐘の音が耳に聞こえてくる。

スフィアは結婚式を挙げている。相手の男性は、とても美青年で、性格も良く、地位も財力も持っている。そして、彼女のお腹の中には、すでに、彼の子供がいる。

スフィアはとてつもなく、幸せそうだ。

自分はそんなに好きじゃない男とつまらない家庭を築いている。

そして、これから先、ずっと続いていくであろう重荷でしかない人生が待ち受けている。

耐え難い程の屈辱と絶望ばかりが、目の前にはあった。

しかし、こうも思うのだ。

スフィアは貧乏な生活の中から、抜け出す事が出来るのだろうか。

もしかすると、生涯、彼女は貧困の中で生きていくのかもしれない。

それ程、幸せでも、極端に不幸でもなく、つまらない人生を送っていくのかもしれない。  
自分は、一体、どちらを願っているのだろうか？  
ふと、思ったのは。  
幸福になりたいと願っているうちは、まず幸福ではない。  
幸福を感じているのは、きっと、幸福を意識していない時なのだろう。

十

メアリーは、ルブルと出会った時の事を思い出す。

.....。

伝承にある通りに、グラニットから数キロ先も離れた真っ黒な森の中へと向かった。  
メアリーは森の中に入り込んで、少しだけ、薄気味悪い思いをした。  
とてつもなく真っ暗で、ランタンの明かりが無ければ、とても森の中を進めそうにない。  
蝙蝠なのか、梟なのか、奇怪な声を放つ空飛ぶ生き物が木々を飛び回っている。  
遠くでは、狼の遠吠えが響いている。  
そこは、大きな樹木だった。  
樹木の中央には、洞窟があった。  
メアリーは、洞窟の中へと入り込んでいく。  
ことり、と何かを踏んだ。  
見ると、何かの生き物の頭蓋骨だった。  
メアリーは、自分の指先から、幻覚を作り出していく。  
それは、小さな炎だった。  
その明かりで、洞窟の中を進んでいく。  
メアリーは息を飲んだ。  
確かに、そいつはいた。  
樹木に絡まりながら、そいつは漆黒のドレスを纏って眠りに付いていた。  
一体、いつからそいつはそこにいるのだろう。  
綺麗な美少女だった。  
最初に見た時は、人形か何かだと思った。  
「貴方、死んでいるの？」  
メアリーは、おそろおそろ、その少女に話し掛ける。  
答えは無い。  
指先で、思わず、そっと頬を撫でてみる。  
すると、体温は無く、酷く冷たかった。  
本で読んだ内容を思い出す。  
眠りに付いている魔女は、語り掛けるものの呪詛によって、蘇るのだと言われている。

そして、その本は、目の前で眠っている魔女本人が書いて、後世に残したものらしい。

「呪詛……？」

メアリーは、スフィアの顔を思い出す。

純粹そうで、みんなに好かれそうな顔だ。

きっと、彼女は幸せになれるのだろう。

「私は、スフィアが嫌いだ。何もかも、彼女の全てを壊してしまいたい」

……………あら、そうなの？

何かが、耳元で語り掛けてきた。

洞窟の中が、揺れ動いている。

メアリーは、急いで外に出る。

途中で、ランタンを落としてしまったが、幻影の炎だけで外に脱出した。

そのまま、洞窟の中で、岩の下敷きになったのかもしれない。

やはり、伝承なんてものは嘘だったのだろう。

馬鹿馬鹿しい。

しかし。……………

「私が、化け物になればいいだけの話……」

ごと、と、何かが転がる音がした。

……………あら、貴方も化け物なの？ 私もって事かしら？

メアリーは振り返る。

そこには、人形のような顔の、真っ黒なドレスの少女が佇んでいた。

両目は、深い邪悪さを称えている。

「貴方が、ルブル？」

「そう、私が魔女ルブル」

魔女は、大きく欠伸をする。

「あら、貴方にお聞きしたいのだけれども。今年は星の歴史の下で、何年なのかしら？」

メアリーは、今日の年を告げる。

少女は少し、困惑したような顔をする。

「そうなの？ 私、酷いお寝坊さんね。もう、四百年近くも眠っていたの。けれども、貴方、よくこの森に近付く事が出来たわね。たとえ、戦争が起きようとも、歴史が移り変わろうとも。この森に近付く事は出来ないようにしといたのだけれども。もし、森に近付く事が出来るのは、私と同じような望みを持っている者だけなのだから」

「ルブル」

メアリーは言った。

「私、貴方に仕えたい。私、今、この地方の領主の下で、メイドをやっているのだけれども。私は貴方の下で、メイドをやりたい。何でも言う事を聞くから、私を今の場所から連れ出してくれないかしら？」

ルブルは不思議そうな顔をする。

「何故、私なんかと一緒に？ まあ、いいわ。せっかく起こしてくれたんだから、貴方の望みを叶えて上げる。それにしても、私は以前のように自分の力を使う事が出来るのかしら？」

「ルブル様、って呼んだ方がいいかしら？ もっと、敬うように呼んだ方がいい？」

「それは、堅苦しいから止めて欲しい」

黒い少女は困ったような顔をしていた。

「私の墮落の力が戻らない。少しずつ、戻っていくと思うけれども、やっぱり、四百年のブランクは大きいわね、そうだ、貴方、何てお名前？」

「メアリー」

「そう、じゃあ、私の下で仕えてくれないかしら？ 私の力の復活には時間が掛かる」

ルブルは樹木の一つに触れる。

おおおおおおおおおおおつ、と、奇妙な音が鳴り響いていく。

すると、樹木はぐしゃぐしゃと変形していく。

メアリーは、地面を眺める。

蟻が集っている甲虫の屍骸があった。

甲虫の屍骸が、ぶしゅっ、ぶしゅっ、と粘液を吐き出しながら、ゆっくりと脚を動かし始めた。

辺りに転がっている、獣の骨ががたがたと動き始める。

「メアリー、私の力を知っているかしら？」

「.....知っているわ」

「そう」

蟻が集っていた甲虫が立ち上がって、蟻を食べ始める。

そして、獣の骨も立ち上がり、周囲にある土をぐちゃぐちゃと噛み砕き始めた。

「そう、死者を蘇らせて、好きなように操る事が出来る。真っ黒な魔法を使うようにね」

この森は、まるで魔女の饗宴と化していた。

死者達が、うおおおん、と唸りながら、踊りを踊っている。

「私の力はまだまだ不完全。それまでメアリー、私を守ってくれないかしら？」

メアリーは頷く。

その数日後、メアリーはグラニットの街を、自身の能力マルトリートによって焼き尽くす事を決断した。それは、ルブルからのアドバイスでもあった。

やがて、街を燃やした後、彼女はルブルと合流する。.....。

†

ルブルは、グラニットの街から、遙か西の方へと向かっていた。

彼女は、大地に向かって、何かを囁いていた。

メアリーは息を飲む。

ぼつり、ぼつり、と大地から、大量の腕が這い上がっていく。

「此処は、墓場よ。みんな、氷漬けにされているから、腐らない」

ぶよぶよとした白い皮膚の上に、かさかさの布が覆っている。

死体達だ。

死体達が、動き回っている。

暗黒の儀式が行われていた。

しゅううう、しゅうううう、と死者達の声が、空中にも響き渡っていた。

黒い雲が、空一面を支配していった。

ルブルは、人の声ではない声を呻き続けていた。

「此処が私の城となる。ふふふっ、ねえ、メアリー。此処が多分、この地上で一番、天空に近くなると思うの。何よりも、荘厳で、何よりも傲慢な城を作りたい」

ルブルは拳を強く握り締める。

「私はまだ、完全じゃない。私は力を復活させなければならない」

巨大な何かが、完成していく。

それは、彼女が住まう御殿なのだと言う。



## 『背徳者・魔女ルブル』

---

冷たい墓標が戦慄している。

此処は一体、何処なのだろうか。空しさによって騒いでいく。

凍土によって、草木は眠っている。この静謐の中で、一人、女は笑っていた。

彼女の名前は、ルブルという。

かつて、魔女裁判によって、処刑されかかった者だ。

彼女は自らの身代わりを何名も立てて、自身が処刑される事は無かった。燃え盛る人間の断末魔を見ながら、彼女は陶醉に耽っていた。裁判により、火炙りにされた者達は、みな、彼女が整形によって、作り変えた者達だった。

誰も、本物の、魔女ルブルを見つけ出す事など出来はしなかった。

やがて、彼女は伝説になった。悪名ばかりが、残滓となって広がり続けた。

敷き詰めた城砦の跡地。

彼女はペンダントを握り締める。それは、彼女の代わりに、生贄となった者達の骨の入ったガラス瓶だった。

酷い激情と殺意に襲われる。

この胸の奥には、悪夢の花が咲いているのだろう。

この大地を呪いながら生きる事に、希望を抱いている。

うねる海嘯のように、小さな氷の刃が舞っている。

暗黒の凍土が大地を貪り続ける。やがて、星屑もまた、闇の色に染まっていく。

きっと、此処は地獄の様相に何処か似ているのだろう。腐蝕が世界を覆っていく。この地上に生きる生命全てが眠るのだろう。

彼女は自らの為に、死ぬ者達が、心の底から好きだった。

愛しい愛しい人達、それらは、全て彼女の物になったのだ。

この凍土の下には、彼女によって殺害された無数の死体が眠っている。

いずれも、まともに人の形をしていなかった。

この人が人の形状を織り成していない姿が、紛れもなく美しい姿なのだと、彼女は思っている

。

地面に亀裂が走っていく。

やがて、所々が盛り上がり、大地が空へと向かって突き出していく。

それは、死体達だった。

まるで、饗宴のように死体が粘土のように、ぐちゃぐちゃに泥土と共に、混ざりながら踊るように空へ向かって浮上していく。

酷い腐臭によって辺りが彩られていく。ルブルは、その香りが酷く大好きだった。

此処は、冷たい地獄だった。

哄笑が唱和となって、続いている。

此処は、この世の果てのような、絶景だった。

この凍て付く程の心を溶かす事など、出来はしないのだろう。

ルブルの純然たる敵意は、一体、何処から来るのだろうか。彼女は冷たい死体が、とてつもなく愛しく思っていた。生きている者を愛する事など出来はしない、しかし、死んでいる者ならば、酷く愛らしく思えたのだった。

彼女は、丸い月を背にする。

満月もまた、哄笑しているかのように思えた。

自分は眠り人形のようなものなのだろうか。時間の止まった中で、ただただ、動き回る腐った死体に憧憬を抱いている。

どうせ、死ねば。みな、無情な死体となっていくのだ。

憎しみも、悲しみも、愛情も、苦しきも、楽しきも、何もかもだ。

あるいは、未来に対する憂いさえも。

ルブルは死体を動かす。彼女にとって、人間の死体はただの素材でしかない。それ以上の価値を見い出してはいない。彼らがどんな人生を歩んできたのか、ルブルにとっては、何の興味も無い。確かに、所々、階級を表すような衣服を身に纏っている者達もいるのだ。そんなものなど、どうだっていい。所詮は、ただの死体に過ぎないのだから。

彼女の眼には、全てが虚構に思えてくる。

全ては、肉の塊みみたいなものなのだ。

彼女は口を開く。それは、虫の声とも、動物の唸り声とも、豪雨や風の唸りにも聞こえた。彼女の口からは、大量の羽虫が吐き出されていく。

彼女が吐き出しているものは、一体、何なのだろうか。それは、彼女の怨念そのものなのか、あるいは、大地に眠る者達の怨恨そのものなのか。それは、彼女だけにしか分からないのだろう。ただ、腐臭ばかりが、この雪原には漂っているのだった。

アंकウの街は、化け物の襲撃によって壊滅した。

彼の父親の死体は、めちゃめちゃになっていた。

思い出だけで、おぞましい。

父親の頭部が、父親自身の頭から生え出してきた軟体動物の触手のようなものによって、破壊されていく光景がフラッシュバックする。

卵でも産み付けられたのだろうか？

アंकウは、その映像を払拭する事が出来ない。

日に、何度も、眼に焼き付いたその光景が頭の中にちらついていく。

彼が為すべき事は、もはやただ一つだけだった。

それは、復讐という概念だ。

もはや、自分が憎しみを向けるべき相手を殺害するしか道は無い。

そんな生き方しか出来ないのだろうと思った。

「何故、俺だけ生き残ってしまったんだろう？ ……………」

背徳者ローザ。

栄華に満ちた、巨大な都市『ディーバ』に君臨する王女。

彼女は、街の支配者だった。

ローザは、ディーバの街に君臨する女帝だった。

彼女の存在に対して、アंकウは感情が洪水のように溢れ出してくる。

アंकウは、敵意に全身が塗れそうだった。

無情な荒野の下、彼はぼうっと大地を眺めていた。

時折、何度も、フラッシュバックのようなものと、強い激情に襲われる。

無力な自分は、一体、これから先、何があるのだろうか。

自分は、どうしようもなく、ちっぽけで下らないんじゃないのか。

復讐を、どうすれば成し遂げられるのだろうか？

何度も、何度も、思考が反復する。

そして、それを拭い去る事は、どうやっても出来そうにない。

……あの敵を、倒す事が出来そうにない。俺は、今もなお。ずっと、恐怖し続けている。

自分の弱さばかりと、対面せざるを得ない。

どうやったって、殺されてしまうイメージしか湧いてこない。

自分が、恐怖の中に飲まれて、死んでいく。

これから先に、進めない。心が完全に折れてしまっている。

何故、こんなに弱いのだろうか？

けれども、逃げる事も出来なかった。どうにもならない。

きっと、これから先の人生は、全て、あの悪魔によって支配されていくのだろう。

逃れたい、けれども、逃れられない。

悪夢が残響して、自分をずっと殺していくのだろう。

だから、明日なんてずっと無い。

後悔しても、何の意味が無い事だけは突き付けられている。

けれども、どうやっても前に進めない。

「あいつ……、あの女……」

背徳者の宮殿まで向かおうとして、途中で、足が竦んでしまった。

一度、意志を紡いでも、いざ、向かおうとすると。折れてしまう。

どうしても、過去のトラウマが枷になって、身動きが出来ずにいる。

悪いイメージしか、浮かんでこない。

自分が敗北するヴィジョンしか、思い描けない。

実際、そうになってしまうのだろう。

敗北するという事は、自分が死ぬという事だ。

もしかすると、無残に生き残るのかもしれない。

十

大嫌いなスフィアは、今も幸せに生きているのだろうか。

そんな事をイメージしてしまうと、憂鬱ばかりに襲われる自分に嫌気ばかりが差してしまう。

自分は、自分の環境を抜け出して、今の人生がある。

そう。

魔女ルブルに仕える毎日、それはそれで悪くない。

ルブルは、そのうち、自分を用済みだと認識して殺害するのだろうか？

けれども、それならそれで、いいのかもしれない。

人生において、必ず、憎しみが積もり積もっていく相手というものは存在するのかもしれない。  
そして、その相手を生涯、赦す事は出来ないのかもしれない。

何故、スフィアは、メアリーにとって、憎悪の対象なのだろう。

それは、メアリー自身にも分からなかった。

ただ、恐ろしい事に、自分は何でも出来てしまいそうだ。

そんな思いに、メアリーは駆られる。

きっと、彼女は幸せな結婚をするのかもしれない。

もしかすると、彼女を支えてくれる男の人に守られているのかもしれない。

自分は、酷く孤独なのだ。

どうせ、檻を破らなくても、小さな世界の中で、ずっと生き続ける運命にあって、檻を破った  
今も、未来は暗渠に閉ざされている。

たとえば、普通の人々のように、恋愛だとかをしてみたかった。

けれども、自分のような存在を受け入れてくれる者など現われるのだろうかとも思った。

どうしようもない程に、強い劣等感に襲われる。

まるで、自分という存在が、本当に下らないものに思えて仕方が無い。

「私は再生する。人々の命と死を代償に。みな、眠りながら起き上がればいい。日は永遠に落ちる。私が終わらせるのだから。みんな、きっと、幸せになれる」

ルブルはうっとりとした笑みを浮かべる。

彼女の両目に灯るものは、高慢さばかりだった。

彼女は、他人の痛みというものが、根本的に理解出来なかった。

彼女にとっては、他人は物質のようなものだった。

ペリっ、ペリっ、と。辺りの地面から無数の腕が伸びていく。

身体が酷く崩れた者達が、雪の底から這い上がってきた。

もはや、年齢や性別などが分からない程に、その原型が崩れ去っている。

メアリーはふと、思う。

彼らは人格を剥奪された者達だ。

全ては、ルブルにとって、人間は動くオブジェでしかない。

ルブルは、ずっと薄ら笑いを浮かべている。

彼女には、全ての人間が自分と同じものには見えないのだろう。

メアリーは、ふと魔女の横顔を見て思った。

おそらく彼女は、幼稚な部分も強いんじゃないのかと。

どうしても無い程に、強い無邪気さが、漆黒の悪意となっている。

ルブルは、世界の全てを自らの掌の中に収めたがっている。

メアリーは、自身のマルトリートと、ルブルという君主の存在を、絶対的に自らを安心に導くものだと思っている。

だから、安心して、他の者達を踏み躪っていける。

自分を馬鹿にしてきた世界なんて、幾ら壊しても構わないのだ。

死は終わりなのだろうか？

メアリーは、ルブルの作り出すゾンビ達を見ながら思う。

死んだ人間を容赦無く冒涇するルブルの眼には、この世界はどのように映っているのだろうか。

。

彼女には、他人の感情だとかいうものが分からないのかもしれない。

他者の肉体を玩具のようにして弄ぶ様は、まるで、人間そのものを小さな虫のように思っているのだろう。

『魔女』という名前が示す通りなのだろう。

ただ、間違いなく分かっているのは、メアリーもまた、彼女の何かに共感しているという処だ。

。

自分の中にある真っ黒な感情が、ルブルと共にいる事によって、増大していく。

自分の深淵に巣食っている怪物が肥大化していく。

もっと、沢山の者達の血を見たい。叫び声を聞きたい。

何故、こんなにも人を憎めるのだろうか？

ルブルは、地上の意思ある者達全てを支配したがつている。

彼女は女王として君臨したいのだろう。

そして、彼女は他人の意思が気持ち悪いと思っているに違いない。

自分の持っている考えだけが絶対なのだと思っているのだから。

驕りばかりが、彼女の精神を形成している。

彼女にとっては、全ては継ぎ接ぎの出来る人形なのだ。

手足を組み替えて、意のままに操る事の出来る人形に過ぎないのだ。

人間なんて、全部、粘土細工みたいなものだ、と彼女は言う。

彼女は創造者なのだと同言う。

だから、彼女は死体を作りたがる。

自分以外の全ての者達が死体である事を願いつける。

ルブルは言う。自分は、一人の人形作家でもあるのだと。

やがて。

ルブルが氷結した地面の下にて、封じ込めていた死体達は粘土細工のように、ぐちゃぐちゃに変形して、次々に折り重なっていった後、それは城の形へと変わっていた。

それは、巨大な城で、様相も貴族達の住まう城館をそのまま再現したような形へと変わっていた。

ルブルはそれを見て、無邪気にはしゃぎ回る。

「ねえ、この城の周りに、街も作りましょう？ そうね、雪の亡霊から名前を取って、“ウィンディゴの街”というのはどうかしら？」

魔女はとてつもなく、楽しそうだった。

まるで、子供が無邪気にままごとをしているような感じだ。

## 十

メアリーは、ルブルの城の中を歩いていた。

城の中に、不自然さは無い。少しだけ、ランプの明かりなどが乏しくて、陰気でこそあるが、とても死体から作り上げたものとは思えなかった。

「クルーエル」

彼女は天井に向かって呼び掛ける。

天井では、何か得体の知れないものがわっさわっさと轟いていた。

「私と一緒に来ない？ 私はグラニットだけじゃない。他の街も破壊する。ディーバがいい。ローザとやらを殺害したいとルブルは言っている。ルブルの目的が、私の人生の目的に変わっている。それはとても良い事なのだと思う」

ディーバ。

グラニットから、遥か遠くに離れた街だが、それは巨大でこの辺りの地方の中では、大きな栄華に満ちている城砦都市なのだと聞かされている。

詳しくは分からないのだが、軍隊を殆ど使わずに、他の街を支配下に置いて、その富や資源などを貪って、吸収してしまっているのだと。

あそこも、不気味な場所だとされている。

そして、あそこを支配しているのは、虚空の姫君ローザという名前の魔女なのだ。

メアリーは唇を歪めた。

「スフィア……私の下に来るのかしら？ とてつもなく、楽しみなんだけどね」

冷気が舞う。

メアリーはこの世界を呪詛している。

何故、こんなにも、この精神が歪なのか分からない。

どうしても、この世界を受け入れられそうにない。

そして、きっとスフィアは大嫌いなものの象徴なのだろう。

「私はきっと、ある意味で言えば、世界一不幸なのかもしれない。そして、おそらくは、自分が不幸だと思う人間は、誰もが自分が世界で一番、不幸だと思っているのかもしれない。そう考えると、きっと、この世界はとてつもなく愛するに値する」

メアリーの背後で、煙のようなものが立ち込める。

彼女は、その怪物の姿を知らない。

ルブルだけが、知っている。

そいつは、完全に謎に包まれているが、メアリーにはそれ程、興味が無い。

ただ、ルブルが数百年の間、唯一、共にしてきた存在なのだとは言っている。

「行くわよ、クルーエル。過去の魔女が今の魔女を粛清する。進軍を始めましょう。多分、ルブルと私が似ているのは、他人が絶望する事によって、相対的に幸福になれるという事。だから、不幸の芽を撒いていこうと思う。大いなる呪詛を」

天井から、幾つもの腕が生え出してきた。

そして、それらは何かを掴もうとしながら、痙攣している。

しゅうしゅうと、醜悪な声を上げて、死人達が、クルーエルの存在に怯えているかのようだった。

「それにしても、貴方、変わっているわねえ」

ルブルは、自分に仕えたいと望んでいるメアリーに対して、不思議な顔をしていた。

「何で、私を蘇らせたのかしら？ 私のお話は聞いて知っていたんでしょ？ ねえ。私には、生者なんて、いらなのよ？ 私は死者をみな、この手で操る事が出来る。私に生きた人間なんていない」

「そうですか。……でも、それでも、私は貴女にお仕えしたいのです。私は、私の望みがあるから。それに、貴女になら、殺されても、私は自らの運命を認める事が出来る。……………」

メアリーは、極めて、自己破壊的で破滅的な事を口にする。

自分の命の価値に、彼女は極めて、迷っていた。

「あらそう？」

加虐的な微笑。

「じゃあ、私に右腕を差し出してくれない？」

ルブルは酷薄な笑みを浮かべる。

「貴方は、今日から。生きた人間として、私に仕えるんでしょう？ 私には、本当は生者はいら  
ないのだけれども。特別に、貴方を私の右腕にしてあげる、どう？」

「お言葉ですが、それでは貴方のお世話が出来ません……」

「あら？ 別に私はどちらでもいいのよ？ それに、右手が無くても、左手があるじゃない？  
貴方は、そのくらいの事も出来ないの？」

まるで、最後通告のようだった。

「やりなさい、メアリー。貴方が人を殺した覚悟はその程度？」

メアリーは。

仕方無く、自らの右腕をルブルの前に出す。

しゅん、という音がして。

血しぶきが舞って。

メアリーの右腕が切断された。

メアリーは、激痛に身悶えて、今にも発狂しそうになる。

「大丈夫。よく、決意してくれたねえ。貴女には、新しい右手を上げる。死体の中からだけれ  
ども、それは、貴女の肉体を蝕んでいって。貴女を別の生き物に変えるでしょうけれども。別に  
貴女は死ぬわけじゃない。意思も残る。大丈夫よ」

ルブルは、そう言って。優しく、メアリーを抱き締める。

「じゃあ、行って。ローザを倒して、支配権を得るの、私達で」

そう言いながら、ルブルは死体から作り上げた新しい右腕を、メアリーへと接合する。

ああ、これで、彼女から、逃れられなくなったなあ、とメアリーは心の中で思ったのだった。

## 十

ローザは宮殿の奥で、本を開いていた。

それは、ディーバ中を俯瞰出来る地図だった。彼女は、自分の思うように、ディーバという街  
を設計していた。

色々なポイントに印を付けては、貧困になりそうな家庭、諍いが起きた場所を調べ上げて、ど  
うすれば、その渦中にいる者達の不幸を取り除けるのかを、つねに思案している。

ちなみに、ローザは。

この部屋の中に。

此処に来る者達は、“婚礼の儀式”と称して、容赦無く殺害している。

何故ならば、大抵の場合、そいつは彼女を殺そうとしにくる暗殺者だからだ。

彼女が支配した、他国から派遣されてくる殺し屋ばかりだからだ。

彼女が城を出る事は殆ど無い。

全て、配下の者達に手を下させている。

ぞぞっ、という不可思議な音がして。

何処からともなく、虚空から一人の人間が現われた。

そいつは、彼女の寝室の中にドアを開けずに入ってくる。

ドアを開けずに入ってきた者は、ローザは始末しない。彼女の重要な配下であるからだ。

「あら、ヘリックス。どうしたの？」

ぼわり、と。

ヘリックスと呼ばれた者は、辺り一面に渦を巻いている雲を漂わせていた。

「気温が、何か変なのです。ディーバに近付いている者がいる。どうします？」

「任せる」

ローザは、それだけ告げた。

空間が歪み。

部屋全体が、どろどろに溶けていく。

そしてその後、空間が歪み、捻じ曲がっていった。

二人の能力者は、その存在だけで、この世界の理を歪めていた。

## 十

「贅沢な悩みかもしれないけれども、俺は自分自身の過去を乗り越えられず、幸せになるのを拒もうと思っている。おそらく、それが自分に課した生涯の誓約なのだろうから」

彼は、一人、そんな事を呟く。

時折、甘い夢に浸ってしまいたい時が多い。

けれども、現実の世界は闇の色に染め上げられている。

たった一つの願いだけが叶えばいい。それ以外は、何もいらぬ。

楽な道なんて、望んでいない。

自分の決めた道しか向かうつもりはない。

彼は、街中を歩いても、何をやっても。復讐の念に思いが駆られていた。

成し遂げるまでは、決して自分の人生など、在り得ないのだと思った。

別の幸せの方法は、幾らでも模索出来る筈なのだ。

けれども、自分自身の戦いを終わらせるつもりなんて無い。

いつだって、悪夢が這いよってくる。

これから先も、失っていくものは、とても多いのだろう。それは、とても寂しいものなのだが、どうしようもないものだ。

日々、無駄な時間を過ごしている。きっと、自分は成し遂げるまでは、無為そのものなのだろう。

他人から差し延べられた優しい手を、振り払って、前に進むしかない。

自分に与えられた使命は、自分だけのものなのだろうから。

街頭の明かりが、眩しく見える。

みなで、馬鹿騒ぎを行っている者達に、心の底から交わりたいとも思っている。

けれども、自分は自分でしかないのだとも思っている。

明日も、自分は生きているのだろうか。そんなふと、空虚な感覚に襲われる。

あの日から、自分の両目に映る映像は、どんよりと濁っている。

この忌々しい膜に覆われたような感覚から抜け出す事が出来ずにいる。

酷い閉塞感に襲われていた。

未来へなんて進めない。

過去と戦わなければならないのだから。そして、過去を忘れる事の方が、ずっと辛く、苦しいのだから。

時間が傷を塞いでくれるのかもしれない。

それでもだ。

もう、癒えた筈の傷も、きっとずっと抉り出すのだろう。

幸せだった頃の時間を思い出す。

家庭の事だ。

自分はぼんやりとだけども、平凡を生きていくのだと思っていた。

深く思い悩まずに、生きていて、それがどうしようもない程に当たり前だった。

けれども、そんな当たりの人生なんて、完全に壊れてしまったのだ。

自分は、孤独なんだと思う。

たとえば。

酒場にて、仲間達といると。ふと、どうしようもない程の、孤独感に襲われる。

多分、それでいいのだろうと思う。

孤独感とか、疎外感とか、感覚のズレだとか。そういったものが、自分の戦う意志へと変わるのだから。

幸せな自分が、絶対に赦せないのだろう。

きっと、引き受けなければならないものが、重過ぎるのだから。

人生は、終わってしまった後でも、続いてしまう。

終わるべき瞬間に、終われなくても続いてしまう。

自分は、家族を追って自害するべきだった。

しかし、出来なかった。それは、自分のどうしようも無い弱さからだ。

何故、自分を赦せないのだろう。こんなにも、無力過ぎて、自分が衰れに思えて仕方が無い。

こんなにも、折れそうなのに、どうすれば明日を築けるのだろうか。

弱さを乗り越えようにも、乗り越え方が分からない。

ローザとは、必ず対決しなくてはならない。

あの化け物を、自分の力で倒さなければならない。

しかし、自分はどうしようも無い程に、無力なのだ。

それだけは、突き付けられた事実なのだ。

あの化け物の宮殿に近付かなければならない。

けれども、近付けない。いつだって、逃げ続けたくなる。

そんな自分の弱さを乗り越えなければならないのに。

戦って、たとえ、自分が死ぬ結果になったとしても、悔いの残ったままの人生を生き続ける方が、よっぽど苦痛だというのに。

自分の弱さから、抜け出せない。

あの化け物のせせら笑いを思い出す度に、足が竦んでいく。

街中を、ずっと歩いて酒を飲み歩きながら、自分が何で、こんなに下らないのかと思考し続けている。どうやっても、自分の恐怖心を克服する事が出来はしない。

強くならなければならないのに。

自分自身を超えなければならないのに。

何故に、恐怖は、こんなにも自分を弱くするのだろうか？

酒を飲んでいる時は、甘い誘惑の中に落ちていける。

その中では、現実の自分の苦しみが引き離されていって、何処までも、何処までも、夢の中へと埋もれていけるような気がした。きっと、直面するだけの強さは初めから、自分には無かったのかもしれない。

ふと、目を覚ますと。酷い、自己嫌悪に陥って。それから、深い絶望へと突き落とされていくような気になる。心の奈落から、抜け出したくない。

生きたい……という、強い欲望が、復讐の感情を邪魔するのだろう。

けれども、決して、悪夢から逃れる事が出来ないのも分かっている。

もうすぐ、冬の季節がやってくる。

あれから、二年くらいの月日が流れたのだろうか。

そういえば、雪が降る日だったような気がする。

あの日から、自分は孤独を生きる事に決めたのだ。

まるで、何も無い。今の自分は、強ささえも、手に入らないのだろう。

全ての色彩が消えていき、後に残ったのは、ただ真っ白だけなんじゃないのかと。

何故、こんなに寒気が止まらないのだろう。

城館が聳え立っている。

そこから、先には行けない。

兵士達は、誰もいない。

それなのに、この城には、確かに強固な警備が為されているのだ。

足が竦んで動けない。

もしかすると、もうすでに、アンクウの存在を知られているのかもしれない。

死のイメージが、明滅するように、過ぎっていく。嫌でも、戦場に出掛けなければならないのだと自覚させられている。

死の先には、一体、何があるのだろうか？

もし、死後も意識が残るのだとするのならば。

父は、母は、兄は。今、どんな風になっているのだろうか？

自分が死んだ後、どうなるのだろうか？

何故、こんなに怖いのだろうか。まだ、生きていたいと願っている。

本当は、戦って死ぬべきなのに、まだ呼吸を続けたいと思っている。

どうすれば、希望は見てくるのだろうか？

どうやっても、希望は暗闇の中に閉ざされている。

今にも、凍え死にそうで。いっそ、死んで眠りについてしまった方が、どれ程、楽だというのに。それでも、今もなお、死ねずにいる。

多分、自害出来る事も、一つの強さでしかないのだろう。

こんなに絶望しているのに、まだ、希望を妄想的に思い描くのは何故なのだろう。

まず、この道では、幸せになれないというのに。

多分、どうしようもなく、怖い事が、今もなお心に刃を突き刺している。

アンクウの能力『ソリッド・ヴァルガー』は、空間の一部を削り取るように、切り刻む事が出来る。

まるで、自分自身の心の断片を、削り取るように。

自分自身を、削り取るように。見える景色を、削り取るように。

彼は、一定の空間を、削る事が出来るのだ。

それは、どれ程の致死率があるのだろうか。

鉄骨や岩盤などは、鋭利に刻む事が出来たし、壁の向こう側を飛び越えて、刻む事も可能だった。

削り取れる部分が見え始めた。

自分の力の形を知る。

## 十

ルブルから、切り落とされて、別の右腕を接合されて、その違和感が無くなった。

右腕は、今や自分のものとして、ちゃんと機能している。

それにしても。

人が魔女になるまでには、一体、どのような経過が必要なのだろうか。

メアリーは、そんな事を考えていた。

ヴィシャスの街は、虚空の姫君ローザによって、ぐちゃぐちゃに蹂躪されてしまった。

その時の様子を伺おうと思って、メアリーはヴィシャスの街を訪れていた。

どことなく、此処は、世界の終末を彷彿させるような場所だった。

住民の一人一人は暗鬱な顔をしていた。

彼らは酷い絶望感に襲われているかのようだった。

メアリーは、街の一角で昼間から酒を飲んで寝転がっている男に訊ねた。

「ローザってのは、何者だったの？」

男は、安酒の瓶を投げて、メアリーの問いにすぐに応じてくれた。

「あれは……夢魔だ。眠っている時にも、あいつはやってくるんだ……。お前、外からやってきた者か？ ……すぐに、此処から出て行った方がいい。もうすぐ、俺達は死ぬ。分からないけれども、俺達は、この街を抜け出す事が出来ないんだ。……多分、そういう呪いが掛けられているんだよ。……狂っていくんだ、徐々に……」

男は嘆き悲しんでいた。

メアリーは首を傾げた。

「私も……同じような、化け物の力を持っているのだけれども」

彼女は慎重に、男から情報を引き出そうとする。

此処の街に住んでいる住民は、何かがおかしい。

そう言えば、この街には女の姿が無い。

「女の人は何処にいるのかしら？」

「……………女達は、みんな、街を出れた。子供も。けれども、大体、二十を過ぎた頃の男だけが、街を出る事が出来ない。みんな、姫の既婚者になったんだ。食べられる……、食べられるんだよ、俺達はもうすぐ……、次は誰なのか分からない」

「ふうん……？」

メアリーは、やはり首を傾げていた。

ルブルに報告しようか。

ローザとかいう敵の能力の全貌がよく分からない。

鞆の中が、ぎちぎちぎちぎちと鳴り続ける。

メアリーは、鞆を開く。

すると、中で、くちゅくちゅっ、という音がしたかと思うと、何かが空ろな顔をして、ぼんやりとしている男に向かって発射される。

すると、たちまちのうちに、男の身体は変色していく。

「……クルーエル、駄目でしょう。今のは敵じゃない」

メアリーは軽く溜め息を吐いて、鞆を閉じた。

「仕方無いわね、まあ、貴方は運が悪かったと思って諦めて。良かったじゃない、死の恐怖から解放されて」

メアリーは、街の別の住民から情報を引き出そうと思った。

先ほどまで、メアリーと会話していた男は、まるで、彫刻家が石から創り出した芸術品のよう、その場所で石の像と化して佇んでいた。

十

メアリーは、雪原の中を歩き続ける。

彼女は、小さな人形を手にしていて。

人形は、ギチギチッと、時折、動き続ける。

「クルーエル。人が食べたいのね。もうすぐよ」

彼女は冷たく笑う。

……クルーエルは城から出られない。だから、彼の肉体の一部だけを外に出すしかない。そう、この人形の眼は、クルーエルの眼球だった。

クルーエルは、ルブルにとって、お気に入りの存在だ。その正体は、何なのか、彼女は教えてくれない。ただ、強大な戦力になるとだけ言ってくれた。

ディーバにもうすぐ辿り着く。

何だか、高揚感が湧き上がってきていた。

吹雪が強くなっていく。

肌が、少しだけ痛い。

ディーバにあるローザの城を目指している、まずは世界の支配を得るには、そこから始めようと思っている。

ルブルは、全てを欲しがっている。この世界にあるもの全てをだ。

彼女は無邪気な子供のようなものだ。この世界全てを遊技場にしたいだけだ。

「……私には分からない、人生よね」

メアリーはふん、と鼻を鳴らす。

渡された地図通りに目的地に向かっているのだが、一向に辿り着けない。

それに、この寒さで頭がおかしくなりそうだった。

強い眠気もしてくる。

吹雪の中には、一人の男が佇んでいた。

彼は法衣のようなローブを身に纏った老人だった。

雪が渦を巻いていく。

「ふーん、貴方は何かしら？」

メアリーは訊ねる。

「氷帝と呼ばれておる」

老人は淡々と答えた。

空気中に、ぽつり、ぽつりと、青白い火の玉のようなものが出現する。

「ふうん？」

メアリーは、首を傾げていた。

この世界には、自分やルブルのような異質な力を使う者達が多く存在する事を、ルブルから聞かされている。そして、ルブルは自分の右腕として動く以上は、他の異質な能力の使い手くらいメアリーだけで始末して欲しいのだと告げていた。

メアリーは、自分の力である『マルトリート』が、どの程度、強いのか分からない。

実戦が必要なのだとルブルから言われている。

メアリーは、自身の能力であるマルトリートを発動させる。

ひよおおおおお、という音が響いていって、辺り一面に水の泡のようなものが浮かんでいた。それは、吹雪と混ざっているのだが、どうやらその水の泡は、老人が作り出す何かの現象のようだった。

吹雪が荒れ始める。

空気中に浮かんだ青白い火の玉の数が増えていく。

「貴方はローザの配下？」

メアリーは訊ねた。

「その通りだ。もっとも、わしごときには姫君には近付けないのじゃがな」

「ふうん」

地面が揺れ動いている。

天空に、大きな水溜りのようなものが作られ始めている。

メアリーは、この敵が、一体、どんな事を行っているのか判断に迷ったのだが、しかし、彼女は自らの力には、絶対の自信があった。

メアリーは。

襲い掛かる水の刃を、実体化した氷の壁によって防御する。

自身の異質な力『マルトリート』の使い方は、何度もイメージしてきた。

空中に、朦朧とした大きな剣が現われる。

そして、その剣を、空中で自在に回転させながら、老人の肉体に切り付けてみた。

すると、老人の肉体が、ぐにやり、ぐにやりと曲がっていく。

ばしゃあっ、と老人は液状化していく。

「あら、貴方の身体は水で出来ているのかしら？」

老人の全身が弾け飛ぶ。

そして、無数の水の刃となって、メアリーの下へと襲い掛かっていく。

メアリーは、既に実体化させていた幻影で作った氷の盾によって、それらを受け止めていく。

ぼうっと、辺りにある火の玉達が揺らめいている。

それらは、まるで、メアリーの行動の一挙一動を伺っているかのようだった。

突然。

火の玉の一つが、弾け飛ぶ。

すると、メアリーを覆っていた氷の盾の一部が大きく破壊された。

「……なっ……………」

彼女は心理的に、かなり動揺していた。

同じような力の使い手と戦うのは、これが初めてという事になる。

ルブルから、色々、教えられていた。

これまでは、一方的に、自分が力を使い続けて他人を踏み躪るだけだった。

しかし……。

また、火の玉の一つが破裂する。

メアリーは、急いで、幻影の作成に取り掛かっていた。

自らを守る盾が、どんどん壊されていく。

心なしか、胸の動悸が激しくなる。

グラニットの街の住民を殺して回った時から、彼女は自らの命もまた、極めて虚無的なものに

感じていた。ルブルを恐れなかったのも、そういった彼女の精神の酷い空しさがあるからだった。

しかし、今は、この敵に殺されたくないと強く思っている。

この程度の存在など、自分の命を捧げたくはない。

「ふん」

メアリーは、どんどん、幻影を生み出していく。

幻影の実体化には、多少の時間が必要となる。

一つの幻影による実体化の攻撃化が無効化された場合、次の実体化した幻影を送り込まなければならない。彼女は幾つも多重に生み出した幻影を操作する事によって、タイムラグによる弱点を克服していく。

気付くと。

一面は、大きな水の渦によって、覆われていた。

メアリーは焦っていた。

自分の命の灯火が、少しずつ、削られていくような気分だ。

自分の強さがどれだけなのか分からない。

そもそも、同じような力の持ち主と戦った事なんて無い。

自分は一方的に、相手をいたぶる人間でしかなかった。

「私は……まだまだ、覚悟が足りないのかしらね？」

このままだと、確実に敗れるだろう。

死ぬかもしれない。

少なくとも、敵は彼女を生かして帰すつもりなんて無いのだろう。

敵が一体、何をやっているのか分からない。

それは、致命的な事なのだろう。

これから討伐しようと考えているローザの能力が何なのかさえも分からない。

気付くと。

人形が、くるくると、踊るように動いていた。

辺り一面が石化していく。

クルーエルが、暴れ回っている。

空気も、風も、雪も、地面も、次々と石と化していく。

メアリーは、クルーエルの能力に巻き込まれないように距離を置く。

デス・ウィングは、スフィアという少女と関わっているうちに、不思議な気分を駆られていた。

もし、純粋な善意の形があるのだとするのならば、それは一体、どういう事なのだろうか。善意と悪意は別々のものなのだろうか。

もしかすると、善意と悪意は表裏一体のものなのかもしれない。

少なくとも、スフィアは察するに、彼女の善意を下に。メアリーという女は、彼女から、悪意的なものを感じ取って、スフィアの目の前でグラニットの住民達を焼き殺した。

人間の好意は、あっさり悲劇へと転じていくのかもしれない。

友愛だとか、他人に対する想いだとか。

そういったどうしようもないものによって、この世界は成り立っているのかもしれない。

「善を為したいだとか、悪を為したいだとか言っても。全ては無為なのかもしれないな？ 私は彼女達から、何を視ようとしているのかな？」

どんな風に、人間というものの精神が成り立っているのかを知りたいのかもしれない。

彼女達が歪な例外なのか。それとも、人間はみな、普遍的に歪んでいるのか。

「スフィアはメアリーという女の事をどう思っているのか……。私は、彼女達の行く末を見守っていようと思うのだが」

ことり、と。

デス・ウィングの隣で、何かが音を立てた。

ぼんやりと、陽炎のように、そいつは揺らめきながら立っている。

そいつは、何処の国の物が分からないドレスを纏った美少女顔をした、美少年の姿で、そこに佇んでいた。

そいつは、デス・ウィングだけが見える存在だ。

他の者の目には映らない。

「お前は どう思う？ 『他人の死』」

他人の死と呼ばれた者は、くっくつと笑い続ける。

「さあ？ どうなんだろうね？ 君は死が無いからね。死が無いから、憎悪だとか愛情だとかも分からないのかもしれないよ？」

「まあ、私は私が何の為に生きているのかまるで分からない。とっくの昔に、死んでいい筈なのにだ。生きる事に目的なんて無い。ただ、私の存在は無為そのものだ」

「そうなんだねえ。君は物凄く、不遇なんだろうねえ。ふふふふつ、本当に欲しいものが手に入らないから。死を感じるものばかりを、コレクションしているんだよねえ」

「まあ、そうだな」

彼女は、的を射た事を言われて、少しだけ不快そうな顔になる。

「いい加減に、自分が何で存在しているのか分からない。だからなのだろう。他人の行く末を見たいと思っているのは。まあ、大体、もう人間なんてものは、つまらないものだとも思っている

のだけれどもな」

デス・ウィングは、少年の顔も見ずに、そんな事を喋り続ける。

「そうだな。きっと、人間は寿命があるからこそ。他人と比べたがるのかもしれないな？ だからきっと、栄光だとか、地位だとか、物質だとかに縋り付くのかもしれないな。その場限りの愛情だとか、憎悪だとか。そんなものかもしれないな」

「そうだねえ。私も分からない。私も死が無いからねえ、いつだって、死ぬってのは、他人の死だからねえ」

二人の異形は、それぞれ、別々の歪な笑いを浮かべ続けた。

「他人の死、私はお前が嫌いだよ」

デス・ウィングは、そう端的に告げる。

「まあ、そうだろうね」

そう言われて、奇妙なドレスを纏った美少年は、闇の中へと消えていく。

+

雪原での光景を見ていた者がいた。

それは、少年だった。

少年は、少しだけ、冷や汗を流していた。

城の守り人の一人である、氷帝は、必死で、敵の猛攻から逃れてきたらしい。

彼の肉体は、水で出来ている。

その彼の肉体の大部分が、石と化していた。

彼は、石となった部分を少しずつ切り離して行って、自分の全身を修復させるつもりでいるらしい。

「凄いなあ。ローザ様、慌てふためくかなあ？」

しかし、氷帝の話聞いて、敵の能力は大体、読めてきた。

「となると、対策取るしかないよなあ」

少年は、城の中にある階段の横へと潜んでいく。

階段の下には、溝があった。彼はそこに潜り込んでいく。

ずずずっ、と。彼の肉体が捻じ曲がっていき、溝の底へと沈んでいった。

+

スフィアは、今、自分の心をとて整理し切れそうになかった。

自分が、今、何をどうしたいのか分からない。

ただ、酷い情景ばかりが記憶に焼き付いている。

今、別の世界に放り込まれたような気がしてならない。

昔に戻りたいと思ってしまうている。

何が間違っていたのだろうか？ 何もかもが、分からない。  
家に残った食べ物を漁って、日々の時間を潰している。  
これから、どうすればいいのだろうか。  
水月が、道筋を指し示して上げるのだと言っている。  
メアリーとの対決が必要なのだとも、彼女は告げている。  
けれども、前に進む事が、とても出来そうにない。  
ただ、毛布の中で震えながら、何かに対して、祈る事しか出来ないでいる。  
自分は、どうすればいいのだろうか。  
とても、前に進めそうにない。  
もう、考えるのを止めにしてしまいたい。  
このまま、雪の中に埋もれて凍死してしまってもいいのかもしれないと思った。

十

ルブルはこの世界を軽蔑している。  
人を物体としか思えない。  
だから、人間は自分よりも、いっそう、下位の存在なのだと認識している。  
自分は他人を支配して、当然なのだと知っている。  
人間なんて、動くゴミみたいなものだ。  
そう、大き過ぎる力を手にしてしまった瞬間に、他の者達がゴミのように思えて仕方が無かった。  
人間に対する愛情を、どうしても抱く事が出来ない。  
しかし。  
あのメアリーとかいう女は……。  
ルブルは、柄にも無く、小さく溜め息を吐き出す。  
ルブルは考える。  
彼女には、間違いなく“素質”があるのだろう。  
メアリーの思考回路は、普通の人間のそれを逸脱しているとしか思えない。  
つまり、それが何を意味するのか。それは、素質があるという事なのだ。  
そう、魔女になれる素質だ。

十

人間は、何故、こんなにも権力だとか地位だとか。  
あるいは、自分の欲望を叶える事だとかに縋るのだろうか。  
デス・ウィングには分からない。  
彼女には、愛するという概念さえもきっと無い。

他人と交友を深めても、酷い空虚感に襲われていく。

思い出すのは、社交界での出来事だった。

自分は、女としての商品なのだと気付いたのは、いつの頃だろうか。

物心付いた頃には。

別に、自分に性別なんてものはいらなかった。

だから、自分の容姿が酷く醜いものだった。

この肉体を捨て去る事は、いつの日か出来るのだろうか。

『背徳者』という概念は、人間が人間と思えないという事なのだろう。

人間を道具か何かだとしか思えない。

この世界に背き続けるという事、それはこの世界のシステムの何もかもを、呪い、蔑み、自分の道具でしかないと思いつけるという事なのだろう。

## 十

クルーエルの能力によって、冷気を遮断する洞穴のようなものを作った。

メアリーは、先ほどの敵によって付けられた傷を癒していた。

水の刃によって、左腕と左脚に酷い傷を負っている。

仕方が無いので、傷薬などを幻影で創り出して、傷の上に塗っていく。

「私は何でも、生み出す事が出来る」

そして、幻影で創り出した消毒液で傷口を洗い流すと、布の切れ端を傷口に巻いていく。

これから先の戦いで、もし、手足を失う事になったら。義手義足の代わりに、幻影で、手足を動かすのだろうか。

やはり、苦痛というものは、自分の心をへし折りそうになる。

とにかく、戦いの経験が欲しかった。

自分と同じくらい強い奴、あるいは、自分よりも遥かに強い奴を前にすると、まるで自分は歯が立たなくなるのだろう。

彼女は、隣に置いてある人形の髪を優しく撫でる。

それにしても、今回はかなりクルーエルに助けられた。

彼がいなければ、先ほどの戦いで死んでいたんじゃないだろうか。

「さすが、ルブルの切り札だけはあるわね……」

クルーエルの正体は、メアリーもよく分からない。

ルブルいわく、自分よりも強力な能力者なのだという。

メアリーが分かっている事は、クルーエルは、辺り一面に石化ガスを撒いていくという事だ。

「ううっ、それにしても寒い」

彼女は、幻影で炎を生み出していく。

そして、ふうっ、と溜め息を吐いた。息が白い。

そういえば、怪我のせいで、何だか身体が酷く弱っている。

何だか、お腹も空いてきてしまった。

「クルーエル、一度、戻ろうかしら？ 食料もまともに持ってないしね」  
そう言いながら、彼女は鞆の中から、乾パンを取り出して口に入れていく。  
そういえば。

スフィアは、今、何処で何をしているのだろうか。

悲しみながら、自分を憎んでいるのだろうか。

十

たとえば、今、分かっている事は。

絶望は、全ての生きる原理を見失う。

今は、何だか呼吸するのも苦しい。

スフィアは、数日もの間、色々な事を考え続けていて、結局、誰も助けてはくれないんだという事を理解し始めていた。

だから、自分から動くしかないのだろう。

スフィアは、水月の下へと向かおうと思った。

水月は、もし、スフィアがメアリーと対決する覚悟があるのならば、手を貸すのだと言っていた。それ以外に、選択は無いのだろう。

「私、どうすればいいのかな……」

幾ら迷っても、物事は何一つとして、動いてくれそうにない。

物事を動かすには、自分がただただ、動くしかないという事だけは分かっている。

ただ、どうしようもなく、怖いのだ。

メアリーの事を考えるのが、怖い。

多分、メアリーは。これからも、沢山の人々を殺し続けるのだろう。

何故、彼女はあんなってしまったのだろう。

幾ら考えても分からないのなら、直接、また彼女と話をするしかない。

全ての結論は、とっくに出ているのだ。

自分が動き出さないと、どうにもならない。

自分で、何かを決断出来るようになれるのだろうか。

そういえば。

ずっと、メアリーに対して、憧れの念を抱いていたような気がする。

もしかすると、それが返って、彼女にとって酷く不快だったのかもしれない。

十

死にたくない。

百年生きていても、二百年生きていても、そう思えてしまう。

ローザはその為に、人を食い続けている。

彼女は若い男達を使って、自身の肉体を保持し続けている。

そうやって、彼女の寿命は延び続けていく。

ヘリックスの存在が、彼女の支えになっているような気がする。

とてつもなく、心の支柱になっているような。

「私は、きっと、彼がいないと駄目ね」

彼女は自嘲的に笑う。

ぼうっと、そいつは姿を現す。

そいつは、ゆったりとした、黄金色のローブのような絹の服を上着に纏っていて、ひらひらとした形のズボンを履いていた。

「ヘリックス、おかえり」

「どうも、ローザ様。あのですね、此処からx地点に、奇妙な街を見つけたので、そこに“印”を入れておきました。僕はそこに次元移動で行ける筈です」

「そう、貴方はとても頼りにしている」

ヘリックスの役目は、あらゆる街を“食卓”にする際に、その下調べとして、向かって貰う事だ。そして、彼はいつも“印”を付けていく。

印とは、ローザの能力を送り込む事が出来る事を意味している。

「ああ、でも、不思議なんですよ、その街。大きな城もあって、最近、蜃気楼のようにいきなり出来たんですけれども」

「不思議？ 何故？」

「人の“生体反応”が感じられないんです。だから、貴方の力で“食卓”に変える事が出来ないかも……」

「ふうん？」

ローザは、それを聞いて、首を傾げていた。

## 十

自分の存在理由は何なのかと、デス・ウィングは考えていた。

他人の人生を眺め続ける事なのだろうか。

足音が聞こえて、目を覚ます。

廃墟の窓から、外を見た。

すると、一人の少女が此方に向かってきていた。

スフィアだ。

「おや？ 決断は出来たのか？」

「う、うん」

彼女は、強い眼差しを浮かべていた。

彼女は、自分の意思が薄弱なのだろう。けれども、これから積み上げていかなければいけない

のだろう。

彼女は、強くなろうと考えているのだろうか。

デス・ウィングは、心の中で嘲笑う。

少しだけ、彼女がより、壊れていく様を眺めたくなくなった。

「さて、お供するぞ？ 行こうか、仇討ちに」

「……仇討ちじゃないよ」

「そうなのか」

「うん。話し合い。それが一番、いいんだと思う」

デス・ウィングは、廃墟の外に出る。

そして、大きめの鞆を肩に背負っていた。

「じゃあ、行きましょうか。占いによれば、西に向かうのがいいと出ている。きっと、そこに彼女はいるのでしょう。おそらく、魔女の方も」

デス・ウィングは、とてつもなく、楽しい気分になる。

この少女は、一体、どうなるのだろうか。

「ねえ、水月さん」

「何だ？」

「私、前の生活を取り戻せるかな？」

「さあ？ メアリーとかいうのは、自由を欲したんだろうな。きっと、お前とは根底から、価値観が違っていただろう。まあ、どんなに仲が良いように思えても、何もお互いを分かっていた。それだけの事なのだろうな」

感情のズレを直さなければならないと思った。

何処で、間違えてしまったのか知らなければならない。

だから、対決というよりも、対話なのだろう。

スフィアは、もう既に、メアリーの行った事を赦していた。

ただ、メアリーに対して、強い罪悪感があった。

けれども、ふと思うのは。

メアリーを赦せなくなる日が来るのだろうか。

彼女を憎んで、殺してやりたくなる瞬間が訪れるのだろうか。

そうやって、憎しみの連鎖の渦の中に、自分も放り込まれるのだろうか。

それが酷く、怖かったりする。

## 十

アンクウは思う。

復讐に生きない人生があってもいいんじゃないのかと。

彼は、十九年生きている。もうすぐ二十歳を向かえる。

ローザの能力は、二十歳前後の男に効果があるというのが有力な説だ。

自分は攻撃を受けなかった。

そして、街から抜け出す事が出来た。

ディーバの街へと辿り着いた。

街には、巨大な塔のようなものが聳え立っている。

その塔の何処かに、背徳者・魔女ローザは潜んでいるのだ。

自分の『ソリッド・ヴァルガー』はどれだけ有力なのだろうか。

分からない、試してみる価値はある。

大体のイメージはしてある。

どうすれば、ローザを倒せるかをだ。

それは、暗殺だった。

ディーバは遠目には見えている。

しかし、渦を描くように、何故だか、そこには辿り着けない。

まるで、蜃気楼を見ているかのように思えた。

実際、そうなのかもしれない。

十

.....ジュダス。

彼は、自分の名前を言われて、目を覚ます。

扉が開かれて、光が現われる。

そこには、ヘリックスが佇んでいた。

「君はローザ様に仕えるつもりは？」

「無いな。死んでみるか？」

「いや、それは御免だね」

ジュダスと呼ばれた者は、巨大な白銀の狼の姿をしていた。

彼は、両脚に鎖が巻かれている。

この部屋は、巨大な地下牢だった。壁一面に、彼を封じる為の魔方陣が刻まれて、記されている。それは、古いものから、新しいものまで、様々な模様が描かれていた。

「満月の夜には、人間になれるんだよねえ、君は」

渦巻きの怪物と、狼の怪物は、それぞれお互いを睨み合っていた。

「そうだ。人間の形態の時ならば、俺は俺の持てる最大の力を使用する事が出来る。俺の能力である『ヘル・ブラスト』は、ローザごとき、いつでも終わらせる事が出来る。分かるか？」

「そう、そして。人間の形態の時、僕の施した力から抜け出す事は出来ない。不便だよねえ」

彼は、狼に対して、適切な距離を保てないか考えていた。

「交渉しない？ 氷帝が手を焼いた敵が現われた。あの人、多分、前よりも強力になってやってくるよ。素質を感じたから、やっかいだよ。それから、ローザ様の食卓になっている街なんだけれども、能力者が逃げ出したという情報も入ってきている。どうするべきかなあ」

「ふん」

ジュダスはせせら笑う。

「俺にローザの『ドゥーム・オーブ』は通じない。俺は人間の男が持っている特有の欲望が無いからな。俺には、食欲と破壊欲こそあるが。人間のそれじゃあない。俺が本当の力を取り戻したのならば、貴様らを引き裂く事は簡単だ。分かるか？」

「そうだねえ、僕は、正直、君がとっても怖いからねえ」

そう飄々と言うヘリックスの声は、嘘も衒いも無いみたいだった。

「それで、相手の持っている力は何だ？」

「僕が確認した処によると、一人は幻影使い。幻影を現実のものにする。そして、もう一人は、あらゆるものを石に変えていく。かなり、やっかいだよ？」

「成る程、その規模はどれくらいだ？」

「まあ、まだ全貌が見ていないかもしれない。この先、更に成長するかも。取り敢えず、氷帝のフィールドにまともに応戦出来るくらいかなあ」

「成る程な」

「さて、交渉したい。君を自由にしたいかな？」

ジュダスは鼻で笑う。

「俺を自由にする事が、何を意味しているのか分かっているのか？」

「どういう事かな？」

狼は、恫喝するように言う。

「ディーバを死の世界にしてやるぞ？ 忘れていないだろう？ 俺も魔王の血族だ。俺も、背徳者だ。そもそも、俺を封印したのは、ローザじゃあない。もう、数百年も前なので、顔も忘れてしまったが、各国の強力な能力者達が、何十名も集って、俺を封じた。まあ、大概、皆殺しにしてやったんだが、中に俺の動きを封じる能力者がいてな」

そう言いながら、狼は悔しそうな顔をする。

「そいつの顔も忘れてしまったんだが、まあ、そいつの頭を食い千切ってやったんだが。能力だけは残ってな。お陰で、この城の奥底に鎖で繋ぎ止められている」

「僕の次元転移の力なら、君の鎖を外せる。前々から、君は僕に目を付けていたよね」

「そういう事だ」

ジュダスは、大口を開けて、ひよおおおおおと唸る。

すると、扉の向こう側にいる見張りの兵士二人が、苦悶の声を上げる。

ヘリックスは、兵士達を見る。

すると、真っ黒な影のようなものが、昆虫の足のような形状で兵士達を押さえ込んでいる。そして、影はあっという間に、ジュダスの部屋の中に引きずり込まれると、彼の口の中へと収まっていく。

ぼりぼり、ぐちゃりぐちゃりと、人間を丸齧りする音が盛大に響いていく。

そして、ぷっぷっ、と、ジュダスは骨や鎧などを吐き出しながら、欠伸をする。

「俺の『ヘル・ブラスト』はこんなものではないぞ？」

「そうだね、僕も是非、見てみたい」

「ヘリックス」

彼は告げる。

「死は影だ。死は生の影として顕現されている。人はみな、闇を嫌うな？ 影を忌み嫌う。俺は死を撒く者だ。俺の通った場所は、死の世界に引きずり込まれる」

「ふふふっ、随分と凄く尊大な自信を持っているんだねえ？」

彼は、吐き出した兵士の鎧を口の中に頬張って、がちゃがちゃと口の中で弄ぶ。

「ローザに伝えておけ。俺を解き放つのは止めろ。俺の力は最悪だ。何者も、俺を倒せない。魔女でさえもだ。いいか、俺は望んで、この牢獄の部屋の中に入っているんだぞ？ その気になれば、抜け出せる事が出来る。けれども、やらない。どういう事が分かっているのか？」

ヘリックスは、部屋を後にする。

「分かっているよ。君は……まだ、君の人間らしい部分が、君を抑制する。でも、力が強大過ぎて、自分でもまるでコントロールし切れない。でも、僕は……ローザ様は、君の力を借りたがっているんだよ」

狼は唸り声を上げた。

少年は、思わず耳を押さえる。

十

『背徳者』の定義とは、一体、何なのかとヘリックスは考える。

強過ぎる能力者ではない。

人間を人間だと思えないもの。

おそらくは、それに尽きるのではないのだろうか。

特徴としては、余りにも非人道的で、余りにも周囲に撒いてくる災厄が酷いものなのだと聞いている。

そういった能力者を、最初に背徳者と呼び始めたのは誰だったのだろうか。

あるいは、伝承の中から、生まれたのかもしれない。

神に挑む力を持つ者、それが背徳者という存在なのだろう。

ジュダス。

あれは、確かに間違いなく拙い存在なのだと考えた。

この世界にあってはならない力の持ち主なのだと。

十

スフィアには強い願いがあった。

メアリーと和解したい。

誤解を解きたいから。きっと、何か間違えていたのだから。

だから、旅をしなければならないと思った。

きっと、何も分かってくれないかもしれないけれども。

水月はいつも不思議そうな顔をしている。

どう言えばいいのかわからない程に、奇妙なものを見つめるような目で、スフィアの事を見ている。

「私は人間の本质は、妬みだとか憎しみだとか、欲望だとか、そういったもので構成されていると思っている。どんなに塗り固めた言葉を使ってもだ。けれども、スフィア。お前は本当に純粋そうなんだな？　それが興味深い」

「そうなんですかね？」

「お前は人間じゃないのかもしれないな。本当に天使なのかもしれない」

「うーんと、嘘ですよ、水月さん」

「嘘？　何が？」

「人間の本质がどうか。貴方は、本当はそんな事、思っていないんじゃないかって、私は思うんだけど。どうなのかな？」

「成る程、私は偽悪的であると？」

「偽悪的っていうか、私よりも、全然、前向きなんじゃないかなあって。私なんか、今、もう、この凍える雪に埋もれながら死ねたら、どんなにいいのだろう。私は確かに思っているんです。思っているけれども、だって、それだと、どうしようもなく寂しいから。私は多分、自分の足で歩き出さないといけないんだと思う。私の生き方を見つけなければならないのだと思っている。私は今の気持ちを、まだ、言葉に出来そうにないのだから……………」

「そうか」

水月はニット帽を目深に被って、何か表情を隠しているかのようだった。

「人間は美しいのか？　私はそれも知りたい。この世界の重力に耐え切れそうにない。なあ、スフィア。お前はもしかすると、可能性なのかもしれない」

「可能性？　分かりません」

「綺麗な人間がいるとするならばだ。まあ、それだけだ」

「綺麗な人間ですか、分からないなあ。会いたいんですか？」

「私は生きる事を望んでいない。死ねないから生きているだけだ。そういう者から見える世界はどうしようもない程に、空しくて、汚らわしい。人間の闇ばかりしか見ようと思っていない。きっと、お前は人間の美しい部分だとか、善なる部分だとかに焦点を当てられる者なのだろうな。そういう純粋さはとても大切なものなのだと思う」

まるで、二人の間に、人間が総体的に持っている光と闇のコントラストが当てられているかのようだった。

「メアリーがね、いつだって、私の為に贈り物をしてくれた」

「贈り物？」

「うん、誕生日には、いつだって、花のブーケとか、絵本とか、カップとか、そういったものをくれた、彼女はとっても優しかったです」

「美しい思い出も、愛していた感情も、忘れて朽ち果てていくものなのかもしれないぞ？」

「でも、私は信じたいから」

「そうか、赦せないとか、無いんだな？」

「何がですか？」

「自分の人生を明らかに破壊した奴だぞ？ お前の義理の父親も、友人達も、みんな彼女の手によって死んだ」

「また言っている、水月さん、私はまだ気持ちの整理が出来ないんです。でも、メアリーは生きている。多分、私はもしかすると、私自身を責めているのかもしれない」

「そうか、本当に頑固で、誠実で。あるいは、滑稽だな？」

スフィアには本当に分からない。

自分自身の感情が今、どうなっているのかさえも分からない。

ただ、動かなければ何も始まらないのだと思った。

前に進まなければ、どんな結果にも辿り着く事が出来ない。

「私、水月さんの言うように。自分の感情を理解したら。現実を受け止める事が出来たら、大切なメアリーを憎悪する日が来るのかもしれない。でも、今はただ、メアリーの事を想いたいから。親友だから、私のお姉さんのようなものなんだから。ねえ、水月さん、貴方には分からないよ」

「そうか。そうだな、私には分からない。私は人間じゃないからな」

「人間じゃないんですか……」

ああ、と、水月は言う。

そして、魔物だろうなあと言った。

「子供の時間がいつか終わりを告げるように、いつか甘い夢から覚めるのかもしれない。そして、自分の生きている時間が最悪なんだとお前は知るかもしれない。私は見ているぞ？ スフィア、お前の心が砕け散っていく様を眺めていたいから」

執拗に、水月は彼女の心に刃物を突き付けるような言葉を言ってくる。

スフィアは思わず、溜め息を吐いた。

「あー、もう。あっ、水月さん」

言われて、水月も気付く。

街のようなものが見えてきた。

スフィアは地図を握り締めて喜んだ。

「わあっ！ 水月さんっ！ 私、村の外を出るの初めてだったから。こんなに歩けるなんて思わなかった。凄いな、あそこ、どうなっているのかな？」

そこは街だった。

空には、一面に広がるオーロラが輝いている。

見た事も無いような街だった。

地図には無い場所だ。

スフィアは、街にいる住民に話し掛けてみたりしていた。  
「此処の街、何て名前なんですか？」  
「ウィンディゴというらしい、地図には載っていないんだな？」  
水月は、街の看板を指差した。  
煤けた灰色のマントを目深に被った老人は答えた。  
グラニット同様に、何だか寂れた感じがした。  
遠くで見た時のように、厳かな感じはしない。  
街は何だか、ぼんやりとしているような感じがする。  
どう言えばいいかわからないのだが。  
土人形のような顔をした人々が、沢山、歩いていた。身に着けている服は、この辺りではよく見かけるような衣装だ。  
何だか、街の人間全員から生気が感じられない。  
何処か、此処は墓場のような印象を受ける。  
まるで、街に住んでいる人間全員が、何処か嘆き悲しんでいるように思えた。  
取り敢えず、二人は宿を取る事にした。  
宿の中では、暖炉の明かりが煌々と輝いている。  
やっと温まれるんだ、とスフィアは喜ぶ。  
二人は宿の中で眠りに付く。  
スフィアは疲れ切っていたのか、すぐにぐったりとして寝入っていた。  
デス・ウィングは、ふん、と興味深そうに彼女の顔を眺めていた。  
デス・ウィングはふと、彼女の潜在的な力は何なのかと考えていた。  
間違いなく、彼女は能力者の素質がある。  
しかし、それが何なのかはまだ分からない。  
彼女の運命の行く先を見てみたいと思った。  
きっと、何か面白いものを見せてくれるのかもしれない。  
ふと。  
この街全体から、瘴気のようなものを感じていた。  
そう言えば、此処はルブルのいる場所なのだ。  
住民達は何者なのか分からない。

ヘリックスは、ローザの前にいた。  
「ジュダスを動かすのはどうかと思います。やっぱり、僕が出向きましょうか？」  
ローザは真っ白なシーツに覆われた寝室の中で、くっくつと笑っていた。

「駄目よ。ヘリックス。貴方はディーバを守ってくれないと」

「ですが、敵はきっと力を付けてくる」

「そうね」

彼女は思い出したように言った。

「ディボーネを行かせましょうか。私に焦がれても、まだ生きている男。彼なら、みんな始末してくれる筈」

ヘリックスはその名前を聞いて、萎縮する。

ローザのドゥーム・オーブに食われながら生き残った者、それがディボーネという男だ。

「何か、敵の匂いの付いた物はあるかしら？」

ヘリックスは、メアリーの落とした服の袖の切れ端を取り出す。

「勿論、用意しております」

シーツの奥から、少しだけ眼が見える。

彼女はとても楽しそうに見えた。

十

スフィアは、夢の中でもう一人の自分の姿を見ていた。

おそらくは、スフィアが押し殺している自分なんだろうと直感的に分かった。

きっと、彼女はメアリーの事を深く憎んでいる。

自分の全身が跳ね上がるような感覚に襲われた。

自分の中に、何かが眠っている。

それは、確かな事のようにだった。

全てが、朽ち枯れてしまえばいい。

思えば、自分はメアリーの事を姉だと思っている。

そして、彼女は全てを焼き尽くしてしまった。

そのイメージが、記憶の中で、何度も何度も反復していく。

何故だか、奇妙な事に憧れさえ抱いていた。

彼女のようにになりたいとも思ってしまった。

自分も闇の中に、飲み込まれていきそうだ。

自分も、別の自分に支配されてしまうのだろうか。

普通の人間だったら、メアリーをちゃんと憎めるのだろうか。

彼女を憎悪して、敵愾心を抱いて、復讐の為に生きようとするのだろうか。

けれど、そうならない。ならないのは、自分も何処かで、メアリーと同じ事を行いたかったからなのだろうか？

もう一人の自分が、何か大きな力を授けようと語り掛けてくる。

けれども、それを手にする事が怖くてスフィアは拒み続けている。

.....

彼女は目を覚ます。

隣には、水月の顔が見えた。

何だか、今日は何処か優しそうにも思える。

「ああ、そうだ。スフィア、この街なんだけれども」

水月はふふん、と笑った。

「かなり、拙い事になっているかもな？ 完全に敵の胃袋の中のような場所だ」

スフィアは驚いた顔になる。

何が、どうなのか分からない。

「多分、この街はそれ自体が、街ではない別の何かなんじゃないのかな？」

「別の何か、ですか？」

「ああ、それが何なのかは、さて」

水月は、含み笑いを浮かべていた。

「取り敢えず、寝台がふかふかしていて、面白いぞ？」

宿の部屋の中に、二人はいた。

不自然なくらいに、綺麗な調度品が並べられている部屋だ。

この辺りで使える通貨で、宿に泊まる事が出来た。

水月は、寝台のクッションを何度も、押し潰すように指で押して、感触を楽しんでいた。

## 十

メアリーはルブルの城へと帰っていた。

「そう、貴方のマルトリート。まだ、不完全なの、成長する必要がある」

「ありがとう……」

ルブルは彼女を咎める事なく、それだけ言った。

しばらくして、数時間程、経過していた。

不思議な違和感を覚えていた。

何だか知らないが、得体の知れない感覚が込み上げてきている。

「ルブル、何かが来ている」

魔女は頷く。

「貴方が何とかしてくれないかしら？」

ルブルはふふっ、と笑う。

「貴方は私の右腕、違うかしら？」

「分かったわ」

ルブルは欠伸をすると、もう眠る、と告げて寝室へと向かって行ってしまった。

メアリーは、一人、残される。

メアリーは、先日の戦いにおける敗北の事を思い出す。

何者かが、窓の壁を叩く音が聞こえてきた。

メアリーは窓を見る。

すると。

ぶしゃあっ、という音がして、何かの腕のようなものが見えた。

「ルブル。貴方のゾンビがおいたをしているんじゃないのかしら？」

メアリーは、少し呆れたような声を出す。

彼女はそう言いながらも、マルトリートを使い始める。

幻覚で作った斧を握り締める。

何か分からないが、薄気味悪い感覚を覚える。

それは子供の頃に、悪夢に魘された時の感覚のような感じだ。

どう言えればいいかよく分からない空間の中を彷徨っているかのような。

ガタッ、という音がする。

別の窓が開いていた。

「ふん、ふざけているのかしら？」

考えられるのは一つ。

おそらくは、ローザの刺客だろう。何らかの方法によって、このルブルの城の居場所を知ったのだろう。

もし、そうだとするのならば、メアリーの逃走が原因となっているのではないのだろうか。ルブルに申し訳が立たなくなってしまう。

「まあいい、私が倒す。この前は負けたけれども、今回はそうはいかない」

また、別の場所で、ガタガタッという音がする。

また、新たに窓が開いていた。

「窓を開ける事によって、何か意味があるのかしら？」

どしゃあっ、という音がして、何かが入り込んできた。

メアリーは、思わず息を飲む。

それは、どろどろに溶かされた鼠の死体だった。

それが、何匹も混ざりながら固まっている。

よく見ると、まだ息のある鼠もいた。

「ふん。随分と舐められたものね、私も」

背後に、何かが立っている。

メアリーは。

そいつに向かって、炎の玉を投げ付けた。

そいつは、火達磨になって、辺りを転げ回る。

メアリーは息を飲む。

そいつは、蝙蝠の翼に、猿のような腕をして、背中から無数の蛇が生えた禿頭の男だった。どろどろに溶解した醜悪な顔をしている。

「あら、貴方は何かしら？」

「お、お、俺様はデ、ディボーネ。ロー、ローザ様の下僕だ」

「ふうん」

メアリーは、斧を空中に浮かべる。

斧は浮遊しながら、勢いよく醜い男の頭へと深々と食い込んでいく。

ぶしゅっ、ぶしゅっ、という音がして、男の背中から、腐った蝙蝠が飛び出して、開かれた窓から逃げていく。

メアリーの感情が、真っ赤に染まっていくのが分かった。

こんな化け物ごときを送り込んでくるなど、随分、舐められたものだと思った。

ぶはっ、と蝙蝠男は、全身から勢いよく液体を吐き出していく。

メアリーは、硝子で出来た盾で、それを防いだ。

液体は強力な酸であり、床をどろどろに溶かしていく。

何匹も生えていた蛇達が、床を這いずり回っていた。

彼女はその蛇達に向かって、片っ端から火の玉を投げ付けていく。

メアリーは何か違和感を覚えていた。

何故だか、何かを伺っているような気がした。

メアリーは気付く。

溶けた場所が、更に、溶解し続けている。

メアリーは、その液体を火で炙り続けた。

「もしかして、液体になっても、別の物質を食べ続けるのかしら？」

だとするのならば、かなりやっかいだ。

もしかすると、このまま、城全体を飲み込むまで、液体が広がっていくのかもしれない。

ルブルは寝室で眠っている。

彼女を起こしてはならない。

メアリーは、自分の無力さに苛立ち始めていた。

こんな敵程度にも、自分はちゃんと勝つ事が出来ないのだ。

自分はずっと、強くならなければならない。

何処までも強く、強力な存在にならなければならない。

決して、役立たずであってはならないのだ。

液体は炎で燃やしても、一向に蒸発しない。ただただ、床を食い続けている。

仕方が無いので、液体をまるごと、氷の壁で覆っていく。

そして壁に穴を開けると、そのまま、空中へ浮かべて、遠くへと飛ばしていく。

ふと、メアリーは考える。

この液体の化け物は、本当にディボーネと呼ばれる男本人なのだろうか。

あの氷帝という男は、肉体が水だった。

もしかすると、あの男も、何か弱点があるのかもしれない。

自分の力は自由自在だ。

ならば、相手の力だって、どれだけ強力なのか分かったものではない。

もっと、能力とは何かについて考えるべきだった。

能力、自分自身が持っている異質性そのものだ。

階段の下を見る。

すると。

何か、霧のようなものが入り込んでいるのが分かった。

おそらく、敵は本体のようなものがあるのだろう。

それを、倒さなければならないのだろう。

メアリーは、慎重に、階段を降りていく。

この敵は、相当に、やっかいだ。

けれども、これからの戦いにおいて、重要な経験になるのかもしれない。

## 十

ばさばさっと、蝙蝠のようなものがローザの寝室に飛んでくる。

そして、ぎちぎちっと音を立てて何事かを彼女に囁いていた。

「あら、始末出来なかったの？ 役立たずね」

うしゅう、うしゅう、と蝙蝠は何事かを囁いていた。

「ふーん、成る程。敵の居場所はそこにあるのね、分かったわ」

それだけ言うと。

ぶしゅうっ、という音がして、蝙蝠は、何かによって叩き潰されていた。

「貴方はもういない。もうこれ以上の期待は出来ないから。さてと、ヘリックス、いるかしら？」

ヘリックスは、壁の隙間から、顔を出す。

「どうしました？」

「敵の居所は。ディボーネが教えてくれた。どうやら、城の中にいるみたい。そして、それなりに強いみたい。他に誰か強力な能力者はいなかったかしら？」

「なら、僕が行きましょうか？」

「駄目よ。貴方は城の番人をしてくれないと、そうでしょう」

確かに。

ヘリックスが、ディーバにおいて守っているものは、無数にある。

「やっぱり、あの狼に頼み込んでくれないかしら？」

ローザは、くすくすと、寝台の中で笑っていた。

## 『背徳者ローザの物語』

---

彼女は夢を見る為に、寝台の上に横たわる。

自分が一体、何を視ているのか彼女には分からない。もしかすると、胎児の頃を思い出しているのだろうか。

男が、一人、その部屋の中へと入り込んだ。

男は、彼女の姿を人目見ようと、此処に来たのだ。

真っ暗な城館の奥底には、一人の姫君が眠っている。そんな伝承を信じて、此処にやってきた。城館の中は、調度品が埃を被っており、所々が、朽ち果てていた。

男もまた、悪夢の中を彷徨っていたのだった。

一体、自分が。何故、こんな場所にやってきたのか、どうしても思い出す事が出来ない。ふと、彼は少しだけ、薄らぼんやりとした記憶の底を漁ってみる。多分、自分自身が夢に呼ばれていたのだろう。

まるで、理想の美女を頭の中で描いていくかのようだった。きっと、自分の中で形作った女を掴み取ったら、自分の持っている欲望の全てが手に入るのではないのかと。

ただ、この夢は終わる事なんて、決して無かった。いつの間にか、迷い込んだ場所なのだ。此処は、酷く冷え切った場所だった。

男は、寝台へと近寄る。そこには、純白の衣装を身に纏った姫君が寝かされていた。

ふと、何処かで、くすくすと笑い声が聞こえた。

けれども、不思議にも、その声が静謐な世界の中で、心地の良いものとなって、心の中に響いていく。

真っ暗で、顔形がよく分からない。髪の色さえも、判別が付かない。

男は、もっとよく顔を見ようと近寄る、手遅れだった。

ぼとり、ぼとりと、近づく度に、男の身体は溶けて、崩れていく。

いつの間にか。彼の顔は、ぐしゃぐしゃに崩れていた。此処は、迷い込んではいけない場所だったのだ。此処が、終わらない悪夢の祭壇なのだ。彼は知る頃には遅過ぎた。

彼は、ぐしゃぐしゃに、液体となって地面に転がっていた。

そこは、消化の寝台だった。

此処に来た者は、全て、彼女の胃袋の中へと飲み込まれていくのだ。

ぞわぞわっと、食われながら、溶かされていく。

決して、この場所には入り込んではいけない。

げぷう、という音がして、姫君は寝台から起き上がった。そして、消化液によって溶かされた男だった者の痕跡をしばし、見ていた。

そう、此処に迷い込んだ者は、出られなくなり、後には食われていくだけなのだ。哀れにも、犠牲者は、彼女の餌食となる。

彼女は笑う。どんな人間も、彼女の食物でしかないのだから。

やがて、光が灯り出す。

すると、辺りの空間から、星々の煌きが現われる。遠くでは、紅炎と呼ばれるものが暴れ狂う日輪のようなものが燃えていた。

此処は、一つの小宇宙だった。この世界は、彼女が見ている悪夢そのものでもあった。

流星群が、辺り一面に流れ続ける。星の河だ。全ては蝕まれていくのだろう。人の一生なんてものは、この大きな宇宙の中へと。

小さな光が、幾つも破裂しては、消えていく。そして、また新しく瞬く星が現れる。彼女はふふふふっと、笑い続けた。どんな命も、瞬く間に消滅していく。

命の音色なんて、そんなものなのかもしれない。

どんな人の命も、儚く、この宇宙全体によって食われていくものなのだ。

女は、くすくす、くすくすと笑った。何故に、こんなにも滑稽なのだろう。

自分の命もまた、宇宙によって食われていくのだろう。圧倒的なまでの、質量に押し潰されていくのだろう。数多の可能性によって、蝕まれていく。

女の身体もまた、ばらばらに解体されていく。

此処は、宇宙が見ている夢の寝台の上だった。

女の肉体は、空間の中へと溶け込んでいく。そしてやがて、全ては闇によって侵されていった。星々の煌き一つ、一つが、人の一生に比するのだろうか。

彼女は深淵の中から、再び、出現する。

その身体には、真っ白なドレスを纏っていた。

彼女の唇が歪んでいる。

そして、再び、彼女の肉体全てが崩れていく。背景と溶け込んでいく。彼女自体が、宇宙そのものと化していく。何も無い空間から、数多の口達が登場しては消えていく。口の中には、らんぐいの歯が幾つも並んでいる。どろどろと涎が垂れ流されていく。

彼女は、また、迷い込んでくる者達を待ち望んでいた。彼女はふと思う、自分は宇宙の歪の中に誕生した歪そのものではないのかと。

空間の中で、哄笑ばかりが続いていた。

ぐちゅぐちゅと、女は端正な顔で笑い続けていた。

### 第三幕 さかしまの時計台

---

「どうも、お前の能力を使えば、俺の力の分身ならば、送り込む事が可能だ」

ジュダスはくおおおと、唸り声を上げていた。

ヘリックスは、冷や汗を垂らす。

こいつは、本当に、コントロールする事なんて出来ない奴なんだな、と感じた。

「ルブルとかいうのを始末すればいいのだろう？ 問題無い。何処にいる？」

ヘリックスは、ディポーネから渡された地図を取り出す。

ジュダスは鼻で笑った。

「じゃあ、お前、その辺りまで案内して貰おうか？」

ヘリックスは、更に、引き攣ったような顔になった。

「えと、えと、僕が率先して、ルブルの城の辺りまで行かないといけないんだけど……」

狼は唸った。

彼は冷や汗を流す。

「分かったよ、行ってくるよ、大体の場所は知っているからっ！」

そう言いながら、彼は、走りながらディーバを出て行った。

……………。

†

魔女は寝台から、眼を覚ます。

ルブルは、寝巻きから、黒いドレスへと着替える。

「メアリー、今度は私が戦う」

メアリーは驚いたような顔をする。

ルブルが、まるで、酷く何かを恐れているような顔になっていたからだ。

彼女の顔は、心なしか蒼ざめてさえいるようにも思えた。

ウィンディゴの城の中には、巨大な塔があった。

そこは、時計塔になっている。

かちかち、と逆向きに針が回り続けている。

ルブルは明らかに、動揺を隠せないみたいだった。

「以前の刺客なんかじゃない、明らかに強大過ぎる、何かが迫っている。以前は、ただの使い魔だった。けれども、今回は……」

ルブルは剣呑な顔で言う。

「背徳者そのものだ……」

瞬間。

どんっ、と地響きが聞こえた。

城が揺れる。

メアリーは窓を見て、絶句していた。

それは、巨大な彫像のようにも見えた。

時計塔の上には、巨大な狼が張り付いていた。

狼は遠吠えを上げていた。

その声は、ウィンディゴ全体に鳴り響いていく。

ゾンビ達が騒いでいる。

彼らは震えながら、蠢いていた。

ゾンビ達が、次々と、黒い何物かによって、飲み込まれていく。

どうも、それは彼らの足元にある影が、伸びて、彼らを覆い尽くしているみたいだった。

メアリーは、今、どんな事態が起こっているのか、把握するのに、混乱する。

それは、あっという間の出来事だった。

メアリーの硬い硝子の盾が、紙屑のように破られる。

そいつは、部屋の中へと入ってきた。

狼は全身から、輝く黒色の光を放っていた。

「女、動くな。お前には興味が無い」

メアリーは、ひたすら悪寒と戦っていた。

背中から、何かが這い上がってくる。

それは、何故か、何処か懐かしい気分さえ感じさせるものだった。これは確かに、知っている何かだ。もしかすると、人間というものはこれに出会う為に生まれてきたのかもしれない。

「お前は？」

ルブルは訊ねる。

「俺はジュダス。地獄の大公にして、死を撒く者だ」

「成る程、『背徳者』というわけか」

魔女はくすくすと笑っていた。

「歩く死体だろうが、何だろうが。俺の『ヘル・ブラスト』の前では、全て冥界へと向かっていく。ルブルと言ったか、お前もだ」

狼は吼える。

「お前が、どれ程、その不死性を帯びていようが。この俺の敵じゃあない」

狼は咆哮する。

ぞわぞわっと、辺りから何かが這い上がってくる。

メアリーはまるで動けなかった。

ふと、自分が一体、何処に立っているのか分からなかった。

確かに、この感覚は覚えている。

自分は強い意志によって、死ぬ事を恐れなくなったのだと思った。

背後から、何かが聞こえてきた。

それは、まるで音楽のようだった。

何かが、メアリーの耳元で囁いている。

多分、この音楽は、人それぞれ別のメロディーとなって現われるのだろう。

十

「何だ？ あれは？」

デス・ウィングは、呆然とした顔で、巨大な狼を見ていた。

あんなものは、今まで出会った事が無かった。

どう言えがいいのか分からないくらいに、そいつの存在はとてつもなく強かった。

隣には、他人の死が立っていた。

「おや、あれは何だろうね？」

「さあ？ 私にも、分からない。あれは見た事が無い。一体なんなのだろうな？」

デス・ウィングは、下顎に手を置いて首を捻っていた。

「あの狼の怪物が使っている力、あれは何なのかなあ？ かなり、興味深いよねえ。一体、何をしているのだろう？」

彼はただただ、笑っているばかりだった。

「さて、私は一体、何の為に生まれてきたのだろうね？ そう思わないかい？ 私は思うのだけれども、君の死も見届ける事が出来ると思うのだけれどもね？」

デス・ウィングは、忌々しそうにドレスの少年を睨み付けていた。

こいつの存在は、本当に不愉快だ。ずっと、彼女の隣で、悪夢のように寄り添っている。

「死が存在しているという事は、とても幸福な事なのかもしれないよ。そして、私もまた、死が存在しないのかもしれない。私はきっと“概念”そのものが人の形を取った姿でしかないのかもしれないからね。さて、君は人なのかな？ それとも、人以上の何かに成り得ているのかな？」

他人の死は、何も無い空間の中で、存在が浮かび上がっては、消えていく。

彼の存在は、明滅するように、そこにある。

ただただ、デス・ウィングのみに聞こえる声で囁き続けている。

「君は何の為に生きているのかな？ 私はずっと不思議なんだよ。君はいつだって、私と同じように傍観者でいたがるね。でも、君はいつまで傍観者になりたがるのかな？ いつまで、君は神の視点に立っていようとする事が出来るのかな？」

他人の死は、無感動な声で言葉を紡ぎ続ける。

デス・ウィングは、何だか少しだけ、楽しげな気分になってきた。

見ると。

ウィンディゴを彷徨っているゾンビ達が、何かによって苦しみ始めていた。

さながら、それは地獄の責め苦にあっているかのようだった。

きゅああああ、きゅああああと、死人達は叫び声を上げ続けていた。

何処か、不思議な気分だった。

幼い頃に見た漠然とした死の恐怖が、頭を過ぎ去っていく。

見ると、スフィアが寒いと言いながら、蹲っていた。

彼女の背中にある影が長く伸び続けている。

ドレスの少年は、笑い続けていた。

「ふふふふふふふっ、ふふふふふふっ、君は何か気分が悪くならないのかな？」

デス・ウィングは、困惑したような顔になる。

確かに知っている。

この感覚をだ。

久しく忘れていたような気がする。

あるいは、ずっと、何処かで恋焦がれていたのかもしれない。

彼女は首を捻る。

あの狼が、周囲に放っているもの、それによってスフィアが苦しんでいるみたいだった。

そして、奇妙な事に、自分の心も不思議な気分侵されているかのようだった。

「他人の死、私が人間だった頃の事なのだが」

デス・ウィングは、ニット帽を深く被る。

そして、ぱちっ、ぱちっ、と指先を鳴らし始めた。

「この感じを覚えている。知っている気がする。多分、これは死ぬ、という事に対するイメージだ。多分、人はこのイメージに囚われながら、生きているのかもしれないな」

デス・ウィングは、狼と魔女の下へと歩いていく。

「私はもしかすると、この感覚を取り戻したいのかもしれない……」

デス・ウィングは、どうしようもないくらいに、憧憬の念を抱いていた。

ゾンビ達は、真っ黒な影の中へと次々と飲み込まれていった。

影は、広がり、撒かれていく。

壁が壊れていく。

デス・ウィングは、少しだけ驚きの声を上げる。

壁が、人体へと変わっていく。

おおおおおおおとおと、辺りの建造物全体が唸り始めていた。

そして、ぼろぼろっと、建造物の壁が剥がれ落ちて行って、人体へと変わっていく。

どうやら、この辺り一帯の壁という壁、建造物という建造物が、ルブルがゾンビ達を擬態させて作り上げたものみたいだった。

建造物が、解体され、崩れ去っていく。ぼろぼろと、建物が人の姿へと変わり、闇の中へと飲み込まれていく。

先ほどから聞こえている唸り声が、一層、酷くなり、さながら暴風のように聞こえ始める。

どおーん、どおーん、という唸りと共に。

真っ黒な底無しの孔の中に、辺り一面の建造物全体が沈んでいく。

大地が振動していた。

魔女は、狼と対峙しながら、戦う方法を探っていた。

ジュダスは、ヘル・ブラストを使い続けていた。

辺り一面が、死の闇の中へと吸い込まれていく。

この都市自体が、ルブルの生み出した動く死体達で積み上げたものだった。

そして、それらの全てはジュダスの力によって、再び地獄の底へと引き戻されようとしている

。

魔女は仕掛けるタイミングを見定めていた。

隣では、メアリーが、必死で、自らの足元から這い上がってくる真っ黒な影に抗っていた。

彼女の顔は、酷く蒼白を帯びていた。

ルブルは、口の中で、何かの呪文を唱えていた。

すると、城の中にある絵の中から、何者かが飛び出し始めた。

それは、剣を持った骸骨の騎士達だった。

ルブルの館の中には、無数に化け物が封じられていた。

「クルーエル、お前も出てこい」

ルブルは叫ぶ。

灰色の霧が、狼の下へと向かっていく。

ジュダスは、飛び跳ねて、その霧を避けた。

すると、ジュダスの立っていた時計塔が見る見る内に、石化していく。

時計の針は停止する。

同時に、辺り一面の時空が停止してしまったかのように思えた。

ふっと、ジュダスの全身が震え出す。

彼は顔をしかめた。

そして、何処か悔しそうだった。

「仕方が無い。やはり、分身では持たないか。魔女、いつかお互いに全力で戦える時が来るのを楽しみにしているぞ」

そう言う。

狼の肉体が、空中へと徐々に、泡のように溶けていく。

そして、光の粒を放射状に撒きながら、白銀の身体は大気の中に雲散霧消していった。

後には、ただただ、破壊の痕跡のみが残されていた。

メアリーは、ふらつきながら立ち上がる。

「ルブル、あいつは……」

「ええっ」

二人はお互いの顔を見合わせる。

「かなりの強敵ね。あれが、ローザとかいう奴の刺客？ とんでもない。もう、ローザなんて、どうだっていい。あのジュダスとかいう狼。私が完全体にならないとどうにもならないわ」

「そう……」

メアリーは、どっと疲れた顔をして、そのまま地面に倒れた。

彼女を取り撒いていた影は、何処かへと消えていた。

十

デス・ウィングは、神妙な顔をして、しばらくの間、呆けたように佇んでいた。

そして、思わず、ぼそりと呟く。

「あいつ……私を殺せるのか？」

彼女にとって、それはとてつもなく魅力的な疑問だった。

験してみるだけの価値はあった。

相對してみるだけの意味はあった。

作り物の生をこれで、終わらせられる。

それはとてつもなく、安らかなものだった。

十

相変わらず、外は寒い吹雪に覆われていた。

彼女は、暖炉に火を灯して、思索に耽っていた。

自分の存在の理由なんて、何も分からない。

デス・ウィングは、自分の記憶をまさぐっていた。

そう言えば、いつから、こんなに生に対して、固執しなくなったのだろう。

しかし、かえってその事によって、自分は皮肉にも生き長らえている。

記憶を掘り起こして、考えてみる。

彼女は物心付いた頃から、美醜の区別がよく分からなかった。

だからこそ、この世界の認識を、自分で構築するしかなかった。

自分が見ている世界と、他人が見ている世界は、どうやら違うらしい。

よく分からない世界に、自分で言葉を与えていく。

間違いなく分かっていたのは、自分はこの世界にあってはならない精神の構造をしているという事だった。

人間の持っている感情の中で、幸福な部分ではなく、不幸な部分だった。

優しさや友愛ではなく、悪意や憎悪などといったものばかりに強い興味を抱いた。

少しだけ、感覚をズラして見ていくと。

どうしようもない程に、人間というものが愛しく感じられた。

奇形的なもの、異常なものが、どうしようも無い程に好きだった。

人間など、薄皮一枚だけで、綺麗なものを形作っている生き物だ。だからこそ、そういったものを引っぺがしてやりたいと、ずっと思い続けていた。

人間の作り出す言葉の裏側だとか、正しいとされている思想の脆さだとか、そういったものを壊す事ばかりを考え続けて、彼女は成熟していった。

記憶が残像のようになって、生まれてくる。  
何故、自分が生きてきたのだろうか。  
この身体は、いつから、不死へと変わっていったのだろうか？  
思い出すのは、城の中での出来事だ。  
社交界の人間関係は、息が詰まるようなものだった。  
みな、きらびやかな服を纏って、豪華な食事を口にしている。  
それぞれが、美辞麗句を言い合っている。  
自分が、酷く遠退いていく。  
何処かで見た映像だ。  
一体、自分が何をしているのか分からなかった。  
多分、自分は貴族の中でそれなりの地位を持っているのだろう。  
けれども、自分の居場所など、此処には無いのだろうという強い疎外感があった。  
自分の幼少時代は、どうだったのだろうか？ 青春時代は？  
スフィアを見ながら、自分が何だったのかの輪郭を追っているのかもしれない。  
前世の記憶のように、夢の時間のように、巧く思い出す事が出来ない。  
その映像は、砂のように崩れていく。  
まだ、どうしても、思い出せそうにない。  
人間だった頃の記憶など、無くたっていいとも思っている。  
そして、別の記憶が明滅するように現われる。  
デス・ウィングには、自分の死が分からない。  
故に、他人の死もまるで分からないのかもしれない。  
死が分からないという事は、現実が分からないという事なのかもしれない。  
全ては、曖昧模糊とした、空ろな雲のような空間を歩いて、生きているような感覚だった。全  
てが、夢や幻のような世界をただただ、永遠に歩き続けているのだ。  
夢と記憶は、交互に現われながら、一体、何が現実なのか分からなくなってくる。  
自分がいるこの世界は、切り取られたイメージの断片でしかないのかもしれない。  
誰もが、全てを断片的にしか、理解する事が出来ないのだろう。

## 十

ヘリックスの取り出した渦巻き雲から、ジュダスの精神が引き戻される。  
ジュダスは唸るように言った。  
「魔女ルブルか」  
彼は下らなそうな顔をする。  
「俺はこの地上を支配下においてもいいかもしれないな。あの程度の者ごときに、この地上を冒  
瀆されるのも下らないからな」  
彼は吐き捨てるように言った。

その瞳は、何者をも踏み潰せるという自信が漲っていた。

ふしゅうううと、辺りから死霊達の声が渦巻いているかのようだった。

ヘリックスは戦慄していた。

果たして、この化け物は本当に自分達の味方なのだろうか。

いずれ、ローザ達もみな、この化け物の手によって殺されていくのかもしれない。

それだけは、何とかして、手を打たないといけない。

ヘリックスは、ローザの寝室へと向かう。

「ローザ様、ジュダスをどう思われますか？」

彼は蒼褪めた顔で訊ねた。

「ジュダス。あれは、かなり危険過ぎますよ」

ローザはくすくすと笑っていた。

「大丈夫よ。もし、悪戯が過ぎるようだったら。私が出るから。私の力は絶対、彼ごときには叶わないわ」

そう、彼女は平然と言っているのけていた。

しかし、ヘリックスはどうにも落ち着かなかった。

どうしようもないくらいに、胸騒ぎがする。

「大丈夫よ、ヘリックス。私の本当の強さは私の超能力なんかじゃない。私は人の心の隙間に潜り込む事が出来る。私はジュダスの心も、魔女の心も掌握してみせる。ねえ、ヘリックス、私を信じて？ 貴方が私を信じるという事が、私の強さにそのまま変わるのだから」

ローザは不敵な事を述べ続けていた。

## 十

デス・ウィングは、気絶しているスフィアを抱き抱えていた。

まるで、それに合わせるように、一人の女を肩に担いだ真っ黒なドレスの少女が目の前に現われた。

「お前は一体、何かしら？」

「さあ。少なくとも、お前ごとき敵とは思っていない存在だ」

デス・ウィングは、わざと傲慢そうに言う。

「ふん？ まあ、いい。私の名前はルブル。お前が何者なのかは分からないけれども、確かに分かっている事がある」

「何だ？」

「お前も、化け物だろう？」

それを聞いて、汚いニット服の女はくっくっと、腹の底から笑った。

「成る程、化け物か。確かに、私もそうだ。なあ、ルブル。そっちのお前が、肩に担いでいる女は、メアリーとかいう奴なんだろう？」

「そうだ。よく、知っているわね？」

「こっちのスフィアから、話を聞かされている。何でも、自身の故郷を焼き釜にしてやったそうじゃないか。とてつもなく、素敵な物語を作ってくれたのだと。なあ、ルブル。お前は、その女が気に入っているのか？」

「そうね」

二人はお互いを牽制するように、睨み合う。

「処で、先ほどのあの狼の化け物を見ていたかしら？」

「ああ」

「頼みがある」

ルブルは、悔しそうな顔をする。

「あれに勝てる自信が無い。あれは、どうにもならない。何なのかしら？ あいつは。私じゃ勝てない。とてもじゃないけれどね、ねえ、貴方、お前は何て言うの？ 私は貴方を見てすぐに分かった。貴方は、私以上の化け物なんでしょう？」

ルブルは、何か生理的嫌悪感を受けるものでも見るように、彼女を睨む。

デス・ウィングは含み笑いを浮かべる。

何もかもを嘲笑するような笑みだった。

「共闘しないか？ といった処か？」

「そうね、したいわね」

デス・ウィングは、未だ気を失っている少女の顔を魔女へと見せる。

「彼女の名前は、スフィアという。そちらのメアリーの親友だ。本来ならば、彼女の人生を破壊したと言ってもいい親友に対して、復讐だけに生きる事も出来た。けれども、彼女はその選択を選ばなかった。私には分からない。人間は邪悪そのものだと思っているからな。しかし、私はそんなスフィアが気に入っている。さてと、ルブル。お前は、人間の事をどう思っている？」

「人間か」

彼女は、掌で顔を覆う。

「私は人間など、自分の道具としか見ていない。それ以外には考えられない」

「成る程な。とても良い事だ」

二人の魔人は、お互いに冷笑を浮かべる。

デス・ウィングは、あらゆる悪なる意思を崇高なものだと考えている。

この魔女ルブルの思考もまた、彼女にとっては、とてつもなく愛しいものなのだ。

「さて、ルブル。共闘の件なのだが」

魔女が、こめかみがぴくりと動く。

「お断りだ」

ニットのセーターの女は、ふん、と鼻を鳴らした。

「何故、駄目なのかしら？ 貴方にとっても、不都合など何も無い筈よ？」

「興味が無いと言う理由だけでは駄目かな？ 私はつまらないと思ってしまった事は、やはりやるべき意味を感じない。お前と共に戦った処で、何の意味も感じない。残念だけれどもな」

「あら？ 私に対する嫌悪感かしら？」

「まるで違う。むしろ、私はお前のようなタイプには好意的だぞ。けれども、共闘には興味が無い。何故だと思う？」

「あら？ 何故かしら」

「私は面白い方を選びたいからだ。なあ、魔女。あの狼は、再び、お前を襲撃しにくるだろうな。それに加勢したとしても、私は楽しめそうにない。私はもっと、酷く、凄惨なものが見たいからな。お前一人では、きっとあの狼に敗北するのだろう。しかし、私が加勢すれば、あの狼を難なく倒せるかもしれない。しかし、それだと、私には何の意味も感じない。何故なら、私が見たいものは。大きな悲劇なのだからな」

「お前も、魔女ね」

ルブルは忌々しそうに言った。

「そう、私も背徳者だ。背徳者、デス・ウィングだ」

ルブルは両手を開いて、お手上げのポーズを取る。

「仕方無いわね。……貴方もかなり強力な怪物だというのは、私はこれまでの経験上知っている。だから、貴方とも本来ならば、関わりたくないわね。しかし、私も酷く堕ちたものね、かつてはこの地上の全てを手中に収めようとしていた私なのに」

ルブルは唇を引き攣らせていた。

そして、強く溜め息を吐く。

デス・ウィングは、両手を広げて、友好的なポーズを取る。

「私はこの少女に対して、お前が抱えている女、メアリーに対する憎悪の感情を思い出させてやろうと誓っている。そうする事によって、きっと、この少女の生きる目的が確立するのではないかと信じてな。そして、私は二人の殺し合いが見てみたい。なあ、ルブル、お前もそれを手伝って貰えないだろうか？ もし、手伝ってくれるのならば、お前に加勢してもいい」

それを聞いて、ルブルの顔に笑みが戻る。

ルブルもまた、そのようなストーリーを望んで止まない者だからだ。

二人の人間が争い合うという事、そして、その二人が、かつてもっとも互いの事を愛しく感じていたのならば、それはとても美しいものなのだろう。

そうして、ルブルとデス・ウィングの協定は為された。

二つの悪意が、大地を覆う事となる。

悲劇を撒いていく為にだ。

「それにしても、ルブル。背徳者とは一体、何だと思う？」

「そうね、私が魔女と呼び。世においては背徳者と呼ばれる存在。それは、人間とは、自分達よりも、ちっぽけな蟲のようなものだと思ってしまうという事なんじゃないのかしら？ どう考えても、他人を自分と対等だとは思えない。それを心の底から、感じてしまって。それに相応しいだけの力を有している存在の事かしら？」

「そう定義するのか。私は背徳者とは、死を理解出来ない存在なのだと定義付けている」

「成る程、確かにそうとも言えるわね」

「まあ、どうせ。どのような運命も、砂のように崩れ、灰のように燃え尽きてしまう。生命が存

在し、人が意思を持つ事など無常そのものだ。そんなこの世界の理をお互いに知っている。それだけに過ぎないだろうよ」

そう言うと、デス・ウィングは、ルブルにウインクをすると、ルブルの下から去っていった。

十

何故、背徳者として生まれたのだろうか？

何故、普通有能力者ではなく、背徳者として生まれてしまったのか。

しかし、そこには必然性など、何も無いのかもしれない。

全てが運命とは偶然の産物でしかなく、望みも祈りも偶然によって齎されるものなのかもしれない。

それなら、何故、人間は生きる意味などあるのだろうか？

きっと、愛する事だとか、願い事だとか、大きな希望だとか、そういったものの信仰の下で、無理やり苦しみの中を生きているのだろう。

デス・ウィングは願う。深く、強く願う。

誰のどんな希望も叶わないように。

夢が夢のまま終わりを告げるように。

叶わない望みによって、きっとこの世界は構成されているのだろう。

何かを成し遂げたいだとか、理想の恋愛がしたいだとか。

そういったものは、嘘の希望によって塗り固められているのだろう。

デス・ウィングはこの世界に生きる人々を嘲弄している。

欲望に埋もれて、生きる事を渴望して、何かを成し遂げようとする。

しかし、みな、そんな事がどれ程、下らない事なのかどれだけ理解しているのだろうか。

夢とは、物語なのだろう。

みな、作り上げた、とてつもなく綺麗で歪な物語なのだ。

十

メアリーは夢の中で思う。

待つ事は得意だ。

いつだって、あの子は愚図だったから。

だから、今回も、ずっと待っていようと思っている。

スフィアは、目の前に現われるのだろうか。

しかし、その前に、自分はまだ生きているのだろうか？

あの狼の力を受けてから、死ぬ事に対して、嫌でも考えざるを得なくなった。

極寒の大地の進軍も、ルブルにいつ気まぐれで殺されるかも分からないという事実も怖くは無かった。

けれども、今は不思議なまでに、死の向こう側に引きずられる事に対してのアンヴィバレントな感情が存在している。

そのまま、向こう側に行ってしまうでもいいのではないのかと思う反面、まだ、何かをやり遂げていないんじゃないかという不安がある。

そう。

自分は誰よりも、幸せになる権利があってもいいんじゃないのかと思った。

もし、他人の幸福を吸い取る力が自分にあるのだとすれば、自分は誰よりも幸福になれるのかもしれない。

そして、今はおそらくは、スフィアの方がずっと不幸なのだろう。

何故に、スフィアを憎んでいたのだろうか？

今は、スフィアの大切なものは全部、潰した。

もう、それを修復する事は彼女には不可能だろう。

なら、今の自分は少なくとも、間違いなく、彼女よりも幸福だと言えるのではないのだろうか

。

ルブルと一緒にいて感じた事は。

多分、ルブルは自分を殺さないだろうという事だった。

.....ルブル。本当は話し相手が欲しいんじゃないのかしら？

ただ、ずっと孤独なだけなんじゃないだろうか。

メアリーは、何故だか、ルブルと自分を重ねている。

きっと、人間を大切に思えないというものが共通しているのかもしれない。

大体、人間なんてものは、そもそも自分達とは、違う生き物なのかもしれない。

そう考えるならば、愛だとか慈悲だとかを抱けないのも、納得がいくというものだ。

彼女は思う。

自分の命など、どうでもいいし。

自分が生きている限りは、可能な限りの多くの人間は不幸になればいい。

そうする事によってしか、自分は自分という命を肯定する事が出来はしないのだろう。

.....全ての者が呪われてしまえばいい。

ふと、メアリーは思った。

背徳者が何故、生まれてくるのかを。

魔女は、何故、魔女と呼ばれるのかを。

魔女は自称ではなく、人から呼ばれた名前だ。

背徳者というの、いつか誰かが名付けたものだ。

神に背く力を持つ者、その力とは、能力それ自体では無いのではないのか。

.....多分、感覚とか思想とかそれ自体なのだろう。

自分は何故に、迷っているのだろうか。

今は、どのような感情で、ルブルの下にいるのだろうか。

分からない。そして、答えを出す必要はあるのだろうか。

寒空はまだ、続いている。

どうしようもない程に、答えを見い出せない。

「気付いたかしら？」

ぼんやりと、世界が形を失っている。

「うっ、うっ……何？」

「良かった、死ななかつたのね」

頭には、冷たいタオルが置かれている。

そして、温かなベッドの上に寝かされていた。

真っ黒なドレスの女は、今までに無いくらいに、メアリーに優しく微笑んでいた。

「ルブル……。私の事、大切に思ってくれているの？」

魔女は、それを言われて、うーんと、口元に指を当てる。

「何故だろう？ 貴方の事が、気に入ってしまっているのかしら？ まるで、他人とは思えないみたい。貴方もそうなんでしょう？ 私が怖くないと貴方は言った。多分、私と貴方は似ていたから、私は貴方を道具だとか生きた死体だとかに思えなかつたんだと思う。分からない、分からないの、教えてくれないかしら？」

「教える？」

「ええ。この感情、何なのかな？ 多分、今、感じている感覚って、今まであんまり出会った事がなくて、それを言葉にするのが難しい。何だろう、安心する」

「安心かあ。ねえ、ルブル。ひょっとして、貴方って、友達が欲しかったんじゃないの？ ずっと、数百年前も、ずっとずっと」

「そうかもしれないわね……。ねえ、メアリー」

「何？」

「私のその、友達になってくれないかな？ 出来れば、その」

「ふふっ、親友でいいよ。スフィアの代わりに」

「ねえ」

ルブルは、メアリーの額のタオルを取ると、メアリーの髪を優しく撫でていく。

「貴方の中にいる、スフィアとかいう女が憎らしい」

魔女は、はっきりと告げた。

「未だに、貴方を拘束している呪縛のように感じられる。たとえ、貴方を殺害して、私が独り占めしようと思っても。貴方の心まで、奪えないような気がする。ねえ、スフィアとかいうのは、何処にいるのかしら？」

「私の下へ来ると思う。そうっておいた」

メアリーは、魘されるように言う。

「ふふっ、今、私は嘘を付いた」

「何？」

「スフィアとかいう少女の事を知っている。デス・ウィングとかいう女が連れていた。あの狼は再び、私達を殺しに来るだろうから。あのデス・ウィングとかいうのと手を組もうと思ったのだ

けれども、断られてしまっただけ。だから、私達だけで倒しましょう？ あのジュダスとかいう狼も、ローザも、デス・ウィングも、そしてスフィアも。全部、私達二人で皆殺しにして、地上を私達の物にしよう？ ねえ、いいかな？」

魔女は、メアリーの髪を綺麗に結んで、三つ編みにしていく。

そして、自分の髪の毛の何本かを引き抜くと、メアリーの髪止めにした。

「貴方も、魔女になるの。ねえ、メアリー。私達、姉妹みたいじゃない？ 私は貴方のお姉さんになりたいかな」

そう言って、ルブルは自分の指先に歯を立てる。

真っ赤な血が流れていく。

そして、ルブルはメアリーの唇に指先を当てていく。

メアリーの唇に、血のルージュが引かれる。

「これは何？」

「私の魔力を注いでいる。これは死体達には使えない。貴方に傷が付けば、私にも、ダメージが降り注いでいくから。貴方の『マルトリート』は、これで更に強力なものになる筈。ふふっ、戦いましょう。私達は地上の者達を、永遠に見下して生き続けるの」

ルブルはメアリーの髪を優しく撫でた。

そして、小さな刃物を取り出して、メアリーの左腕を薄く切る。血が流れる。

すると、ルブルの左腕の同じ箇所からも血が流れた。

「ほら？ とても素敵でしょう？」

ルブルはにっこり笑う。

誰よりも、天空に近づく。

傲慢な荘厳の城を建設しよう。

この地上の全てを隷属させる為に。

「ありがとう、ルブル。でも、それはいいわ」

そう言いながら、メアリーは、ナプキンで自分の口元を拭う。

「私は私の力だけで戦ってみる。強くなる、私の怪我で、貴方まで負傷する必要なんて、何処にも無いじゃない。それにほら、もし、私が死んだら、貴方まで死んじゃう……」

ルブルはそう言われて、少し寂しそうな顔になる。

メアリーは、彼女の両手を強く握り締める。

「心配しないで。私、みんな殺してくるから。踏み潰してやるんだから。ね？」

彼女はルブルを、おだてるように言った。

どうしようもない程に、狂った感情が、二人の中で芽生えてきている。

「じゃあ、私は、改めて、明日には、向かうわ。此処で、お留守番をされていてね？」

そう言われて、ルブルは無言で首を縦に振る。

「じゃあ、そろそろ、夕食を取りましょうか。一緒に食事をしましょう？」

そう言って、病み上がりのメアリーは、調理場へと向かった。

「目覚めたのか？」

水月は、にっこりと笑っていた。

「此処は？」

「ああ、ウィンディゴから離れた場所で、狩人達が前哨地として、使っていた場所だ。この辺りは、沢山の朽ち捨てられた掘っ立て小屋がある。この辺りの獰猛な獣を仕留める為に使っていた処だ。暖炉や戸棚などが置かれている、狩りってのは、戦争みたいなもんだっらしいな。鉛玉なんかも、かなり散乱している」

と、水月は、部屋の中に視線を置く。

確かに、そこは古びた戸棚やベッド、シーツなどが置かれていた。

水月は、よくこんな場所を見つけてくるなあ、とスフィアは関心する。

「私……」

スフィアは言葉に詰まる。

「なあ、スフィア。お前は、多分、未だに夢の中にいるのかもしれないな。村人達が虐殺されたその日から、お前は悪夢の中を彷徨っていると思っ込んでいるのだろう？ 現実に耐え切れなくなったから、お前は今はまだ夢の中に入り込んでいて、早く目覚めないかと思っているんじゃないのか？ そして」

スフィアは、何とか、自分の感情を言葉にしようとした。

水月は優しく微笑む。

「私はお前を治療する事は出来ない。スフィア、多分、お前は酷く心が乖離している状態がずっと、続いているんだよ。だから、今の自分の境遇が何なのかを知る事が出来ない。けれどもな、全部が現実なんだ。その事に対して、お前の精神は耐えられないのだろうな」

くっくっく、と女は嘲笑していた。

「お前はお前を取り戻さないといけないだろうな」

「私は私を取り戻す……」

夢の中で声が聞こえた。

それは、何だか、懐かしい響きをしていた。

まるで、遙か遠い昔のような。

ふと、ぼんやりと映像を見ていたような気がする。

それは、大きな力だった。

何もかもを破壊してやりたいという力のイメージだった。

少しずつ、自分の中で、何かが目覚めていくかのようなようだった。

自分の右手を見る。

自分の右の掌には、変な形をした痣があった。

それは、魚のように細長い形をしていた。

けれども、魚にしては、少しだけ尖っているように思った。

「悲嘆」

水月は言う。

「もし、お前に何かの力が眠っていたとすれば、悲嘆を意味する力がいい。私が名付けてやる。何処の国の言葉だったかな。悲嘆を意味する『グリーフ』という名前がいい。お前がどんな力を持っていたとしても、結局の処、お前のこれから先の運命は、悲しみと嘆きしか無いのだから」

右手が酷く扱った。火傷を負ったような感覚だ。

あれは、炎の記憶だった。

人々が焼け爛れている。

苦しみながら、黒い骸骨へと変わっていく。

確かに覚えている。

そして、それは悪夢の情景なんかじゃなくて、現実起こった事なのだ。

その映像は、何度も、目の前で幻覚のように引き戻される。

そして、何処かで知っていた。

あの事実を認めてしまった時点で、もう自分の幸福なんて永遠に訪れないであろう事を。そして、もう大切なものなんて何一つとして持っていないのだという事を。

この時期は、雪かきをしたり、雪の玉を投げ合って遊んだり、雪で人形を作ったりしていた。スフィアの傍には、大切な友人達がいる。そして、スフィアがずっと慕っていた、とてつもなく頼りになる姉のような親友もいる。

そのイメージは崩れ去って、雪に溶けていくのだ。

もう、全ては失われてしまって、戻れないのだという現実が、今、目の前にはある。

「私は、どうすればいいのかな？」

「知らないな。私は、ただ、お前の結論を。あるいは、結末が見たいだけなのだから」

スフィアはふと、水月の顔が、教会で見た天からの使いと対峙する者の姿と重なる。

天に背いて、この世界に闇と悪を撒いていく存在、それは人の心にも巢食っているのだと、教会の偉い人から聞かされていた。

ふと、スフィアは何で、こんなにみんな仲良くなれないのだろうと思った。

あれも、雪の日だ。

みんなで遊んで、雪を投げ合っていた時に、誰かが雪の中に石を入れて、石が人に当たって怪我をした。そして、他の者も石を入れ始めた。

たちまち、お互い、強く相手を憎み合うようになった。

しばらくしてから、その事が大人に発覚して、スフィア達はみんな叱られて、しばらく家から出して貰えなかった。

その事件が合ってから、仲直り出来ないまま、疎遠になった者達同士もいた。

スフィアはいつだって、そういった人の敵意というものに入り込むのが苦手だった。

だからなのだろうか。

スフィアが凄く良い子で、みんなから好かれていたように見えたのは。

スフィアが、必ず、誰よりも幸福を掴めると思われてしまったのは。

右手の中が、灼熱しているかのようなだった。

立ち眩みがして、思わず、壁に寄り掛かる。

すると。

ぼろぼろ、と。

右手で触れた壁が剥がれていく。

スフィアは、自分の右手を見た。

壁は、くっきりと、スフィアの手形が残されていた。

「私、何をしたの？」

気付けば、水月は、何処かへと行ってしまっていた。

今が、夢なのか現実なのかまるで分からない。

夢であって欲しいと、切実に願うばかりだった。

自分は何処に行ってしまうのだろう。

自分を取り戻せそうにない。

生きていて、素晴らしい事なんて、もう一つとして起こらないのではないのではないのか。そういう重過ぎる不安に押し潰されそうになる。

昔の記憶の残骸を、気付けば、漁るように思い出している。

大切な人達の温もりが、幻影のように湧き上がっては消えていく。



## 『地獄の狼の物語』

---

彼は闇の中、走り続けていた。

彼の名前は“死”である。

裏切りの名を持つ者だ、とも彼は言われていた。

彼が歩く度に、辺り一面は死の河が広がっていく。

万人に等しく与えられるもの。

死の象徴を、具現化するものは、様々だ。

死は各地の神話にて、様々な姿を取って現されている。

その死そのものが、姿形を取ったものが彼であるとも言われている。

彼は別の名前と呼ばれていた時もある。

たとえば、戦争だとか、疫病だとか、飢餓だとか。

そういったもので構成されている。

.....ジュダスは、封印される数百年前、彼が走り去る場所は、生命が終わりを迎えていた。殆どの者達は、彼を倒す事が出来なかった。

彼はこの世界に誕生した災厄そのものだった。

彼が通る場所は、死が満ち溢れていった。

彼は、存在そのものが、死の行進だった。

彼は、何故、生まれたのか。彼は、何の為に死を撒いていくのか。

それは、生という物語の先に、死という物語があるからなのだろうか。

彼は走る。人々に絶望を与える為に。

彼は吼える。人はみな、死ぬ為に生まれてきたのだと突き付ける為に。

憎しみは風船のように膨らんでいって、渦のように広がっていく。

自分ではない他人を不幸にしたいと思う強い望みだ。

メアリーは思う。

メアリーは、自分のマルトリートの本質が憎しみのエネルギーなのだという事を理解している。そして、他人に対する呪詛の力によって、自らの作り出す幻影を、より強固なものへと変える事が出来る。

そして、ルブルは死者達の現世に残した思念を探り当てる事が可能だ。

メアリーは、ルブルに言われて、大きな古墳へと向かっていた。

そこは、かつて、古いディーバの民によって滅ぼされた街だ。

数十年以上前に、戦争が行われた場所だ。

「私一人だけの憎悪では足りない。此処に眠る数多の死者よ、私に力を与えたまえ。私はお前達の地獄の焰となって、復讐の刃を振り下ろす。力を貸して頂けないかしら？」

彼女は、自分の指先を、舌で舐めた。

子供の頃に、漠然とあったイメージを想起して、真っ黒な魔術の儀式を、この地にて、行おうと思う。

そう、此処はかつて、戦場の中心だった場所で、大きな墓場だった。

今もなお、雪の下には、大量の死者達が眠っている。

メアリーは、両手を空に掲げる。

酷く居心地が良い。

怨恨のエネルギーが此処には渦巻いている。

瘴気が一面に漂っていた。

大地が炎の渦を巻いていく。

剣と剣がぶつかり合う音が鳴り響いていく。

そして、激しい砲撃が聞こえてきた。

メアリーの力は、以前にも増して、その威力が格段に上昇していた。

「私は幸福を望む者、全てを奈落に落としてやりたい。お前達は、生きている者が憎いだろう？

眠れる者達よ。もはや、残留思念となった亡霊達よ。お前達に、鎮魂はいらない。お前達は、この世界に牙を剥くといい。お前は私の力となって、みなに、災厄の渦を広げていくのだ」

嘆き声が響き渡っていた。

メアリーの全身に、闇が注ぎ込まれていくかのようにだった。

彼女は力が漲っていって、忘我状態に陥っていく。

何もかもを、破壊出来ると思った。

これで、ディーバを粛清しよう。

ローザだけではなく、彼女の民も何もかもを皆殺しにしてしまえばいい。

死体はルブルの道具になるのだ。

そして、地上は自分とルブルの二人だけのものとなる。

メアリーは気付いた。

魔女になる素質は自分にもあり、この世界に背く意志は、十分に備わっているのだと。

再び、進軍を始めなければならない。

今度は、前のような醜態は晒さない。

## 十

アンクゥは、ディーバの城の中へと潜入した。

体内まで、凍て付いてしまいそうだった。それは、恐怖からだ。

彼は、必ずローザの首を落とそうと考えていた。

そして、たとえ刺し違えてでも、彼女には冥府に行って貰おうと考えていた。

まず、目的を達する為に必要なのは、覚悟だけなのだろう。

覚悟があれば戦える。

彼はそれを信じていた。

敗北するかもしれない。けれども、その弱さを拭い去る必要があった。

冷たい階段を登っていく。

ふと、こつん、と足元の小石を蹴り落とした。

背後を見る。

すると、小石が何処かへと消えていた。

彼はそれを気に止めずに、先へと進む事にした。

彼は自身の力である『ソリッド・ヴァルガー』によって、辺りの空間の輪郭を掴んでいた。彼の力は、指定した空間を切り付ける事が可能だった。

階段の頂上の辺りまで上る。

すると、そこは大きな扉があった。

彼はどうしたものかと考える。

この扉の向こうには、誰がいるのだろうか。彼はそんな事を考える。

ゆっくりと扉を開けていく。

中には、誰もいなかった。

当然の事だった。

彼は、背中を何かによって、掴まれた。

天井から、何者かが、ぶら下がっていた。

それは、両目を見開いた少年だった。

彼は唇を三日月に歪めている。

アンクゥは。

問答無用で、その少年に向かって、自身の攻撃を放っていた。

ソリッド・ヴァルガーの残撃によって、少年の全身はバラバラに切り刻まれる筈だった。

しかし。

少年は、何処へと消え失せていた。

そして、気付くと、彼は頸椎の辺りに手刀を食らって、昏倒してしまった。

十

他人の希望と希望が傷付け合って、悲劇を生むのだろう。

他人の願望だとか夢だとか、そういったものが自分自身を阻んでしまった時に、敵意が生まれるのだろう。

そうやって、人間とは分かり合えずに、構成されているのだろう。

「そんなに、何かを求めたいのかな？ 人間というものは」

人が人を理解し合えないという事、それこそが、この世界が滑稽な喜劇である事に他ならず、だからこそ、人では無いデス・ウィングは、この世界を嘲弄する事が出来るのだろう。彼女はひたすらに、あらゆる事象に対して、傍観者でしかないのだから。

そう。

この世界に神はいない。

けれども、悪魔なるものは存在する。

何故、悪魔が存在するのか。多分、それは人間の持っている弱さとか、エゴだとかを押し進めていった結果、悪魔的な行為だとか、状況だとかに陥ってしまうのだろう。

みな、それぞれ、思い描いている夢や希望の形が違うから、悲劇は生まれていく。

デス・ウィングは、その事実を喜劇だと考えている。

そして、多分、優しさも悲劇だ。

彼女は、自分が何を求めているのかを思索する。

.....私はもしかすると、人間の痕跡を追っているのかもしれない。

自分は何も求めているのか、未だに分からない。

人間が作り出してきた邪悪な断片を無数に集めては、それを眺めて、喜びを見い出す。その事によって、理解し合えなかった者達の精神を少しでも知る事が出来たつもりでいるのだろうか。

水面に映った月は、とてつもなく幻想的で、天空を反射しているのだが、それでもそれは幻影にしか過ぎない。

十

スフィアは、水月から離れて、一人、小屋の中にいた。

此処は、ウィンディゴの街から、南に歩いていった場所だ。

気付けば、水月に担がれて、この街にいた。

自分はいつだって、受動的だった。

本当は、今、現実を見据えて、何かの行動を起こさないといけないのだろう。

けれども、今、頭の中を整理するのは、とてつもなく困難な事だった。

.....私、とにかく、今はメアリーにまた会う事くらいしか考えられないなあ。

村には、きっと、もう戻れないような気がした。

そもそも、村に戻れば、酷い精神状態の中へと落下していきそうだった。

自分は、これから、何処に向かうのだろう。

突き付けられた現実には、思った以上に、厳しいものなのだろう。

そう言えば、孤児院を出た時の事を思い出す。

メアリーが孤児院を出る時の事も。

あの頃のメアリーは、とても強気で、スフィアの事を何かと守っていたような気がする。かなり、面倒見のよい姉のような存在だった。

いつだって、スフィアはメアリーの事を尊敬していたし、きっと今でも、そうなのだろう。でも、彼女の心の中は何も分からなかった。

理解するという事が、何故、こんなにも難しい事なのだろう。

自分とはとてつもなく、弱くて、これから強くならなければいけないと思った。

しかし、どうすれば強くなれるのだろうか。

それに、どういったものが、強さの形なのだろうか。

もう、今が、苦しくて、どうしようもない。とにかく、考えるのが苦痛で仕方が無い。

明日なんて何もいらない。

今、強く感じているのは、それだけだ。

時間が腐っていくという、どう言えばよいのか分からない感覚に陥っている。

腐っていくもの。

自分の右手が、酷く重いような気がした。

何かを握り締めているような感覚だ。

堪らなくなり、右手を近くにあったカップに触れてみた。

すると、カップの中のスープが見る見るうちに、冷め切って行って、カップが罅割れていく。

次に、カップの隣にあった林檎を握り締める。

すると、林檎がどんどん腐り始めていた。

スフィアは、自分の右手を見つめていた。

右手で、壁に触れてみる。

すると、見る見るうちに、壁が老朽化を始めた。

スフィアは、背筋が凍り付いていく。

右手で触ったものが、次々と、腐敗し、老朽化を始めていく。

何だか、自分が掴もうとしているものは、全部、腐ってしまうのだろうか？

そんなイメージと重なって、先ほどから現われている力がとても怖い。

.....私は幸せになっちゃいけないのかな？

スフィアは思う。

何故、メアリーの事を理解してあげられなかったのか。

きっと、これまで積み上げてきた友情は、嘘偽りだったのだろう。

そのような事を告げられたのにも関わらず、まだ理解の方が追い付いていない。

ふと、自分には何も無いのだという事に気付いていた。

何か信じられるものも、これまでにしても、どう生きたがっていたかも、何も無かったのだろうという事もだ。

今、一体、何処にいるのだろうか。

何故に、今のよう事態になっているのだろうか。

考えても、考えても、答えを見い出せそうにない。

何故、彼女の事を理解してあげられなかったのだろう。

どうすれば、彼女の事を分かってあげられるのだろう。

スフィアは。

腐敗している林檎を、じっと眺めていた。

スフィアは、自分の両手をしげしげと眺めていた。

右手には、ナイフ型の痣がはっきりと浮かび上がっていた。

左手には、何も無い。

スフィアは、アンバランスな両手を奇妙そうに見つめていた。

色々なものの、感情の渦が洪水のように流れ込んでくるかのようなようだった。

どうすれば、自分が自分でいられるのだろう。

自分が、何者だったのかさえ、忘れてしまいそうだ。

まだ、昔の事を取り戻そうとしている。

過去に戻されればいとばかり、考えている。

未来が全て、閉ざされてしまった今、自分の心の形を思い描くものなんて、もう何も無いのだろう。このまま、現実から逃げ続ける事が出来たのならば、どれだけ楽なのだろうか。このまま、凍え死ぬ事が出来れば、とても楽な筈なのだ。

そう言えば、ふとスフィアは思い出す。

メアリーの態度だとか、仕草だとかを。

.....スフィア、ずっと一緒にいたいわね。

何故だか、そんな言葉を思い出した。

確かに、そんな時、彼女はとても優しくかった。その事実には変わりが無いのだ。

ふと、何かに思い至った。

きっと、彼女は何か、裏切られた気分に関ったんじゃないのかと。

何かとてつもなく、彼女に酷い事をしてしまったような気分に関る。

.....私は生きてちゃいけないのかなあ。

今度は、自分自身が囁いているかのようなようだった。

.....過去の思い出だけで、生きるしかないのかなあ。どんな未来も思い描けないよ。

どうしようもない現実が、目の前に迫っている。

どうすれば、彼女を理解する事が出来たのだろうか。

未だに、何も分からない。  
何故だか、酷く、倦怠感と諦めのようなものが襲ってきた。  
自分の形が何だか分からない。  
これまで、十七年くらい生きていても、未だに自分が何なのか分からない。  
誰かを好きになっても、何かを好きになっても、それは灰のように散って行って、失われていくものなのだろうか。  
今はもう、メアリーの顔も、忘れたい。何も思い出したくない。  
そんな気分でいっぱいだった。  
きっと、これは怒りだとか憎しみだとかじゃなくて、悲しさなのだろう。  
あるいは、やるせなさなのかもしれない。  
掌を見続ける。  
すると、刃の痣は、ベリベリっと剥がれて、立体的になっている。  
しばらくすると、その刃は、完全に柄のある少し大型のナイフへと変わっていた。  
スフィアは、そのナイフの柄を強く握り締める。  
多分、これは自分そのものなのだろうと思った。  
手の中に生まれた刃は、一体、何なのだろう。  
もしかすると、これで、現実を切り開いていけという啓示なのかもしれない。  
水月は、戦えと、囁きかける。  
それは、彼女なりの優しさなのだろうか、スフィアは理解している。  
多分、自分の心は、あの日から殻を被っている。  
そして、その殻から抜け出す事が出来そうにない。  
スフィアは、刃の柄を強く握り締めていた。  
自分の存在の意味を、描かなければならないのだと思った。  
何処かに、きっと、答えはあるのだろう。  
メアリーと邂逅を果たせば、全てが分かるのだろうか。  
でも、酷く、会うのが怖いのも事実だ。  
自分が消滅してしまえば、楽になれるのだと思っているのだけれども。  
未だ、この世界は消えそうにない。まだまだ、続いていきそうだ。

## 十

「メアリー、私は人間が気持ち悪い」

「そんな事、分かっているわよ」

二人は、晚餐を行っていた。

鶏皮のスープだ。

二人で、スプーンで、スープを掬って食事を行っている。

「ローザを倒すとすれば、やっぱり、彼女の考え方だとかを理解しないといけないんじゃないの

かと思うのよ、メアリー。私は人間というものを何も理解していないから、相手の事がよく分からない。やっぱり、強敵を倒す場合は、相手の思考を見抜かないといけないと思う。どうかしら？」

テーブルの中央には、大きなサラダが盛られている。

「狼は？」

「うーん、もっと分からないわねえ」

ルブルは、口の中をもごもごとさせていた。

「やっぱり、サラダは美味しいわねえ。味付けがいい。処で、この細長いのは何かしら？」

「パスタよ。貴方の時代には無かったの？」

「んーん、ちょっと分からない」

ルブルは首を傾げた。

「そう言えば、ローザとかいうのは、“食事”をしているのよねえ。人間を使って」

「そう、どうも男が限定らしい」

「うーん、やっぱり、私には分からないわね」

二人は、少しずつ、お互いの感覚だとか、趣味だとかを話し合っていた。

ストーブの炎が、ちろちろと、燃えている。

この城は、死体によって積み上げられている。

ルブルの傲慢さを端的に象徴するものだった。

「人形遊びの事を覚えている」

ルブルは、淡々と語り出す。

「いつだって、私は人形にばかり話し掛けていた。それがとっても、楽しいから。髪を撫でたり、おままごとをしたり。着せ替えとかしたり、人形の口にスプーンを突き立てていたなあ。多分、時間は凄く満たされていたのだと思う」

「お友達はいなかったのかしら？」

ルブルは口元に手を置いて、しばらくの間、考えていた。

「いなかった。友達、多分、それは他の人達の言葉なのだと思う。だって、それは仕方の無い事なのだったから。私はこういう風に生まれ付いていて。全てが人形遊びなのだと思っていたから、だって、人って気持ちの悪い生き物だもの」

「ふうん、私は人間の人格を認めているからこそ、人間が憎いの。だから、全部、踏み潰してしまいたくって」

二人は笑い合った。

どう言えばいいのか分からない感情が、二人の中には芽生えていた。

「ねえ、メアリー。人間って本当に気持ち悪いわよね」

「そうね、ルブル」

二人共、満面の笑顔を浮かべていた。

多分、この言葉を分かり合える相手が、ずっと欲しかったのかもしれない。

どうしようも無い程の、世界や他人との乖離感が二人の中にはあった。

他人というもののの中に、自分と同じようなものを見つける事が出来ない。

そういった感覚をつねに持ち続けていたとでも言うべきか。

人間が、自分と同じ生き物だとはどうしても思えない。

初めて、自分と似ている者と出会えたような気がした。

きっと、それはとてつもなく大切な出来事なのだろう。

「人間を踏み躪って何が悪いのかしら？」

ルブルは言う。

「他人を憎んで、何がいけない事なのか私には分からない」

「そう、憎めるだけいいじゃない。そんなに他人を深く想えるのなら。私は、他人に対して、何の感情も持つ事が出来ない。それはどうしようも無い事だった」

ルブルの心は、どうしようもなく深く閉ざされていた。

自分以外の全ての人間が、動く物体に見える。

けれどもだ。

「私は貴方に抱く感情は何なのだろう？ 分からないなあ、感情って、何なのだろう。私には、何も分からない。何故、存在しているのだろうか？」

ルブルは何かを迷っているみたいだった。

「どんな感情も、どうせそのうち風のように何処か遠くへ行ってしまふのだと思う。私は何故、スフィアを憎んでいたのか、今はもう分からない。私はきっと、ずっと同じ場所に居続ける事が出来なかったから。それが苦しかった、ねえ、ルブル」

「何？」

「私は幸せかもしれない。私達の幸せの下には、大きな犠牲が積み上げられた。ルブル、私にもっと、邪悪なものを教えて欲しい。私は憎悪そのものになりたい」

メアリーは右手を差し出す。

ルブルから、取り替えられた右手だ。

ルブルは、メアリーの右手を強く握り締める。

暖炉の炎は赤々と燃えていた。

窓は部分部分が破壊されているので、隙間風が入り込んできて、やはり寒くて仕方が無かった。

どうしようもない程に愛しいものが見つかったような気がした。

†

どうにかして、前に進まなければならない。

自分自身を奮い立たせる為の言葉が欲しい。どうすれば、いいのだろうか。

「私、戦えるのかな？ 私、……人を憎めるのかな？」

自分自身に言い聞かせる。何で、こんなにも不条理なのだろう。

憎みたくもないのに、憎めと言われている。

戦いたくもないのに、戦えと言われている。

どうすればいいのだろうか。

そもそも、心の何もかもが崩壊しそうなのだ。どうすれば、それを繋ぎ止めようとするのかの方が大変だと言うのに。

憎む強さもあるのかもしれない。

全部、自分が悪いんじゃないのかと思ってしまうのだ。こんな事態を引き起こした自分が全部、悪いんじゃないのかって。

今はただ。

前に進みたい。たとえ、その結果が、メアリーや水月が期待したものじゃなかったとしてもだ。

そもそも、ずっと自分の意思なんて無かった気がする。

憎悪と悪意を掲げる二人。あの二人の考えに押し潰されそう。

二人に振り回されてばかりなのだ。

このままでは駄目なんだと思う。

自分が何であるかを確立しなければならない。

「私は、一体、何なのかな？ 私は一体、どうすればいいのかな？」

ずっと、振り回されっぱなしだ。どうしようもない。

何故、生きていいのかを自分で形作らなければならない。

きっと、もっと何か違うものと戦いんじゃないのかと思う。

大きなものと戦いのだろうか？

それはどんなものなのだろうか？

「みんな、楽しく笑えればいいのに。何故、何だろう？」

もっと、年齢を重ねていったら、どす黒い感覚が芽生えていたのかもしれない。きっと、あの二人も、何かがあって、暗い世界で生きる決意をしたんじゃないのだろうかと思ってしまうのだ。

閉ざされてしまっているものを、こじ開けなければならないんだと思う。

こんなにも、みんな苦しそうにして、こんなにもみんな絶望しているのなら、自分が何とかしようと考えてしまう。

「そんな感じだから、私、メアリーに嫌われたのかなあ？」

彼女の歪みをどうして、理解して上げられなかったのだろう。

そんな風に、思考の反復ばかりが湧き上がってきてしまうのだ。

みんなを理解する為にはどうすればいいのだろうかなあ、とばかり思っている。

ただ、今は何かの力が目覚めつつある。それが、一体、何なのかは分からない。

もしかすると、そのうち、その力が何なのか分かるのかもしれない。

「うーん、本当にどうすればいいのかなあ」

今は地図が分からない状態なのだろう。

腹の音が大きく鳴る。

取り敢えず、お腹が空いた。何か食べてみてから考えようかと思う。

水月から渡されたパンは食べてしまっていたし、温かいスープは冷たくなってしまっている。食べ物をちゃんと口にすれば、きっと元気が出てくるかもしれない。

「私は戦いたいんじゃないで、きっと何か誤解があるんだって、メアリーに伝えよう。それから、おじさんの事も。友達も事も、きっと彼女は謝ってくれると思う」

大事な何かを壊されたからって、大事な人を憎む事も難しい。

自分はただの子供でしかないのだろうか。ならば、それでもいいのだろう。

スフィアは歪んで育つ事なんて出来なかった。

それは多分、おじさんの教育のお陰なのだろう。

人をちゃんと信じる事だとか、不幸な目にあっても、それは未来の為にとっても大切な事なのだとか。スフィアの養父は、彼女にそのような教育を施していた。

養父は、熱心な宗教家だったのだ。彼女に、こういうものが正しいのだと教え続けた。人を憎んではいけないだとか、自分が苦しくても、頑張れば、ちゃんと人は見てくれているだとか。

水月はスープを用意してくれた。

羊肉をしっかりと煮込んで、ターメリックの葉を漬け込んでいる。

彼女はそんなに料理が得意ではないと言う。

スープの味がある程度、付いてくると、今度はふかしたお米を注ぎ込む。

そして。

ターメリック風味の羊肉のリゾットでも名付けようと彼女は言った。

「そんなに私は料理が得意ではない。味は？」

「いいですよ、何かちょっとお米をぐちゃぐちゃし過ぎかなって感じですけども。でも、美味しいです」

「そうか。宮廷にいた頃に覚えたのだが。やはり、コックの味は再現出来ない」

「水月さんって、本当は苦手なもの多いんじゃないですか？」

「お前は得意な物などあるのか？」

「ううっ……、そう言われると困ります……」

「それにしても、料理というものはやはりコミュニケーションには最適だな」

「メアリーはですね！ とっても、クッキーを焼くのとかが巧かったんですよ！」

「そかそか、お前って本当にみんなから、妹みたいに思われる奴なのかもな」

「水月さん、それって、私の事、妹みたいに思っているんですか？」

水月は柔和な笑みを浮かべた。

何で、彼女は普通に楽しい事ばかり言ってくれないのかなあとスフィアは思った。

スフィアは水月に、自分に変な力が目覚めつつあるのかどうかを言おうか悩んだ。

けれども、多分、力の事はとっくに知っているんじゃないだろうかと思った。

そう言えば、と考える。今更ながら、水月は何者なのだろう？

気付けば、スフィアの近くにいた、といった感じなのだ。

そう言えば、彼女に関して、深く訊ねた事が無い。

どういう処に住んでいたのだろうかとか、どんな経歴を持っているのだろうかとかも分からない。

訊ねてみようかと思うのだけれども、どうしても聞けそうに無かった。

.....もっと、私は他人を知ろうとしないと駄目だと思うんだけどなあ。

この世界は、自分だけが生きているわけじゃないのだから。

もっと、他人の事を考えないと駄目なんだと思った。でなければ、知らずに傷付けてしまうんじゃないのかと。

どんなに近くにいても、人は分かり合えないものなのだと思う。

そういったものの積み重ねによって、人は分からないまま生きているのだろう。

けれども、何故、分かり合えなかったのかを追い掛けたい。

考えて、考え尽くした先に、何かが見つかるのかもしれないから。

自分の何が駄目なのだろう？

優柔不断な処なのだろうか。何の基盤も無く生きている処なのだろうか。

そういった部分を、水月などは嘲っているのかもしれない。

.....私、ちゃんとしなければ駄目なんだよね？

戦わなければならない。

けれども、戦い方がまるで分からない。

そうやって、考えている間にも、時間はどんどん過ぎていってしまう。

多分、メアリーはこれからも人を殺すんじゃないのだろうか。

出来れば、それを止めたい。

彼女と話し合いたい。

理解出来なくても、理解しようと思いつけたいのだ。

そして、多分、自分自身の事もちゃんと理解しないとイケないのだろう。

自分を形作るものが、一体、何なのだろうかとか、自分には一体、何が出来るのかとか。そういったものの先に何かがあるのかもしれない。

.....そか、私は私の生き方を決めないといけないのかなあ？

「私、頑張らないとなあ。.....そう言えば、水月さん。水月さんって、一体、何の為に生きているんですか？ ええっと、ほら、人生の目的とかってあるんですか？」

「私か？」

彼女は顎に手を置いて、考える。

そして、口元を三日月形に歪めて言った。

「他人の悲劇が見たい。以前も言ったような気がするが、とてつもなくシンプルな理由で生きているだろう？ 私はそんなもんなんだよ」

「そんなもんって.....」

「分からないか」

「分かりませんよ。どういう事を言っているのか。えっと、何ですかね。人の不幸を見たいとかそんなもんなんですか？」

「いや、不幸なんてそこら辺に転がっているよ。誰だって不幸なのかもしれない。この世界に生まれてしまった事が不幸なのかもしれない。けれども、私が見たいのは、もっとそう、邪悪でどうしようもなく、救い難くて、何が何だか分からない不幸。そうだな、私は漠然とそれを悲劇と呼んでいるのかな？ 人間の悪意を突き詰めていった先に、一体、何があるのかを私は知りたいたいのかもしれない。スフィア、私はもしかするとお前がそれを見せてくれるのかもしれないと期待しているんだが……」

スフィアは、また頭がこんがらがった。

「期待されても、その、困りますよ。私に、もっと不幸になれって事なんですか？ これ以上の不幸ってよく分かりません。私、どうすればいいか分からないし」

「いやいや、期待していたんだが。もしかすると、お前ではなく。私とお前が向かう先にある何かによって、見届けられるかもしれない、かな」

そう言って、彼女は意味ありげに微笑を浮かべる。

やはり、彼女の事はまったく理解出来そうにないなとスフィアは思った。

「私はそうだな。今回の物語。お前らの物語で、憎しみとか絶望とかいうものを知ってみたいというわけだ。それがどのようなものなのか、私は見てみたい。そこから生まれるものを収集してみたいんだ。人間の奥底にある負の感情とは何なのかを知り尽くしたい。そうだな、スフィア、今回はそれを見たくて、お前の物語に介入しようと思ったというわけだ」

水月はスフィアには、やはり理解不可能な事を延々と述べるだけだった。

ただ、彼女から、凄く気に入られているらしい事だけは分かった。



アंकゥは牢屋の中で目覚めた。

ローザの城に入ったままではいいのだが。彼女の配下に出会って、負けてしまった事までは覚えて  
いる。

自分の意識がまだ存在するという事は、自分は殺されてはいない。

とすると、此処でしばらくは生かしてくれるのだろうか？

「ああ、畜生。俺ももうお仕舞いなのかな……」

鉄格子が目の前にあるだけで、身体には特に異常が無い。

手足に枷を嵌められたりとかもない。身に着けている服もそのままだし、持ってきた持ち物も  
隣に置かれている。

自分はどうするべきかと考えた。

この牢屋から抜け出すべきなのだろうが、迂闊に出る事も出来ないんじゃないのか。

しかし、先ほどの敵には気付けば負けていた。

不安ばかりが襲い掛かってくる。

「俺、どうすればいいんだろうなあ？」

目覚めてから、数十分くらい経過すると、上の方から足音が聞こえてきた。

それは、一人の老人だった。

法衣のようなローブを身に纏っていた。

「お前の名前は何と言う？ わしの名前は氷帝と言う。ヘリックスの手によって、捕らえられたのだろう？」

「ん、ああ……？」

「ローザ様の命を狙ってきたのか？」

アंकゥはそれを訊ねられて、眉を顰めた。

これから、尋問が始まるのだろうか？ あるいは、拷問が始まるのかもしれない。

処刑される覚悟は決めておくべきだ。しかし、出来ればその前に一矢、報いたい。

彼は自身の能力、ソリッド・ヴァルガーを撒き散らそうと考えていた。……。

「のう、お主の名前は何と言うのだ？」

「俺か？ 俺は……アंकゥ。名前なんて聞いてどうするんだよ？ これから、俺を始末する予定なんだろう？ どうせ、俺の家族はみんなローザの手で殺されてしまっている。俺から何か情報を引き出そうとしたって徒労に終わるだけだぜ。俺はたった一人で、此処に乗り込んできたんだからな」

それを聞いて、氷帝と名乗った老人は驚きを隠せない顔をしていた。

「やはり、そうなのか。お前はこの城に一人で乗り込んできたのか。では、やはりかなりの手練なんじゃろうな。それはわし達にとっては、幸運な事だ。なあ、青年、一つ相談があるのだが、聞いてくれないじゃろうか？」

「何だ？」

「ローザ様と、わし達の手助けをして欲しい」

氷帝はそんな事を言った。

アंकゥは意外な顔をした。

「ローザは俺の家族の仇だ。俺は……」

「そうじゃと思う。おそらくは、ローザ様が“食卓”にしている街の住民の誰かなのじゃろう？ しかしじゃ。ディーバを含めて、お前達も拙い事態になるぞ。もし、出来るのならば、わしらに一時的にでも協力して貰えないじゃろうか？ その後で、ローザ様に挑むなり、わしらがお前の始末の仕方を決めるなりしたいんじゃが」

アंकゥは首を捻る。

「何か、わけありみたいだな？」

「そうじゃな。ローザ様がおそれる事態になりつつある」

「どういう事だ？」

「魔女ルブルと名乗る者がローザ様に宣戦布告をした。魔女と名乗る敵は強力な化け物で、ロー

ザ様も困惑しておられる。更にローザ様は、此処では無い別の地下牢に眠る太古の化け物の封印を解いたんじゃない。到底、扱い切れるもんじゃない。ヘリックスが危険視しておられる。ローザ様は操れると申しておるのじゃが。わしはヘリックスと同感だ。あれは、あの化け物は……、到底、わしらやローザ様で扱い切れるような者なんかじゃない」

アंकウは聞いていて、ますます、わけが分からないといった顔になる。

彼らには一体、何があったのだろうか。

「もっと、どういう事なのか教えてくれ。俺は手助けをすればいいのか？」

「魔女と狼を倒す手助けをして欲しい。どちらも、わしらの国ディーバが簡単に破壊されてしまいかねない敵なんじゃ」

老人は渋面を作る。

「もうすぐ、大きな戦争が始まるかもしれん。だから、一人でも強力な戦力が欲しい。わしには分かる。お主はかなりの実力の持ち主なんじゃろう？ この城に入ってきた者で、ローザ様に近付いた暗殺者は何名かいるが。大抵は、あっさりとローザ様に始末されてしまった。けれども、お主はかなり警戒しながら、攻めてきたな？ ヘリックスがいなければ、ローザ様に本当に危険が及んでいたのかもしれない」

「ふうん？」

アंकウは考えている。

この老人は一体、何が言いたいのだろうか。取引がしたいのは分かるし、多分、自分がしばらくの間は殺されないであろう事も分かる。

「それから、もしお主の態度次第では、この戦争が終わった後も、わしらの軍に入っても構わない。わしはお主のような若者が好きじゃ。ローザ様も、ヘリックスもお前が気に入っておる。ヘリックスはお前の能力がどんなものなのか、気になっておったぞ」

そう言うと、老人は牢屋を離れて、行ってしまった。

しばらくの間は、どうやら生き残ってしまったらしい。

それから、何日か程の間、食事の時間以外は誰も来なくなった。

アंकウには、しばらく考える時間が与えられた事になる。

これまで、復讐の事ばかり考えていたのだが、どうにも拍子抜けしてしまった。酷い拷問なども覚悟していた。しかし、どうもそういったものが無い。

しかも、どうにもあの老人や他の者達も、アंकウが気に入っていて、彼を仲間に引き入れたいみたいだった。

復讐とは、何なのかを振り返って考えてみる。

ローザは父や兄、それから母の仇だ。それは間違いが無い。

そして、その怨嗟はなおも終わる事が無いみたいだ。

ただ、しばらくは流れに身を任せてもいいかもしれないかなとも思った。

ローザを殺害して復讐を果たすのは後だ。

取り敢えず、自分は一度、敗北してしまった。本来ならば、今、此処で生きてはいない。だから、今、考えたり物を食ったりしている事は人生の付録みたいなものなのかもしれない。

ローザ達にディーバを守りたい事と、ローザの支配による他国への暴政は別の問題で、目的が同じものでないのならば、別に自分が動いて協力してやってもいいのかなと思った。

家族は、今の自分をどう思うのだろう。

復讐は中々、果たせそうにない。

## 十

スフィアの腹立たしい処、それは自然体で自分は何だって出来るんだと、万能感に満ち溢れていて、その事を思い込んでいる処だとかだ。

自分は他人から愛されて当然で、自分を愛していない奴は、押し付けがましく自分を愛してくれと強請っていく。それは果たして純粹だと言えるのかだとか、あざとさの塊なんじゃないのかだとか。

メアリーは、いつだって、彼女が憎らしかった。

そして、そういった部分に気付こうともしないし、多分、気付いた処で変えようとしなくても、うんざりだった。

何故、あんなに世界には自分しかいなくて、自分ばかりが愛されて当然なのばかり考えているのだろう。

あるいは、メアリー自身がそういった人間に憧れているのかもしれない。

だからこそ、もう一人の自分を見るように憎らしくて仕方が無いのか。

少なくとも、メアリーの視点からは、スフィアという存在はそのように映っていた。

あれは、何だったか。

初恋の相手だったか。あるいは、人生で二回目に恋をした相手だったか。

初恋の方は、過ごしていた孤児院で、自分が物心付く前に話していた何歳か年上の男の子だったような気がする。そちらの方は、自分でもちゃんと覚えていない。

メアリーは、ちゃんと思い出してきた。確か、三年前だ。

メアリーよりも、一つ年下の男の子で。スフィアよりも四歳上の男の子だった。

そう、確か、三年くらい前の事だ。朦朧としていた記憶がはっきりとしてくる。

スフィアが十四歳くらいの頃だ。

その男の子は、明らかにスフィアの事が好きだった。

そして、よくスフィアと一緒に遊んでいた。

メアリーはその男の子に、上手く想いを伝えられなかった。

その頃のメアリーは、仕事場で忙しくて、メイド長に叱られてばかりいて、すっかり自分に対しての自信を喪失していた。ストレスで肌も荒れてしまって、顔に赤い湿疹のようなものがいくつも出来始めていたりしていた。

その頃のスフィアは丁度、第二次成長期に入っていて、すっかり美少女へと育っていた。

いつの間にか、何も出来なかった自分の妹のようなものが、自分よりも遥かに周りから愛されるような存在になっている。

そんな事が酷く腹立たしくてならなかった。

幻覚を見始めたのは、その頃からだろうか。

最初は、うさぎだった。うさぎが、雪の地面を歩いている。

うさぎが歩いていて、奇妙な事にうさぎが通った足跡が無かった。

更に、途中で歩いているうさぎが、いきなり何処かへと消えてしまった。

メアリーは、その現象が何なのか分からなかった。ただ、疲れているだけなのだろうと思った。そして、次は鳩だった。

鳩が、木の上に止まっていて、急にいなくなった。

「スフィアも見ていると。ああ、この子。絶対、生涯を通して私よりも幸福の絶対数が多くて、私よりも物凄く充実した人生を送るんだらうなあって思って。彼女の人生は潰す事に決めた。理由はそれだけなんだと思う」

ルブルは彼女の言葉を黙って聞いていた。

「私よりも多くの友人に恵まれて。私よりも素敵な恋をして。私よりも苦労や徒労も無くて、他人のマイナスの感情に触れずに生きて、みんなから認められて愛されて生きていくんだらうと思うと。もうね、人間は平等の下、生まれる事なんてまず無いのらうと思ってね」

ルブルの顔は、真摯だった。これまでにないくらいにだ。

「ルブル。どう思う？ 私はスフィアが憎くて堪らない。誰にでもある事なのかもしれないけれども、私はたまたま力を手に入れて。たまたま、抑えられなかった」

「ふうん。グラニットの街を焼くだけの根拠って、そんな些細な人間関係だったの。それはとっても素敵なんだと思うわ。やっぱり、貴方には魔女の素質がある」

そう言って、真っ黒なドレスの女は微笑みを浮かべていた。

「私は自分の境遇と。他人に対する怨嗟を抑え切れない気質を持った人間なのだと思う。どうも、それは幼少期から変えられない。私はきっと嫉妬深くて、劣等感の塊で。幸せな人生を上手く生きられない。だから、あの子のような人間って、この世界に対する憎悪を向けたい者の象徴なのかもしれない」

「そうなの」

「憎しみは人間の素直な感情を曇らせるのかもしれないわね。あるいは、不幸は。でも、私は私の行動を後悔しないし、私の気質や性格なんてのも否定するつもりなんて無い。私は限らない自由の下で生きていたいから。その為ならば、全ての邪魔者を排除するべきだと考えている」

「メアリー。私は貴方のそのどうしようもない程の、個人に対する憎悪が膨れ上がっていく処が大好き。もしかすると、私もいつか殺したくなるのかもしれない。多分、貴方は相手を不幸にする為だったら、自分の命なんてどうだっていいとくらいに思っているんだと思うわ。とてつもなく歪で素敵な思考回路を持っているんだと思う」

ルブルは虐殺が大好きなのだと言う。

何の悪意も無く、誰もかもを踏み潰してしまいたいのだと言う。

これまでそうやって生きてきたし、これからもそうなのらうと彼女は言う。

人の命を踏み躪る事は美德なんだと、と彼女は言う。

人間が豚や牛を殺すのと同じように、ルブルは人間を殺害して、死体として再利用する。彼女にはその時に、何の躊躇も罪悪感も存在しない。

その中で、初めて自分と同じ存在だと思ったのがメアリーなのだと。

メアリーは、それが何を意味するのだろうと、色々と思いを巡らせるのだった。

## 十

「でもまあ、そのメアリーって奴から、多分、お前さ。人間のクズだっ、ってくらいに思われているんじゃないのか？」

「な、な、何でなんですか？」

「さあ。まあそういう人種も存在するって事だ。認識が歪んでいるんだ。他人に対する見方が捻じ曲がっているんだよ。どうしようもない程に、呪詛を内部に抱え込んでいるんじゃないのかな。そして、別にお前である必要は無かったのかもしれないしな」

「わ、分からないです」

「境遇は人間の人格を歪めていく。お前はきっと、彼女から世界中で一番の非情なゴミ野郎だっ、ってくらいに思われているのかもしれない。下種で卑劣で汚くて、他人なんて簡単に踏み躪り、裏切りを何とも思っていないで。それでいて、何故だか周りから愛されて、人間が手に入るあらゆる幸福をこの手に収める事が出来るという人生を約束された者なのだと。そういう風に思われているのかもしれないぞ？」

「何で、そんな風になっちゃうんですか？」

「メアリーにとって、孤児院と屋敷での仕事が人生の全てだったからじゃないのか？」

水月は、淡々と分析するように述べていく。

「まあ、彼女も。広い世界を見て、あらゆる人間を見ていけば、また世界に対する認識の仕方が変わっていくのかもしれないな。ああ、そういうものなのだろう」

「ううっ、私、彼女に何をしてあげられたのかなあ？」

「そういう態度が、結局の処、彼女の怒りを買ったんだと思うぞ。哀れみを持って彼女に接したりしなかったのか？ 優越感を持って彼女の性格や人生を支配したいだとか。彼女はずっと自分の傍にいて当たり前だとか。そういったものが、きっと彼女を追い詰めたのかもしれないな」

水月は、スフィアを責めるように言う。

「お前が当たり前だと思っている善意が、実際は罪を生んでしまったんじゃないのかな。人間一人の人生を軽く破壊するだけのものがあつたんだろうな。お前のメアリーに対する好意とやらは。スフィア、人間っていう生き物はどうやら、お前が思っている以上に複雑で、綺麗事なんてまるで通じなくて。歪んでいて、間違っているのかもしれないぞ」

「私……………」

「苦しみや不幸は人間を憎悪や怨恨、怒りへと掻き立てる。他人に対する余裕も無くなっていく。小さな事でも、他人を折り潰したくなってくる。そういうものなのだろうな」

スフィアは、真っ白になりそうな頭を、何とかクリーンにしようとしながら、ひたむきに、彼

女の言葉に耳を傾けようとする。

「彼女にとって屋敷での仕事は苦痛と絶望でしかなかったんだろう。未来が閉じていると思いつけていたのだろう。お前からしてみると立派に見えたかもしれないが、彼女は自分を籠の鳥だと思っていて、自由が欲しくて。何処にでも飛んでいける鳥が妬ましかった、それだけなんじゃないのか」

水月は容赦が無かった。

けれども、何処か、優しさのようなものも感じた。

「まあ、お前がメアリーを憎まないのは。おじさんとやらの教育が良かったんだろう。話を聞く限り、熱心に宗教とやらをお前に教えたそうじゃないか。そういう風に人格が形成されたんだろうな。しかし、大抵の人間はお前みたいには育たない」

スフィアには分からない。

メアリーの持っているような、強い生に対しての動機付けなんてスフィアには存在していない。そう言えば、いつだって流されるままに動いているだけなんじゃないだろうかと思っている。

どうすれば強くなれるのだろうか。あるいは、どうすれば何か目的のようなものを手に入れる事が出来るのだろうか。

「私、どうしたらいいのかなあ？」

「さあ、ずっと流されるまま生きていくだけなのかもしれないな。人間ってのは、大抵の場合、手に入るかどうか分からない希望みたいなものを持って生きていくんだろうな。しかし、そんなもの、簡単に崩れていくものなのだろう。どんなに、そいつが持っている才覚が凄かったとしても、結局の処、この世界を構築しているのは、そいつとその周りだけじゃないのだからな」

「世界、ですか？」

「そう、世界だ。まあ、この世界なんてみんながみんな幸せになるわけじゃない。だから、人間ってのは、宗教だとか、死後の世界だとか、来世だとか、空想の世界だとか、哲学とかを作り出したわけだ。私はそういったこの世界の構造を何処までも嘲っているんだよ」

スフィアは、ふと思う。

「水月さんは人間っていうものを信じていないんですね……」

「そうだな。人間を信じていないというか、人間の作り出した世界をかな。まあ、欺瞞だとか、汚いものだとか、凄く見てみたいんだよ私は。多分、その先には何も無いだろうけれども、どうしようもない程に私は自分が生きている実感を思い出させてくれるものだから」

この世界には、生涯、何にもなれずに希望だけを抱き続けて死んでいった人間も無数に存在する。誰にも悲鳴を届ける事が出来ずに朽ちていった者達もだ。

そういったものによっても、人間の世界は積み上げられてきたのだろう。

人間とは、平等ではなく、どうしようもない程に不遇な生き物でしかないのだろう。

どんなに努力しようが、どんなに苦労しないが、叶わない望みだって幾らでもあって。

何をやって報われない人生だって、存在する。

「何かさ、お前って、グラニットがまだ存在していて。メアリーが街を破壊するまでは、やりた

い事と違って無かったのか？」

それを聞かれて、スフィアは困ったような顔になる。

「確かに……私は、漠然と何をしていけばいいのか分からなかったかも。おじさんのお仕事を継げばいいかな、くらいには思っていたけれども。でも、それだけかなあ。うーん、私には何も分からなかった」

「やっぱり、優柔不断に生きていたんだな。流されるままに」

考えたって、悩んだって、物事というものは一つとして動かないものなのだ。

だから、とにかく今は前に進むしかない。

とにかく、自分の弱さを何とかしなければならぬ。

十

メアリーはふと、スフィアに対する憎悪が消えかかっているような気がした。

ルブルを見ていると、確かに怖いと思うし、いつ彼女の悪意が自分に向くのか分かったものではないが、別にそれだってどうでもいい事なんじゃないのかと思えてくる。

自分は不幸を感じて抜け出したかったのではないのだろうか。

多分、不幸だとか憎悪だとかってのは、その場所に留まり続けるから起こってくる感覚なのだろう。自分のいる世界が閉ざされていると感じて、人間ってものは、そういった負の感情が強く巻き起こってくるのだろう。

そして、自分は人一倍、そういったものを持っていたのだろう。

メアリーは、今はとにかくローザとジュダスを倒す事ばかりを考えていた。

胸の奥が高揚しているのが分かる。

こんなにも、強く目的があると楽しくて仕方が無いのかと思えてしまう。

これから、ディーバまで行って、都市を焼き尽くして回りたい。

屋敷で働いていた時は封じ込めるしかなかった破壊衝動を、今はルブルに全面的に肯定されてしまっている。なら、全力で彼女の役に立とうと思った。

自分はそんなにまだまだ強くない。

マルトリートをもっと、強力な能力にしなければならない。

もっと、イメージを研ぎ澄ませないといけない。

どんな幻覚を実体化すれば、相手にとって嫌がるものになるのか。

あの狼を倒すには、どうすればいいのか。

妬まずにはいられない衝動とは、何なのだろうか。

自分が嫌いだからなのか、自分が置かれている環境が嫌で仕方が無いからなのか。

愛憎という相反する二つの感情の総括の仕方が分からない。

どうしようもない程に、他人という存在がある事で不自由さが生まれてくるのだろう。

いっそ、自分も他人も生き物だと思わなければ、どれ程、楽なのだろうか。

ふと思うのは、普通の人間のように幸せになりたかったのだが。メアリーにとって、孤児院を

出てからあんまり楽しい事なんて無かったような気がする。

どうしようも無い程の強い徒労感ばかりに襲われていた。

とにかく、スフィアの事も忘れて。メイドの仕事の事も忘れて、ついでに孤児院での記憶の事も忘れて。完全に新しい人生を考える事もいいのかもしれないと思った。

「私には、あんまり何も無いんじゃないのか.....」

不幸なんてものは、他人に押し付けられるものなのかもしれないなあと思った。

「メアリー、人は何者でも無いのよ。私からするとね。だって、人が生きている間に出来る事って、大して無いんだと思うわ。人間なんて、簡単に死んじゃうし。どうしようもない程に弱い生き物なんだから」

ルブルは戦力を強化すると言った。

あの狼に対抗する手段は、今後、考えるとして。

それ以外にも、ローザという敵を倒さなければならない。

地上を二人のものにするつもりだ。

十

ジュダスは吼える。

歌うように、吼える。

彼は自分の分身体をディーバの街中に飛ばして回っていた。

彼の全身は、血が煮え滾っているかのようだった。

「力が戻ってきた。しかし、俺は何をそんなに震えているんだ？ あの魔女程度ならば、簡単に倒せそうなのだが。何かを訪れようとしている気配を感じている。それは、予感なのだろうか？」

ディーバに住まう者達が、次々と、地面に倒れていく。

そして、彼らは影のようなものへと飲み込まれていく。

「俺は疫病そのものの化身のようなものだ」

彼は、再び吼えた。

遠吠えは、街中に響き渡る。

無差別に、彼のヘル・ブラストが暴れ回っていく。

まさに、それは死の行進そのものだった。

「弱い奴から死んでいけ」

彼はディーバを走り続ける。

狼を見た、と。子供達がわめき散らす。

大人には、彼の姿は見えない。彼の幻覚で作られた幻影は、イメージに強く働き掛けており、特にイメージを失った多くの大人達には彼の姿を見る事が出来なかった。

彼の能力によって、倒れていく者は、子供や老人が先だった。

特に、身体の弱い子供や、寿命が近付いている老人が、彼の遠吠えを聞き取る事が出来て、死

の闇へと飲み込まれていく。

ヘリックスの能力によって、一時的に魔女の城へと強い分身体で向かう事が出来たが、彼の能力はかなり弱体化して顕現されている。

それでも、彼は満足げに呟いた。

「死は等しく、何者にも与えていく。そして、病気は弱い者達から発病していくのだろう。俺が撒いているのは、救い難い疫病そのものだ。死に焦られるという病気なんだ」

彼は楽しそうに死に行く者達を、ディーバの中で高い位置にある地区から見下ろしていた。

「さあてな、死とはそもそも何なのだろうな？ 俺は咆哮によって、みなに思い出させているだけだ。お前らの自由は死によって奪われていくのだ。死は自由を奪い、あるいは、死は自由そのものなんだ」

彼はまさに、地獄からやってきた裁きの王であるかのようだった。

あるいは、この世界を暴力と破壊によって支配する暴君そのものであった。

おそらく、彼に比べるのならば、ローザでさえも、まともな君主でしかないのだろう。

ジュダスには、秩序というものが存在しなかった。

あるいは、彼は死を撒くという理由のみが秩序だった。

彼の前では、弱い者から死んでいく。

その現象を行う理由など、彼には何も無かった。あるいは、彼が存在している事そのものが、死を撒き散らす理由そのものなのかもしれない。

ジュダスは走る、何者をも死へと平伏す為に。

ジュダスは踊る、冥界へ旅立つ者達への餞の為に。

ヘリックスは、遠くから、その光景を眺めていた。

あの狼を止められる者など、誰もいなそうだった。

ローザは、ヘリックスの報告を聞いて、寝台の上で神妙にこれからの事を考えているみたいだった。

「ジュダス……か。裏切りを意味する者とも聞いている。元より、私達の手で使えるような奴なんかじゃない。彼は確かに、強力な戦力ではあるが。魔女よりも強敵なのでしょうね。私はどうすべきか」

地下牢から、ヘリックスに連れられて、アンクゥが現われる。

そして、ヘリックスが、窓を開けて、遠くにいる狼に指先を伸ばす。

「あいつ……、あいつの封印を僕とローザ様は解いてしまった。魔女ルブルの軍政は、ゾンビの集団だ。それに対抗するのが難しいと踏んでしまって。僕達は、魔女を倒さなければならないのだけれども、同時にあの狼も止めなければならない」

アンクゥは少しだけ、呆れたような顔をする。

彼は状況を頭の中で、纏めると、素直に思った事を口にした。

「お前ら……馬鹿じゃないのか？ どうにもならない暴力を何とかする為に、どうにもならない暴力を解き放ってどうするんだよ？」

「仕方の無い事なのよ」

寝台から、布が開かれる。

中から、真っ白なドレスに身を包んだ金髪にティアラを被った女が現われる。

ヘリックスは少しだけ驚いた顔をする。

「ローザ様……」

「私の能力『ドゥーム・オーブ』の力の概要を教えて欲しい？」

アंकゥは首を傾げる。

「どういう事だ？」

「まず、貴方にはどうやら効果が無いみたい。そして、どうもヘリックスにも効果が無い。氷帝にも、効果が表れない。私はそういった素質のある者を、なるべく部下にするようにしている。だから、貴方を選んだ」

アंकゥはますます、首を傾げた。

「どういう事なんだ？」

「私の能力『ドゥーム・オーブ』は、対象や一帯にいる者達の女に対する欲望に働き掛ける事が出来る。そして、なおかつ私の容姿を綺麗だとか、私を自分の物にしたいだとか思った相手を、私は“飲み込む”事が出来る。そして、私はそういった者達を食べて、自らの生命エネルギーに変える事が出来る。……どうも、ヘリックスや氷帝はそういったものに淡白で、貴方も私に対して、敵意や殺意しか抱いていない。そういう相手には効果が無いの。それから、やっぱりジュダスにも効果が現われない」

「そういう事だったのか……」

彼の街も、彼の街に住んでいた人々も。女には効果が現われなかった。それから、一部の男達にもだ。

おそらくは、男の持つ性欲に働き掛ける力なのだろう。

彼は、大体、その女の使う能力の概要は把握しつつあった。

確かに、アंकゥは目の前にいるローザに対して、殺意ばかりしか湧いてこない。

それから、自分は今後、復讐の為のみに生きると考えていた為に、異性と恋愛する事などもまるで考えていない。

そういったものから、ローザの能力を防ぐ結果に繋がっているのだろう。

「僕はヘリックス。それから、その氷帝もだけれども、みんな不安定な力を有しているからね。僕達の偵察だけでも、魔女側には、相手を石化するガスを放ってくる奴と、幻覚を操作しているっぽい、わけの分からない女の人がいる。それだけでも、どうにもならないんだ。君は強いんだろう？」

「ああ……、強いぜ」

彼はそう言って、自身の能力である『ソリッド・ヴァルガー』を問答無用でローザに叩き付けようかと思ったが……止めにした。

ローザは泰然としている。

何故か、彼は攻撃をしてこないだろうと信じ切っているかのようだった。

「なあ、俺はいつでもお前を殺すつもりでいるんだぜ？」

ローザは首を横に振る。

「それも承知しているわ。でも、私にとって国がとっても大切だっていう事も理解して欲しい。貴方の住んでいた街の人々は、私の国ディーバに危害を加えようとしていた。だから、私の食卓になって貰った。分かるでしょう？ 貴方の側も、完全な正義で無い事くらい……」

アंकウの唇は震えていた。

それは怒りなのだろうが、果たして、何に対する怒りなのだろうか。

「生きる事というのは、残るべき者と死んで朽ちていくべき者を切り分ける事なのだとは私は考えているわ。そういうものでしか無いのだと。ジュダスの場合は無差別だし、敵の魔女の場合は、人類全てを等しくゴミのようにしか思っていないみたい。どちらに正義があるのか私には分からないのだけれども、少なくとも、私は私が正しいと思っている事をやっているだけ。国を維持していく事とか。この世界に生きる人々の幸せの絶対数とかの為ならば、犠牲になっていく人々も沢山、必要って事」

ローザは淡々とそのような事を言う。

「だから、私は別に私を殺そうとする連中がいくらいてもおかしくないと考えている。それは、もうどうしようも無い事なのだ。正義によって残る側から漏れてしまった者達や、その家族からしてみると。私は死ぬべき人間なのだろうから。貴方の名前はアंकウと言ったかしら？」

「ああ……」

「私を殺す前に、私のように悲劇を振り撒いている魔女やジュダスも倒すべきなんじゃないかしら？ あの連中は、少なくとも、この私よりも最悪な存在だと思うわよ」

彼女は、彼の心の奥底に刃物を入れるかのように、言葉を紡ぐ。

アंकウはぐうっ、と歯軋りする。

「その狼、何をやっているんだ？」

ヘリックスは言った。

「彼の本体は地下牢に繋ぎ止めているんだけど。僕の能力を使って、分身のみを出したら、やっぱり僕達の言う事を聞いてくれなかった。これから、ちゃんと交渉に入ろうと思っているんだけど、多分、駄目なんじゃないかなあって思っている」

「何で、封印を解いたんだよ？」

「再三、言うけれども。僕達じゃ勝てないんだよ、魔女とそのとりまきに。あんなに強い力を見せ付けられるなんて……。僕達の側は、軍隊を簡単に制圧出来る氷帝が最大の力だったんだけど、氷帝相手になんかの善戦をしてきた。多分、今度はもっと強力になってやってくると思う。どうにもならない」

「ふん、そんなものか。浅はかだな？」

「民を守る為だよ、仕方が無い。みんな幸せに暮らしているんだよ。それを僕達は守らなければならないから」

「一応、私は軍隊を持っていて、沢山の兵士がいるんだけど、駄目でしょうね。能力者相手にはまるで歯が立たない。アंकウ、貴方だって、その気になれば、兵団の部隊くらいなら、簡単に全滅させる事が出来るのでしょうか？」

「ああ、当然だ」

「能力者というのは、卑怯な存在なんだって私は思うわ。この世界に降りてきた悪夢そのものね。この世界の神や摂理に背いているとしか思えない。私がそうであるように、貴方がそうであるように」

十

ヘリックスとアンクゥは、別の地下牢へと向かった。

そこには、巨大な狼が眠りに付いていた。

時折、狼はぼんぼん、と尻尾を振り回す。

アンクゥは眉を顰めた。

「ジュダス……起きているんだろう？」

ヘリックスがそう言うと、狼は立ち上がる。

「何のようだ？ 小僧」

「君は何で、ディーバの人々にヘル・ブラストを向けたんだ？ 君は僕達の言った事をやっていればいいんだよ」

ふん、とジュダスは唸る。

「俺の力がまだちゃんと機能するかどうか試したくてな。あの魔女ルブルとかいうのは、どうだっ  
ていいが。それよりも強い奴が現われる気がしてならない」

「ローザ様が君を始末する事も考えている。どうする？」

一触即発だった。

アンクゥは、ひたすらに状況を見守る事に決めた。

「それでも構わないぞ？ 俺は誰が相手でも戦うつもりだ。俺は本来ならば、何者にも束縛され  
ない者なのだからな。ローザも、魔女も、俺のヘル・ブラストで、冥界へと送ってやろうか？  
勿論、お前も、その男もだ」

「ふうん？ でも、君はもっと別の目的が何かありそうだね？」

ヘリックスは慎重に彼の言葉を聞きながら、彼の言葉の裏側を読み取ろうとしていた。

「臭いとでも言うべきかな」

ジュダスは少しだけ、不安とも狂喜とも付かない不可思議な表情になる。

「臭い？」

「直感と言い換えてもいいかもしれんな。何かかなり拙い者が現われる気配がした。ルブルの城  
の近くで感じた。俺はそいつと戦ってみたい。そいつの姿を確かめたい。そいつは何者なのだろ  
うな？ 興味がある」

「ふうん……？」

ヘリックスは、どう考えればいいのか分からないといった顔になる。

「まあ、いいさ。取り敢えず、あまり暴れるのは止めにしたいかな。それだけ約束して欲しい  
んだ」

ふん、とジュダスは横になる。

ヘリックスは、アンクゥに、一緒に部屋を出るように言った。

しばらくして、ふはあ、とヘリックスは深呼吸を繰り返していた。

そして、何だか、少しだけ安堵したかのような顔をしていた。

「もしかすると、僕が考えている以上に、事態は良好なのかもしれない。……あの狼さんはやり取り次第で懐柔出来るかもしれないね。もしかすると。ローザ様にも、それは言っておこう。それよりも、魔女ルブル。あっちの方はどうしたものだろうか、本当に」

アンクゥは、改めて思考を整理し直す事にした。

どうも、みな事情が色々と錯綜しているみたいだった。

## 十

アンクゥはヘリックスと一緒に、ディーバの街を歩いていた。

ヘリックスは、ディーバで使える何十枚かの紙幣をアンクゥに渡した。

「これは？」

「ローザ様から。給金の前金だってさ。正式に君を雇いたいんだって」

「ふうん」

アンクゥはふわふわとした気持ちでいた。

まるで、夢の中を漂っているかのようだった。

煌々と明かりが漂っている。街行く人の多くはよい身なりに包まれていた。

ディーバは経済的に恵まれている街だった。

アンクゥの住んでいたヴィシヤスは、此処まで豊かな街じゃなかった。

だからなのか、何だか遣り切れない気持ちになる。

「適当に身なりを整えろといいよ」

彼は笑う。アンクゥはやけに馴れ馴れしいなと、思ってしまう。

とにかく、彼は処刑されずに、何故だかローザ達に手を貸す事になった事だ。

しばらく、自分の人生に関して色々と考えを巡らせてもいいかもしれないなと思った。

「俺は何をやっているんだろうな……」

前を歩いて道案内をしているヘリックスに聞こえないように呟く。

彼はバーへと案内してくれた。

そこは、内部を赤い珊瑚の結晶で装飾された場所だった。

ヘリックスは良い酒があると言って、マスターにお酒を注文する。

出されたのは、水色のカクテルだった。

アンクゥはカクテルを口にする。

「ローザ様はディーバを守る為ならば、何でもするよ。君の処のヴィシヤスの街。そこは、ローザ様の力の媒体にされたんだよ」

彼は柔和に、アンクゥの心情を見透かすような声で言う。

「ローザは俺の街に何をしたんだ？」

「此処の街の経済が回る為だね。命を吸収したがつているんだ。他国の命を吸収する事によって、此処の街は栄え続けている」

アंकゥは少しずつ、心が蝕まれていっているような気がした。

本当は、目の前にいる少年も、ローザも全員、殺してしまいたいのに、自分は何をやっているのだろうと思った。

「ヴィシャスは宝石の鉱山があったからね。ドゥーム・オーブで人々に犠牲になって貰った後に、兵士達が、ヴィシャスの鉱山を奪った。そこで、ディーバは栄えたんだ。ディーバという街は、あらゆる国の命を吸って存続していると言っていいのかもしれない」

ヘリックスはアंकゥの怒りを買うのを覚悟で物を言っているように思えた。

アंकゥは、この少年に対して、どういう感情を向ければいいのか分からなくなった。

それにしても、カクテルの味は良かった。思わず、その事を言いそうになる。

「僕はね。君が過去を捨てて、僕達と一緒に戦って欲しいと思うんだよ。そうだね、たとえば、あの氷帝だって、昔、ディーバの軍隊に家族を殺された。そんなものなんだよ、結局はね。みんな過去の恨みを捨てて、現在だとか未来だとかを築いていっている」

「なあ、ヘリックス……。お前もなのか？ お前はそれで辛くないのか？」

少年は首を横に振る。

「僕の事は言えない。でも、これだけは分かって欲しいのは。何だか、君とは気が合いそうだなあと」

「何、言ってやがるんだ？」

アंकゥは少年を睨み付ける。

ヘリックスはおじけずに言葉を紡ぐ。

「ディーバは昔、酷い貧困国だった。みんな、がりがりに痩せ衰えていてね、でも、ローザ様がそれを立て直した。ディーバは他の国の植民地みたいなものだったんだけど、その国も破壊した。世の中ってのは、そういう風に動いているみたいだよ。どうしようもない事にね」

アंकゥはグラスを叩き割りそうになる。

「お前は、そういったものを受け入れろって言っているのか？」

「受け入れろっていうか、こういう構造になっているってだけだよ。どうしようもないんだと思うよ。それに、ディーバの実態だとか、ローザ様の考えだとかを話さないと君とは仲良くなれないような気がしてさ。何だろうね、どう考えの落とし処を付ければいいのかね。諦めろ、とか。忘れろ、とか。でも、そういうのじゃ君は納得しないでしょう？」

「だから、受け入れろ、なのか？」

ヘリックスは無言になる。

彼もまた、何か過去にあったのかもしれない。

「ああ、それから。多分、ローザ様を殺害して、ディーバを破壊したとしても。この世界全体から、どうしようもない憎しみだとかが消えるわけじゃないと思うよ。憎しみは君個人の問題で、それが君にとって人生の全てかもしれないけれども。ローザ様を殺して、この街を破壊して、

復讐を遂げたとしても、多分、君の気は何も済まないかもしれないよ」

少年はずっと、意味ありげな事を言い続けていた。

アンクゥは、どう答えればいいのか分からなくなってきた。

当然、自分に正当性はある筈なのだ。ローザに、ディーバに復讐したい。

しかし、目の前にいる少年は、もっとこの世界のどうしようもない何かを伝えたいかのようだった……。

「誰が犠牲になるのか変わるってだけなのか？」

アンクゥは、ふと、ヘリックスが何を言いたいのか分かったような気がした。

「そうだね……。誰かの不幸の為に、幸福な人間の生活は積み上げられているんだと思う。そして、この世界はそんなものなのだとは僕は思う。残念な事に……」

ふと。

アンクゥは、段々、自分は馬鹿みたいな団子理屈を言われているだけなんじゃないのかという気持ちになってきた。

もっともらしい事を言っているように思えるが、まるで筋が通っていない。そして、目の前のヘリックスは、アンクゥの気持ちなど何も理解せずに、尊大に物事の道理のようなものを言って、彼を説き伏せようとしているのだ。馬鹿馬鹿しいにも程がある……。

「そして、これからやってくる魔女ルブルを倒さなければならないのは。ディーバの国民の幸せの為だよ」

「ヴィシャスを解放しろ、って、ローザに言っておけよ」

突然。

アンクゥの全身が震え出したかと思うと、彼を中心にして、何かが飛ばされていき、バーの中がズタズタに破壊されていく。

彼の両眼は、敵意で満ち満ちていた。

「胸糞悪い。俺は行く、じゃあな」

アンクゥは、椅子を蹴り飛ばすと外へと出て行った。

店内にいた人々が不信そうな顔で、彼の後姿を見ていた。

ヘリックスは困ったような顔をして、溜め息を吐いた。

「やっぱり、僕には誰かを説得する事は出来ないなあ。余計に怒りを買っているような気がする。ジュダス相手にもそうだったような気がする。駄目だねえ、僕は」

彼はマスターに、再び、酒を注文する。

マスターは顔を酷く顰めていた。

## 『国家と生権力』

---

生かすべき命と、殺すべき命によって、国家は運営されているのではないのだろうか。

国が国として、維持されていく理由は、命の切り分けではないのだろうか。

権力側が国民に与えるものは、まず、何よりも命の保証なのではあるまいか。

そして、問題は“死んでいい命”というものが存在するのだろうか。

資源は無限では無い為に、資源を奪い合う為に戦争というものは起こるのだろうか。よって、戦争というものは、外交の延長なのだとされている。

国民に対して、可能な限りの幸福を与える為には、富の十分な配分や、宗教的な装置、それから犠牲になるものが必要になってくるのだろうか。

国家の存続の為には、つねに犠牲が必要なのではあるまいか。誰をも生かす事など、出来ないのだから、誰かを生贄に捧げる事によって、国家は国家として存続していくのではないのだろうか。

つまり、人間が存在するという事は、何かの犠牲によって成り立っているのだろうか。

他人を憎まざるを得ないという事実。

それは、突き付けられた人間という存在の宿命なのだから。

スフィアは自分の力であるグリーフを、色々なものに試して使っていた。

意志を込めた右手で触れば、壁を老朽化させたり、食べ物を腐敗させたりする事が出来るみたいだった。

気になるのは、もし人間相手に使ったら、どうなるのだろうという事だった。

手の中から、一本のナイフを形にして取り出す事が出来る。

どうしようも無い程に生まれた自分の心の形だ。

水月にこの能力が何なのかを相談してみた処。

「自分で色々、やってみればいい。後、多分、人間に使うと。人間が老いる」

それだけ返された。

まるで、水月はスフィアの力を大まかに、大体、分かっている。それでいて、スフィアが自ら自分の力をどのように使うのかを様子見しているかのようだった。

この力で、ルブルを倒そうとは思っているのだが……。

……私は、みんなが仲良くなればいいと思うなあ。

自分はきっと馬鹿なのだろうなあと思った。

漠然とだが、メアリーに殺されたおじさんも、友達も、生きて戻ってくるんじゃないかという妄想が、心の何処かであって、きっとそんな考えを持っているから誰かを憎むとか出来ないんじゃないのかと思った。

どうやっても、現実を受け入れられそうにない、受け入れようと思っても、受け入れるのがとても難しい。

ただ、どんなに弱くても、目標なんて無くても、取り敢えずは立ち上がろうと思った。それ以外に、自分が何かをしようとする動機付けなんて無いのだから。

ウィンディゴに戻った方がいいのだろうか。

あそこには、間違いなくメアリーがいる筈なのだろうから。

「私、頑張るよ、水月さん」

スフィアは真摯な顔で言った。

「ウィンディゴに戻る。ルブルの城に。そこに彼女はいるのだろうかから」

水月も立ち上がる。

「私も目的が出来た。あの得体の知れない“狼”に会いに行こうかと思う」

何か、少しだけ思い至ったかのような口調をしていた。

それぞれ、思惑は出来上がったみたいだった。

ただ、水月は酷く何かを懷疑しているかのようであり、スフィアの方は臆病さから抜け出せずにいるみたいだった。そもそも、二人共、何の為に旅を続けているのだろうか、未だに分からない。人間関係なんてものは、そんなものなのかもしれないなあ、とスフィアは思った。

取り敢えず、二人共、目的は出来た。

後は、その目的に向かって歩き出すだけなのだ。

「水月さんって、何か願い事とかってあるんですか？」

「願い事か、そうだな」

水月はふっふっ、と笑う。

「死にたい、が、ストレートな願いなんだが。やっぱり、もっと別の願いもあるのかもしれないな。もしかすると、私は人間の底知れない人間の闇の先には、何か綺麗なものがあるのかもしれないと思っているのかもしれない」

「ううん、やっぱり、私には何を言っているのか分からないです」

飄々として掴めなかった水月の考えを、スフィアは段々、理解出来るような気がしてきた。

そう、多分、水月も何か大きな答えを探しているのではないのだろうか。

そんな気がしてならないのだ。

まるで、彼女はずっと、彷徨っているような気がした。出られない迷宮の中をだ。

「死と対峙しなければならないのかと私は思っている。それに、この世界に満ちた闇の輪郭をもっと形にして、理解したい。そう、もしかすると、私は人間とはつまり、何なのかという事を知りたいのかもしれないな」

スフィアは不思議な顔で、彼女を見る。

水月は、何か大きな出口を探しているんじゃないのだろうか？

スフィアはふと、そんな事を思った。

きっと、彼女の理解したいものを、スフィアは理解する事は難しい事なのかもしれない。

「まあ、いい。じゃあ、向かおうか。ウィンディゴの街へと」

スフィアは首を縦に振った。

†

「この子の名前はダーヴァ。こっちの子はデルドス、こっちの子はミラミス、と」

そう言いながら、ルブルは奇形的に作り上げた何対かのゾンビに名前を付けていく。

それぞれ、巨大な翼を生やしていたり、顔が幾つもあったり、腕が幾つもあったりする巨大な怪物だった。

メアリーは傍らで、その光景を眺めていた。

やはり、無数のゾンビ程度では、今、戦っている敵の能力者相手に酷く心許無い。

自分がもっと強くならなければいけないのは分かっている。

「さて、ゾンビの帝国を作りましょうか。生ある者達の何もかもを根絶やしにする。屍の帝国を積み上げようと思うの」

ゾンビ達は、行進する。

目標はディーバだ。

ディーバの何もかもを破壊してしまえ、とルブルは命令を下している。

「ジュダスという狼を倒す対策を立てないといけないのよね」

メアリーは色々と戦略を練り込んでいた。

多分、あの狼は本体のようなものが、ディーバにあるんじゃないのかとルブルは言っていた。だから、自分はゾンビに紛れて、再び、ディーバに攻め込もうと考えている。

## 十

スフィアと水月は、再び、ウィンディゴの街を訪れていた。

街の所々には、ゾンビが徘徊している。

そう言えば、此処の街は並んでいる建物自体もゾンビであって、固めた腐肉によって建設されている。

水月は平気で、宿を取る。

スフィアは少しだけ引き攣った顔をするが、水月の気にしなければ問題無いという言葉によって、無理して強がりながら、宿へと止まった。

宿の店員は、骸骨の顔をしていた。

水月は、先払いで言いか？ と問うてから、店員に一日分の宿泊費を支払う。

この辺りで、共通に使われている硬貨だ。

店員は、部屋の鍵を渡してくれた。

そして、二階にまで上がって、二人はベッドの中へと潜り込む。

「ねえ、水月さん。このベッドとかも、ゾンビの身体なんですかねえ？」

「さあな。あまり、深くは考えない方がいいんじゃないのか。少なくとも、私はどうだっていい」

「はあ……」

本当に、彼女は並みの神経をしていないんだなあと思った。

窓を開けて、外を伺う。

外には、遠くに大きなお城があって、その近くには高い時計塔が生えるように建てられていた。

スフィアは、夢現だが覚えている。あの時計塔の上には、巨大な狼がいた事をだ。

何だか、ずっと幻覚だとか悪夢の中を彷徨っているかのようだった。

それでも、この夢の蜃気楼の先に、何かが待っているのかもしれない。

取り敢えず、メアリーに会ったら、何て言おうかと考えていた。

「取り敢えず、また仲良くしてくれないかな？　じゃ、駄目かな。お前を赦さない、も何か違うんだよね」

水月は、温かいスープを作る。

そう言えば、この宿の中に置かれている食器なども、ゾンビの肉体の一部なのかと思うと、スフィアは震えた。水月は平気で、部屋の中に置かれている食器などを使っていた。

スフィアは、スープは、いつも携帯している物がいいと言った。

「気にしなければ、本当に気にならないぞ？」

「私は気にするんですよ！」

昼が終わり、夕方に差し掛かっていく。

明日の朝頃には、覚悟を決めて、城の中へと突入するとスフィアは言った。

水月は任せる、と、スープを飲んで、焼いた肉を口にしていた。

## 十

あれが、ディーバの街か。

夜の街は、金剛のように一面が輝いていた。

翼の生えた巨大なゾンビの背中に跨りながら、メアリーは街を見下ろしていた。

このゾンビの肉体は、かなり奇形的で筋骨隆々の身体に、獅子を思わせるような顔をしている。ルブルが、人間数体に加えて、何種類かの動物を混ぜたのだと言っていた。

……ゾンビというか、悪魔みたいね。この怪物って……。

メアリーは心の中で、苦笑する。

以前、戦った氷帝という男は現われない。

メアリーは、自分とゾンビを囲んで、景色を反射する鏡の幻影を作り出して、自分が誰かに認識されるのを防いでいた。

ゆっくりと、慎重に。

メアリーは、ディーバの街へと降り立つ。

「さてと」

彼女は自分の靡く髪をかき上げた。

彼女は城の地図を取り出す。

高い丘の方の上に、巨大なローザの城が聳え立っていた。

メアリーは、人ごみの中へと入り込みながら、城を目指す事にする。

此処では、流石に透明化は面倒だ。人間が沢山いると、幻術による景色の反射を巧く作り出すのが難しい。その辺りの巧妙さも、もうちょっと上達させておかなければならないなあと考えた。

賑やかな街だなあと考えた。

城の方へと歩いていく。

途中、露店の出回る市場や、綺麗な塗装の店などが目に付いた。

繁華街という場所なのだろうと、漠然と情報だけは知っていた。グラニットの街には無かったような場所だ。

ふと、何か違和感を覚えた。

「何なのかしら？」

人ごみの中を、見渡す。

確かに、何かがおかしい。しかし、そのおかしさが何なのかが分からない。

メアリーは警戒しながら、ローザの城を目指す事にした。

ふと、おかしさというか違和感の正体に気が付く。

足音だ。何者かが、背後から、メアリーを付けているのだ。

「何なのかしら？」

メアリーは、しばらくの間、様子見をしながら、城を目指す事にした。

おそらく、城までの距離は、数キロ程度はあるのだろう。

その間に、既に、敵にメアリーの事を認識されているという事はかなり拙い事態かもしれない

彼女を追跡している者がいるのだとすれば、振り払わなければならない。

メアリーは、さっそく、マルトリートの幻影作成に取り掛かっていた。

ふと、人ごみが少ない場所に突き当たる。

足音が止んだような気がした。

何か得体の知れないものが、胸に打ち込まれているかのようだった。

そう言えば、いつの間にか明かりが無い暗闇に誘い込まれてしまったような気がする。

気配が現われる。

「僕の能力は『フューネラル』と言いましてね」

男は喪服のように黒い服を身に纏っていた。

メアリーは、眉を顰めた。

ぽつり、ぽつりと、辺りに明かりが灯り始める。

メアリーは少しだけ、不安な顔になった。

明かりは、どうやら蠟燭みたいだった。

「貴方の葬儀を執り行おうと思うのです。それは僕が成すべき事ですからね。氷帝から、貴方の存在は聞かされています。ローザ様を殺したいんでしょう？」

メアリーは。

作り出した氷の刃を、男の全身へと叩き込んでいた。

男は、地面に叩き付けられる。

しかし、

「貴方も幻覚でも使うのかしら？ それとも、不死の身体なの？」

メアリーは警戒しながら、訊ねる。

「単純なのですよ」

男は言う。

そして、両手を広げた。

溶けた蠟のようなものが、メアリーが作り出した氷の刃に巻き付いており、どうやらそれを受け止めたみたいだった。

メアリーは、ふうん、と男を見据える。

「中々、やるじゃない。そういえば、この前、私と戦ったおじいさんと、貴方、どちらが強いのかしら？」

「いえいえ、私めは氷帝などの足元にも及びません。ただ、貴方を始末するだけの力はあるのだと言っておきます」

「処で、今、何を行っているのかしら？」

「貴方に対しての、死の宣告を執り行っているんですね。貴方の葬儀はもう始まっている」  
メアリーは辺りに並んでいる蠟燭の焰を眺めていく。

一つ、一つの焰が暗闇から消えていく。

メアリーの胸元が苦しくなる。おそらく、この攻撃は……。

「ふん、大した事なんて無いじゃない？ 貴方は多分、私の心臓を止めたいんでしょう？ この蠟燭の明かりは、私の寿命を象徴しているのかしら？」

男はふん、とメアリーの顔を見据える。

「その通りです。よく分かりましたね。流石です」

「大した事無い能力なんじゃないの？ この私を馬鹿にしているんじゃないかしら？」

メアリーは挑発する。

「いいえ……」

男はそう言うと。

懐から、幾つものナイフを取り出した。

「私は少々、肉体にも自信がありますので」

そう言いながら。

男は、メアリーに向かって、拳の連撃を繰り広げてきた。

ばきりっ、と破壊音が辺りに鳴り響いていく。

メアリーは既に、硬質のガラスの盾を、男との間に作っていた。

男は、少しだけ冷や汗を変えて、後ろへと飛び退いていく。

そして、メアリーを攻撃する隙を伺っていた。

蠟燭の焰が、また一つ消えていく。

その瞬間に、メアリーの心臓が激しく高鳴った。

「上等よ。貴方のお名前は何て言うのかしら？」

男はくっくっと、不気味な笑い声を上げる。

「僕の名前はワイズ。ローザ様の城にて、執事長をしている。そして、親衛隊の一人でもある。  
ヘリックスに言われている。もし、君が現われたら、僕が迎撃するようになってね」

彼は両手の拳を強く握り締めていた。

おそらくは、体術に自信があるのだろうか。

まともに、組み敷かれたりしたら、まず勝てないかもしれない。

メアリーは、ワイズと名乗った男となるべく距離を置くようにする。

相手に攻撃を叩き込む隙を作り出さなくてはならない。

しばらく、様子を伺っていて、また辺りの蠟燭の一つが消える。

この蠟燭の光の全てが消えた時、おそらくメアリーは死を向かえるのだろう。

「中々、やるじゃない。でも、ルブルの役に立つ為ならば、お前ごときに負けていけない」

彼女は、更に幻影の武器を作り出していく。

何かの武器で、目の前の敵を倒せるものがある筈だ。

スフィアと水月は、魔女の城の中へと入り込む。

正面玄関からの突入だった。誰か門番がいるかと思ったのだが、そうでは無かった。今の処、無人だ。

酷く不気味な印象を漂わせていた。

ぐるるるるっ、と獣が戦慄しているような声が聞こえる。

「水月さん、私、怖いです……」

「さて、此処には何が潜んでいるのかな？」

二人は辺りを慎重に見回していた。

「とにかく、警戒は怠らない事だな。いつ、どんな事が起こるのか予想が付かない」

スフィアは首を縦に振った。

それにしてもだ。此処はやはり、何か霊廟のようなものを感じる。実際に、そうなのではないのか。

ひたひたと、何処かで足音のようなものが聞こえてきた。

二人は廊下を慎重に進んでいく。

「何か、得体の知れないものが呼吸しているのかな？」

水月は言う。

スフィアは右手にあるナイフを強く握り締めていた。いざとなったら、これで立ち向かえと水月に言われている。

勇気を出して、立ち向かわなければならない。

間違いなく、化け物が現われるのは分かっている。

だが、何だか、警戒が薄いような気がしてならない。

水月は、ドアの一つを開ける。

「ああ、これ見てみろよ」

スフィアはドアを覗き見る。

すると、中には無数のゾンビ達が部屋の中に横たわって、息を潜めていた。

すぐに、扉を閉じる。

「仕方無いなあ。ゾンビを相手に戦っても、面倒臭いだけだろうからなあ」

「ええ……、私、やっぱり、少し怖いです」

「なれるさ。どんな苦難にも、それに私が付いている」

スフィアは水月が頼もしく思えた。確かに、彼女が傍にいれば、どんな相手が現われてでも、何とかかなりそうな気がした。

ひたひたひた、と。

何者かが近付いてくるような音が響いてきた。

水月は楽しそうな顔をしていた。スフィアの顔は酷く強張る。

どんな化け物が、この通路の先で待っているのか分からない。

戦うとはどういう事なのだろうかと思フアは考えていた。

取り敢えずは、とにかくは前に進むしかないのだと思った。

ナイフを強く握り締める。もし、敵が現われたら、これを突き立てよう。

どうせ、相手はゾンビか何かだろう。……メアリーと戦う事なんて、余り考えられなかった。

しばらく、廊下を歩いている。

すると、何かが後ろから追ってきているように思えた。

スフィアは振り返る。

背後には、何もいない。

「水月さん……私、とても怖いです」

「まあ、頑張れ、としか私は言えないかな」

水月はやはり、かなりの余裕がある。

多分、どんな化け物が現われても、彼女ならばあしらえるんじゃないのだろうか。

「私、水月さんの“能力”見てみたいです」

「そのうち、見せるよ」

水月は淡々と言った。

音が聞こえた。

とーん、とーん、と、やはり何かが背後から迫ってきていた。

スフィアは振り返る。

通路の奥にある、部屋の一つが開いている。そして、その部屋から、何かがはみ出していた。

スフィアは不安に負けて、その部屋へと近付いた。

ナイフを慎重に振り翳す。

そして、扉を左手の方で、そっと触れる。すると、扉がぼろぼろになって崩れていく。右手だけではなく、左手でも水月がグリーフと名付けた力は使えるみたいだった。

扉に穴が開く。中を覗き込める程度の穴だ。スフィアは穴から、部屋の中を覗き込む。

中は暗い。しかし、徐々に目が慣れてくる。

彼女は息を飲んでいて。

それは、ネズミの怪物のようだった。

別のネズミを頭から齧って行って、背中から、幾つものネズミの顔が浮かび上がっている。ばたばたと、背中から、蝙蝠の翼を広げていた。尻尾からは沢山のミミズが生えて、うねうねと動き回っている。

……あれも、ゾンビなのかしら？

彼女は足が竦んで、動けなくなりそうだった。

「スフィア、上の階へと続く階段を見つけたぞ」

水月は言う。

どうも、この城の中のようになっている。多分、この城は好きなように形を変える事が出来る為に、どのように組み替えても大丈夫なのだろう。

どしゃり、と。上の階から、大きな物音が鳴り響いていた。

水月は気にもせず、上の階へと向かっていく。

「さてと、何が出てくるのかな？」

スフィアは、怪物ネズミのいる部屋を離れて、即座に水月の下へと向かっていく。

二人は階段を登る。

すると、今度は大広間に出た。

辺りには、霧のようなものが漂っている。

そして、壁には幾つもの絵画などが立て掛けられており、鎧などが置かれている。

「ああ。スフィア、拙い事になるかもしれないぞ」

「何ですか？」

「此処は、敵からかなり見られやすい場所になっている。余り、此処にはいない方がいい。多分、とっくに私達が侵入した事は気付かれているとは思いますが。……………」

水月とスフィアは、驚きの表情を浮かべる。

鎧の一つが、かたかたと動き始めると、中から、ぽろぽろと鎧が外れていく。最初に外れたのは腕の部分だった。それは青白い腕だった。次に外れたのは右足だ。剥き出しになった腕と足は膨張して、巨大化したかと思うと、鎧がどんどん脱げていく。

中から現われたのは、複数の人間を合成して出来た怪物だった。

怪物は、ふしゅうううううという音を発しながら、二人を見つめていた。

「お前は？」

水月は訊ねる。

「俺はダンダルガル。ここの大広間の守護者だ。此処は、ルブル様が用意した決闘場だ。ちょうど、お前らのような侵入者を処刑する為に、城の中でわざわざ作られた場所だ」

「ふうん、面白い事をしているんじゃないか。ルブルって奴も」

水月は楽しそうな顔をしていた。

ぱち、ぱち、と掌を開いては、閉じるという謎の仕草をする。

ダンダルガルと名乗った怪物の肉体が膨張していく、筋肉が隆々と膨れ上がり、身体の中から、無数の骨が飛び出していく。そして、彼の全身から目玉や腕、脚などが生え出してくる。

「スフィア、あれは私が何とかする」

水月は楽しそうな顔をしていた。

まるで、暇潰しに、新しいおもちゃを見つけた子供のようにだった。

スフィアは息を飲んでいて。やはり、まだ悪夢の中を彷徨っているのかと思った。

いつの間にか、怪物は身体から生えた複数の手足に、剣や槍などを持っていた。もしかすると、身体の中から取り出した物なのかもしれない。

水月は微動だにしなかった。

スフィアは、この場にいるのが苦しくなって、階段の辺りへと戻る。

「ああ、スフィア。今のお前じゃ、この大広間に来るのは、確かに無理だ。後ろに下がっている

」

そう言う水月は、何の戦闘態勢にも入らない。

怪物は、無数の武器を持って、水月の下へと突進してきた。

水月は。

腕を組んで、怪物の動きを見守っていた。

怪物が、水月の身体に向けて、武器を叩き込む。

スフィアは、その光景を目で追い切れなかった。

一体、何が起こってしまったのだろうか。スフィアにはまるで分からなかった。

怪物の半身は、何かによって、綺麗に割り貫かれていた。

おそらく、水月は何らかのアクションを起こしたのだろう。

「ふぐう？ ふぐぐぐうう？ な、なん、何を、何をした？」

そう言いながら、身体半分となった、ダンダルガルはよろめきながらも、消滅した箇所の肉を盛り上げて、再生を行っていた。

「なあ、質問があるんだが」

水月は淡々と訊ねる。

「お前はどのような原理で生きているんだ？ 魔女ルブルは、お前らをどのように操っているんだ？ 不死の肉体を持つゾンビと言っても、その原理は様々だ。そして、お前はどのような風になっているんだ？ 見る処によると、別の物質と融合しているように思えるんだが？」

ダンダルガルの体内から、弓と矢が肉を突き破って出現する。

そして、矢を水月に構えて、打ち込んでいく。

水月は、矢を、あっさりとして右手で掴んで払い除けた。

巨体のゾンビ、ダンダルガルは後ろへと後ずさりする。

「ルブルに、用がある。再会しに来たぞ」

ゾンビはぐうぐうと、唸り声を上げていた。

かたかたかた、と。絵画などが揺れ動いている。

中には、ドレスを着た貴婦人や、農夫、法律家、哲学者、国王、様々な地位と、様々な時代背景の者達が描かれている。その者達が、表情を露骨に動かして、全員が水月の方を向いていた。

そして、みな、一人一人が、絵画の中から、這いずり出してくる。

水月は、下らなさそうに、その光景を眺めていた。

「まあ、お前らごときに私を倒すのは無理だ。さっさとルブルに会わせて貰おうか？」

絵画から出てきた者達は、手に手に、剣や弓矢、斧や短剣、鍬などを持って、水月に襲い掛かろうとしていた。

スフィアは階段の処で、首だけ伸ばして、その光景を眺めていた。

.....水月さんが危機に陥っているように見えるのだけれども、これって危ないのかな？ でも、水月さん、あの大きな化け物相手に平気だったし。.....

能力者がどんな存在なのか、スフィアは知ってみたいと思った。

メアリーが街を火の海にしてから、異常な現象にばかり出会っている気がする。そして、これからも、その異常な出来事は沢山、続いていくのだろう。スフィアは慣れなければならないのだ

と思った。今、見ている光景を現実のもので、自分が立ち上がって生きていかなければならない世界なのだと。

水月は、まるでスフィアに手本を見せるかのような戦い方をしてくれた。

彼女は、素手で、敵の剣や斧などでの攻撃を捌き切っていた。

特別、水月が、何か武術の類を学んでいるわけではないんだろうなあと、スフィアは漠然とだと思った。武術なんて、遠くの国の歴史を記した本に書かれていたものを昔、読んだくらいなのだが。

水月は、まるで風が流れるように、自然に、敵の攻撃を受け流していた。

もしかすると、彼女からしてみると、敵の動きなど、極めて遅く映っているのかもしれない。うさぎが早く走れるように。相手の動きを、完全に見切ってしまうのかもしれない。

そして、水月が相手を軽く掌で触れたりすると、相手は粉微塵になって崩れ去っていく。

スフィアは、彼女が一体、何をしているのか、理解に苦しんだ。

.....何なのだろう？ 水月さんの使っている魔法は。水月さんは、本当に何者なのだろう？

考えれば、考える程に分からない。

「ふうん、やっぱり、ルブルっていう奴は大した事が無いな？ 私はほら、お前らに対して、“撫でているだけ”に過ぎないんだぞ？」

巨大なゾンビは、水月から離れた場所で、それを見ていて呆けたように立ち尽くしていた。圧倒的な力の差。それはどうしようもなく、歴然としていた。

今度は、天井から、何かが降り注いできた。

水月の周辺に、それらの物が落下していく。

それは、どうやら、変な液体のようだった。

液体が降り掛かった処の床は、どろどろに溶解していつている。

水月に向けて、その液体の雨が降り注いでいく。

しばらくして、水月は傷一つも、服の破損一つもなく、佇んでいた。

奇形的な巨人ダンダルガルは、大きく悲鳴を上げると、彼女を背にして走って逃げようとしていた。水月は、指先を巨人へと向ける。

水月は、指先を軽く弾いていた。

瞬間。

巨人の身体に大きな穴が、幾つも開いていく。そして、瞬く間に、巨人の体躯は粉微塵に吹っ飛んで、空気の中へと溶けていつてしまう。

スフィアは、水月の戦いぶりを見て、完全に絶句していた。

「な、な、な、何者なんですか？ 水月さん、貴方は.....？」

水月はスフィアに視線を向けると愉悦を浮かべた唇で言う。

「私か。私は“背徳者”。神に背く者だ。もっと分かりやすく言うならば、もはや、他の者達よりも逸脱し過ぎてしまった能力を持つ化け物だ。まあ、私のような存在を人は悪魔と呼ぶのだけれどもな？」

彼女は、何処か、自嘲的なものを含めて言う。

スフィアは水月の言っている事を理解する事が出来なかった。

ただ、要するに、私はお前の想像を絶するような化け物なんだ、と言っているのだという事は分かった。

「水月さん……………」

彼女が何者かなど、どうでもいい事なのかもしれない。ただ、スフィアは彼女を信じようと誓っている。

これから、自分もちゃんと戦わなければならないのだ。

だから、彼女の行動の一挙一動を見習わないといけないのかもしれない。

「私、どうすれば、水月さんみたいに強くなれるんですか？」

スフィアは訊ねた。

水月は、楽しそうな笑みを浮かべる。

「さあて、そのうち、お前も強くなるかもしれないぞ？　じゃあ、先へと進もう。この先に、魔女とお前の親友が待ち構えているのだから？」

まるで、矢のように、氷の刃を幾つも黒服の男へと飛ばしていく。

黒服の男ワイズは、その刃を、身を翻しながら、かわしていった。

メアリーは、刃を撃ち込みながら、階段を駆け上っていた。

階段の先には、ローザの城が聳え立っている筈なのだ。

彼女は次々と、新しい幻影を生んでは、ワイズへと攻撃し、同時に自身の身を守っていく。

メアリーが取った戦略は、おそらくは敵の能力である蠟燭の焰による死の宣告を無視する事だった。

おそらくは、後、十数分後くらいに、自分の命の鐘の音が終わりを告げるかもしれないが。その前に、ローザ達を全員、始末する。そのような心意気で行動を起こしていた。

そんなメアリーの行動に対して、能力を仕掛けたワイズの方は困惑したみたいだった。

まさか、自分の命を顧みない選択を取られるとは思わなかったみたいだった。

「やはり……、君は相当にクレイジーなんだね。おかしいとしか思えないっ！」

「さあて、どうなのかしらね？」

氷の弾丸を、幾つも幾つもワイズへと撃ち込み続ける。

ワイズは追ってくる。

ワイズは気付く。

辺り一面が、熱を帯びている事にだ。

いつの間にか。

ワイズの全身が発火していく。

メアリーは、今度は周囲に焰を撒き散らしていた。

ワイズは、必死になって、彼女に追い付こうと走り続けていた。

「ははっ？ この僕が解除しないと、僕の能力であるフューネラルが君の命を奪うぞ？」

「ふん、その前に貴方のとこの君主を倒させて貰うわ」

もはや、頂上は近かった。

メアリーは、不思議と身軽に階段を走り続けていた。それも、飛び跳ねるように。

彼女は、足元に風の幻影を作り出す事によって、自身の身体をかなり身軽なものへと変えていたのだった。

そして、頂上。

そこには、ローザの城が聳え立っていた。

どくん、とメアリーの心臓がまた弾けそうになる。

「さてと」

彼女は、背後を振り返っていた。

そして、辺りを見回して、姿を現していない誰かに向かって問い掛ける。

「あの男は、私の力を様子見したいだけなんじゃないのかしら？ 噛ませ犬もいい処ね。少しは可哀相だとは思わないのかしら？」

虚空から、声が返ってきた。

「思わないよ。それに、一応、彼もそれなりの手練だとは思っているけれども。やっぱり、君は中々の強敵なんだよ。以前の氷帝の報告よりも、より強力な能力者に成長しちゃっているみたいじゃないか。やっぱりね」

そう言って、城の城門の辺りに、渦のような空間が出来て、一人の少年がその空間の中から姿を現した。

「貴方は何と言うのかしら？」

「ああ、僕の名前はヘリックスと言う。事実上、ローザ様の側近で、片腕のような者だよ」

「ふうん？ 凄いわね」

「もっとも、騎士団長だの大臣だの、これといった地位は持っていないけれどもね。強いて言うならば、作戦参謀って処かな？」

「あら、じゃあ、ルブルにとっての私と同じようなものね」

メアリーを追ってきた、黒服の男、ワイズも頂上にまで辿り着く。

彼の身体には、幾つも擦り傷が出来ていて、メアリーを恨めしげに見ていた。

メアリーは彼をろくに見ずに言う。

「処で、後ろの奴の能力って、解除されるのかしら？ 私は後、数分くらいで、死ぬんだっけ？」

「そうだねえ。君は後、数分くらい放置していれば死ぬよ。彼が意識を失ったりしない限りねえ」

ヘリックスはへらへらとした顔で、メアリーに笑いかける。

「あら、そう」

ワイズは、隙ありとばかり、精一杯の拳を振り上げて、メアリーに襲い掛かる。

既に、メアリーの能力は完全なまでに発動していた。

天空で作られていた巨大な氷の岩石が、流れ星のように、ワイズの全身に向かって降下していく。ワイズは咄嗟に、防ごうとするのだが、その数が余りにも多過ぎた。そして、降り注いでくる氷の岩石は、徐々に巨大な物へと変わっていく。

ワイズは、気付けば、宙を舞っていた。そして、そのまま階段の下へと勢いよく転がっていく。その間にも、追撃として、メアリーのマルトリートの攻撃は続いていた。更に、ワイズが落下する地点の辺りは、小さな焰の柱が燃え立っていた。

溜まらず、男は盛大な悲鳴を上げる。

メアリーは、ヘリックスを注意深く見据えている。

そして、しばらくの間、心臓が何とも無い事に気付く。

「あらあら、さっきの奴。それなりの手練だったんじゃないのかしら？」

「まあ……君が強過ぎたみたいだね」

そう言って、ヘリックスは笑う。

そして、しばらくの間、お互いを睨み合っていた。

「それにしても、堂々と君はこの城にやってくるんだね。氷帝と戦った時もそうだったらしいん

だけれども、威勢がいいというか、何というか……」

「まあ、どうせ、私は自分の命の価値だとか、意味だとかが分からないから。なら、いっそ面白おかしく挑んだ方がいい。それじゃ駄目かしら？」

「ふふっ、それはとてつもなく素敵な思考回路なんだと思うよ？」

「じゃあ、処で。今度は貴方を倒して、城の中にいるローザを殺害しようと思うのだけれども、どうかしら？」

二人の間で、しばらくの間、沈黙が訪れる。

「残念だけれども、僕にはそれ程の戦闘能力は無い。それから、ローザ様も、女相手にはドゥーム・オーブを中々、使う事が出来ない。僕はワイズが何とかしてくれるんじゃないかという淡い期待もあったんだけど、やっぱり駄目だったみたいだからねえ。一応、あの男、あれで兵団長もしていたんだよ？ もっとも、今は格闘技術を教える身に専念していたんだけどね。……やっぱり、僕は能力者は嫌いだよ。平気で、常識を破壊してしまう奴らだからね？」

メアリーは額を指先で軽く搔く。

「まあ、それは貴方は御自身の死を潔く、受け入れる、という答えだと受け取ってもいいのかしら？」

ヘリックスは首を横に振って、両手をひらひらとはためかせた。

「僕は君と戦うつもりは無いよ、頼むから、そんな陰のある目で見ないで欲しいかな」

## 十

「ローザ様に合わせて上げるよ」

メアリーはローザの城の中へと案内された。

彼女は、ローザの片腕だとかいう少年を慎重に警戒しながら歩みを進めていく。

くすくすと、不気味に少年は笑っていた。

此処は『婚礼の間』だと聞かされる。

沢山の男達が、この間の中で、ローザの食事にされたのだと。

そこには、天蓋の付いた寝台が置かれていた。

シーツで隠しているが、中には女が一人いた。

「貴方がローザ？」

シーツの中にいる者は、小さく笑っている。

「そう言う、貴方の方はジュダスが見てきたという魔女なのかしら？」

「ジュダス……。私とルブルを襲撃したあの狼の名前ね。彼はこの城にいるのかしら？」

「そうね。私じゃ、どうも、手に負えなくてねえ。出来れば、引き取って欲しいくらいなのよ。そう言えば、貴方は私を殺しに来たんでしょう？」

メアリーは身構える。

隙あらば、シーツの中にいる敵を剣が何かを生み出して、切り刻んで殺してしまおうとは考えていた。

しかし、何故だか、踏み込めない。

後ろの方では、少年が笑っている。

「私は貴方達の罠に仕掛けられたというわけかしら？」

「いや、君は正式に客人として招待されただけだよ？」

ヘリックスは言う。

シーツの中の女は言った。

「一人で乗り込んでくるとは見上げた者ねえ。ワイズは……重症を負ってけれども、何とか一命を取り留めたみたい。氷帝も貴方は殺していない。どうかしら？ 今ならば、和解してもいいと思っているわ。お互いに痛み分けは嫌だからね？」

ふうん？ と、メアリーは唇に指先を当てた。

「当然、お断りさせて頂くわ。下らない貴方達の為に、私は動くつもりなんて無いし。私はルブルに仕えて、この世界を踏み潰すつもりだから」

ローザは敵意を露にした声音で言う。

「へえ？ 君はそのルブルとかいう奴なんかの下に一生、つきたいの？」

ヘリックスは本当に不思議そうな顔で訊ねる。

メアリーは首を捻る。

「あの魔女。ジュダスと同じ臭いがするよ。人を人だと思っていないよ。君は今は気に入られているかもしれないけれども、いずれ、身を滅ぼすような気がするんだ。君は何も分かっていないんじゃないかな？ ローザ様はこの国を統べている。この国に吸収された人達を、決して不幸になんてしない。ねえ、君、名前は何て言うの？」

「メアリー……」

「そう、メアリー、君は騙されているだけだと思うよ。魔女ルブルを僕は見たから分かる。ジュダスと同じような存在に見える。この概念を聞いた事はあるよね。“背徳者”。神に背く者、人間に対して裏切る者、人間を人間と思わない者。確かに、僕もローザ様も、君と同じように特殊な能力を手に行っている。でも、まだ人間の領域だとは思うよ。背徳者と言う概念は、一体、何なのか、人それぞれが定義するものなのかもしれない、僕が思うには」

「思うには……何なのかしら？」

「悪魔、と端的に言えばいいのかなあ」

メアリーは少しだけ、困惑していた。

自分はルブルと酷く似ているのだと思う。

けれども、確かにこの少年、ヘリックスの言っている事は納得の行く部分もある。

「背徳者か……それなら、私も同じよ。私は人を人だと思えない。人間なんて、簡単に皆殺しにした。……」

「君はまだ、人間に戻れると思うよ？」

彼は少しだけ、真顔で彼女に告げる。

シーツの中から、一人の女が現われる。

彼女は純白のドレスを身に纏っていた。金色の髪を靡かせている。

「メアリー。私も背徳者と呼ばれていた。そして、私自身、それを否定しないわ」

ローザはうっとりとしたような仕草で微笑みを浮かべる。

「仲間を大切にしないといけない。”その唯一の戒律によって、私は私を人の域に戻す事が出来た。人間が人間たらしめている事、それは他者の苦痛が想像出来る事なんだと思う。ヘリックスから聞く限り、ルブルにはそれが無い。彼女は他者を人形や虫けらだと思っている。メアリー、今は貴方は彼女にとってのお気に入りの人形だけれども、飽きたら、簡単に壊されるわよ？」

彼女は甘言を弄してくる。

前後、二人の能力者に隔てながら、メアリーは思考していた。

こいつらの話には耳を傾けてはならないのだと。……………。

「私も幻覚が使えて……。この空間に過去の記録映像を満たす事が出来るわ」

気付けば。

メアリーの周りは、一面が夜空のような暗黒空間へと変わっていた。

彼女は自分が幻覚使いだから、これが幻覚である事は分かるのだが、一体、何をされているのかしばし、思考が停止する。

かつかつかつと。

軍靴の音が聞こえる。

沢山の者達が剣などで、首を切られたりして殺害されていく。

肉体を激しく損壊されていく死体達、生きながらにして焔の中へと放り込まれる者達、彼らは確かな実感を持って、大宇宙のような空間の中に存在していた。

そして、もう一人の自分自身の幻影のようなものが、映像の中に浮かんでいた。

その顔は、鮮血に染まっている。

「メアリー……。私の『ドゥーム・オーブ』の世界によろこそ。私は人間の持っている欲望を映像化する事によって、醜悪な自らの心を反射させる事が可能だ。私の食事になる男達は、私を欲望の対象にしようとする願望を持つ事によって、その悪意が反射されて、私の胃袋に納まる事になる。私の存在を見た多くの男達は、私を“絶世の美女”と認識したがるのよ。メアリー、女の貴方が私を視た場合、別の現象が引き起こるのだけれども。貴方は何を視ているのかしら？」

「貴方の理屈なら……。私の中の破壊欲を、私自身が視ているという事になるのかしら？」

「貴方は、この光景を見て。何も感じる事が出来ないのかしら？ メアリー」

「そうみたいね……。私は背徳者という存在の素質があるのかしら？」

「まだ、戻れると思うよ？」

ヘリックスは後ろで告げる。

「メアリー……。私は殺すべき者と生かすべき者は切り分けられるべきだと考えている。それが、この世界に存在する多くの者達を結果として、幸せにするのだと。けれども、私は偽善的な事は一切、述べるつもりはないわ。この世界においては“生贄”が必要なんだと考えている。誰かの血肉によって、誰かの飢えを満たすべきだと。ディーバに住まう国民達の殆どは幸福だと思っている。スラムは無く、自殺者の数も極端に少ない。可能な限り、国のみんなが幸せになれる社会を形作っているのだけれども、それは私が他国の資源を貪り尽くしているからなの」

ローザは、言葉を紡ぎ続けていく。

「人間という虚空のような小宇宙を統べる者、それが私、虚空の姫君ローザ。そう呼ばれている。私も人殺し、メアリー、貴方も人殺し。でも、大丈夫。罪を償う事は出来ないけれども、善を成す事は出来ると思う。そして、私にとっての善は、私の国と私の同胞のみの幸福を願う事だったわ」

メアリーは、ううん、と首を傾げた。

「つまり、貴方はこういう事？ 自分達の幸せの為になら、誰がどのように苦しんで死んでいったって仕方が無いと？」

「まあ、平たく言うと、そういう事ね。ねえ、メアリー。私は極悪人？」

「まあ、普通に考えて、そう思うわね。でも、ディーバにいる人達は、貴方を凄く尊敬して、敬うと思うわね」

しばし、二人の間に沈黙が流れた。

「メアリー、私の考えだとかに賛同出来なくて。私を物凄く嫌っても構わない。でも、私達は共通の敵が必要だと思う。“誰の事も人間と見ない奴”は死んだ方がいいと私は思う。何故なら、そんなものは人類の敵だと思うのだから。たとえば、魔女。たとえば、貴方も知っている、あの大きな狼ジユダス。彼らはこの世界に生きていていいとは私は思わない。いずれ、彼らは人類という種そのものを根絶やしにしかねない。ねえ、メアリー……分かって欲しい。貴方は加担しているんじゃないのかしら？ 人間存在を冒涇しようとする行為に。……」

ローザは、にっこりとメアリーに向けて微笑む。

「ねえ、私を殺したい？ メアリー。なら、一日だけ待って欲しい。一日考えれば、貴方の中で何かが変わるかもしれない。そして、もしこの場で私を殺したい場合も、私を殺す事の意味を考えて欲しいの。それも真摯に、ねえ、私が何を言おうとしているか分かるでしょう？」

メアリーは、ローザの言葉に、少しだけ圧倒されていた。

ルブルとはまた違う、どう返答すればいいか分からない言葉を投げ掛けてきている。

思わず、メアリーはこう答えていた。

「分かったわ……。一日、考える。私に危害を加えずに、城の外に出して頂けないかしら？ 一日経ったら、貴方をまた殺しに向かうかもしれない……」

こう答えてしまったのは、判断力が麻痺させられてしまうような映像を延々と見せられ続けているからだろうか。

メアリーは、心の中で自嘲的に笑った。ああ、敵の策略にはまったんだろうな、と。

## 十

ヘリックスは知っている。

ローザの本当の強さは、駆け引き、なのではないのだろうか。

そして、彼自身も彼女のそういった駆け引きの力から、学ぶ処がある。

アंकゥもあっさりと言得してしまっただけで、メアリーから敵意を無くすのも時間の問題なんじ

やないのだろうか？

ローザは相手の心に抱えている悪意や敵意の刃を受け止める盾のようなものなんじゃないのか。あるいは、相手の心を溶かす酸なのかもしれない。

とにかく、ローザの言葉にまともに耳を傾けたものは、どんどん懐柔されていく。それが、ドゥーム・オーブの力ではない、彼女の本当の強さなのではないのだろうか。

もし可能ならば、ローザは、ルブルも、ジュダスも説得する事を考えているのかもしれない。そして、ジュダスの方は、交渉次第では、何とかなる可能性もゼロでは無い……。

ヘリックスは考える。ローザは真の意味で、他人を支配する力があるんじゃないのかと。

……僕も氷帝も、それで彼女に負けちゃったんだよなあ。……………。

ふう、とヘリックスはへたりこむ。

やはり、彼女の言葉は恐ろしいと思ってしまう。

メアリーが陥落するのは時間の問題かもしれない。

ならば、後は魔女のみに集中すればいいんじゃないのだろうか。

しかし、何故だろう。酷い胸騒ぎがした。

どうやったって、どうにもならないような気もした。

……ローザ様が交渉するのが巧いのは、復讐心とか嫉妬心とかを持っている相手に対してのみなんじゃないのかなあ？ そういった恨みを持っている者が有している罪悪感に働きかけているのかもしれない。

しかし、そういったものは、簡単に均衡が崩れてしまうものなんじゃないのだろうか？

ローザは、多分、“騙す”力が巧いのもかもしれない。

自分が述べている事が“正しい”のだという“彼女なりの真実”を植え付ける事が巧いのもかもしれない。多分、ローザは人間の持っている弱さを知っている。ローザは、決して対話する相手の激情を否定しない。怒り、憎しみ、妬み、そういったものを在りのまま受け止めて、肯定し、しかし、相手の心の隙間に入り込もうとする。

ローザは、自身の力に絶大な自信を持っていた。

ヘリックスは、彼女のそんな力は、たまたま巧くいっているだけに過ぎないんじゃないのかという疑いも抱いている。

一時的に、アンクゥもメアリーも、彼女に味方するかもしれない。

けれども……、ガラスのように、信頼なんて脆くも崩れ去る可能性だってある。

いつだって、裏切る理由なんてあるのだし。裏切る事を正当化する為の論理だって、幾らでも出てくる。

ヘリックスは、ジュダスとまた話したくなった。

あの狼も……ローザや、あるいはメアリー同様に、人間が強く持っている表向きの価値観などを破壊するような思想を有している。

ヘリックスは分からない。人間とは一体、何なのかという事を。

ヘリックスは考える。人間にとって、何が善なる行為かという事を。

多分、幸福だとか不幸だとか、弱さだとか悲しみだとかは、そういったどうしようもないささ

やかな考え方の違いにおける断裂によって、生じるものなのだろうから。

十

城の最上階にまで登りつめた。

途中、現われたゾンビや怪物達などは、水月が簡単に薙ぎ払ってしまった。

スフィアは、とにかく彼女の強さに絶句していた。

自分はこんなにも守られていいのだろうかと思ってしまう。

.....私も戦わなければならないのに。

何と戦いたいのだろうか？ 自分自身の弱さとだろうか。

あるいは、自分自身の浅はかさなのかもしれない。

彼女は拳を固く握り締めていた。

窓が開いていた。

そこからは、石の像となった時計塔が見えた。

「水月さん.....」

「ああ、いるな」

水月は、唇を歪める。

暖炉に火が燃えている。

一面には、割れた窓ガラスや壊れた食器などが散乱している。

部屋の奥には、気配があった。

「あら、お久しぶり。待っていたわよ、また会えるのを」

真っ黒なドレスを身に纏った女が、奥の部屋から現われた。

土気色の肌をした女だった。

誰何するまでも無い。

「ルブルだな？」

「魔女さん、ですね？」

二人は訊ねた。

女は、漆黒の髪を靡かせる。そして、同じように漆黒の手袋で髪をかき上げた。

「狼さんに、窓を割られちゃって。本当に困っちゃってね。此処はとっても見晴らしが良かったのだけれども。.....」

「魔女、お前は寒さを感じるのか？」

水月は訊ねる。

「ええ、体温はあるわよ。一応、私は死人じゃないから」

「そうか、私は寒さだとか暑さだとかを感じない。まあ、私の方が化け物なんだろうな、お前よりも遥かにな」

二人の異形は、お互い、睨み合っていた。

スフィアは思わず、訊ねる。

「ねえ、ねえ、メアリーはいないの？ メアリーは何処に行ったの？」

「あら？ 貴方はメアリーのお友達？」

魔女は意地悪そうな微笑を浮かべていた。

「彼女、とっても可愛くて、可愛くて。どんな方法で翫ったら、綺麗な声で死んじゃうのかなあって、思ったりして。とっても素敵な音色で命を絶つんじゃないかって、そう思ってしまったって……」

スフィアは震えていた。

右手から、何か力が漲っていく。

そして、それが形を帯びて行って、大型のナイフへと変わっていく。

「お前なんて、お前なんて、大嫌いっ！」

スフィアはどうすれば、魔女を殺せるのかを考えていた。

水月に頼らずに、魔女を切り付けて殺してやりたい。

そんな事ばかりを考えてしまっている。

「あら、そんな怖い顔をして。ふふっ、冗談よ。冗談。メアリーはね。ちょっと、ディーバという街へと向かって貰った。可能なら、ディーバの女帝ローザやその親衛隊達を倒して貰う為にね」

「貴方が、貴方がメアリーをあんな風に変えたんじゃないの？ 街の人達をメアリーが殺したのも、貴方が唆したからなんじゃないの？」

スフィアは怒りで真っ白になりそうだった。

「あらあら、そんな事は無いわよ。そう信じてもいいのだけれども、ご自由に。グラニットの街の人達を焼いたのは彼女の意思。私を眠りから呼び覚ましたのも、彼女の意思。そして、ディーバを攻める事を選択したのも彼女の意思。私と共に地上を破壊したいと願っているのも、彼女の意思。ねえ、貴方はスフィアというお名前の子でしょう？ メアリーが言っていたように、本当に、……見たいものしか見たくない子なのね」

魔女ルブルは完全なまでに、目の前にいる少女を小馬鹿にしていた。

スフィアは怒りで頭の中が、真っ白になりそうになる。

けれども、どうすれば、目の前の敵を倒せるのか分からずにいた。

ぶわっ、と強い風が再び、室内の中へと入り込み、水月とルブルの髪の毛を靡かせる。

二人の背徳者はとても楽しそうな顔をしていた。

スフィアは二人に対して、困惑を浮かべた表情へと変わる。

「さて、ルブル。私はお前を簡単に倒す事が出来るぞ？」

水月は断言する。

ルブルはそんな彼女を強く見据えていた。

「お前が何をしてくようが。私はお前を簡単に倒す事が出来る。私の目からしてみると、お前は弱い。私の敵なんかじゃない。さて、どうしようか？」

ルブルは水月のそんな言葉に、何か反論でも示そうかと考えているみたいだった。

「ふうん？ なら、何故、私を早く殺さないのかしら？」

ルブルは水月の行動を慎重に伺いながら、訊ねる。

「私をいつでも殺せるなら、貴方は一体、何がしたいのかしら？」

「ああ、そうだな。まず、言うておく。私は人間の悲しみや苦しみ、そしてどうしようもない絶望が見てみたい」

水月は淡々と自身の望みを述べていく。

「お前を殺す意味が私には無い。お前と敵対する意味もだ。お前のやっている事に対して、何の憤りも無い」

「なら、何で、この城に乗り込んできたのかしら？ 私の事は放っておいてもいいんじゃないのかしら？」

「そうだな。私はお前達のやっている事に興味があるだけだ。お前と此処のスフィアと、メアリー。お前らが何を考えて、どのような解答を見出すのかを最前列の席で見たい。それだけだ」

「理解に苦しむわね。……成る程、貴方も……」

「そう、背徳者だ。人間の理解出来るような概念で此処にいるわけじゃない。お前が人間を物体としか思えないように。私は人間の行う邪悪さや悲劇を鑑賞したいが為に。人間の行動の結果を物語のように見立てて、それを傍観したいが為に。今、此処にいる。理解される必要なんて無いよ。私の名前はデス・ウィング、悪意を撒く者だ」

そう言って、水月は両手を広げた。

スフィアは頭がおかしくなりそうになってきた。

水月は、スフィアに何をさせたいのだろうか？

ルブルを倒してなど、くれないのだろうか？

水月は唇を歪める。

「私は知りたいただけだ。人間の持っている闇の総体をだ。人間とは何なのか、私は未だ分からない。多分、誰も分からないのかもしれない。ルブル、私はお前とも会話をしに此処に来ただけなのかもしれない。さて、ルブル。お前はメアリーに対して何を思っているんだろう？ その処はととても聞いておきたい。お前がメアリーに対して、どんな感情を抱いて、どんな考えで、彼女を自らの手元に置いているのかを、私は知りたいんだ」

スフィアは、水月が何を言っているのかどんどん分からなくなってきた。

スフィアにとって、水月は優しいお姉さんみたいなものだった。

メアリーも同じだった……優しいお姉さんだった。……………。

「メアリーは、私と近い魂を持っている者だと思う。ねえ、スフィア」

スフィアは思わず、ルブルに名前を呼ばれてぎょっとする。

ルブルは身の毛もよだつような声で言った。

「私、貴方を早く殺してやりたいんだけど、いいかなあ？」

その眼は、かなり本気に見えた。

「メアリーは本当に、何かと貴方の名前ばかり口にしている。いつもいつも、スフィア、スフィア、スフィア……私は早く貴方と会いたかった。何なの？ この感情は、初めてかもしれない

。私は生まれてきて……」

「ルブル……」

デス・ウィングは言う。

「お前は、初めて人間の感情を知ったんじゃないのか？」

スフィアとルブルは、しばしの間、絶句していた。

また、再び、窓から寒風が室内へと入り込んでくる。

「スフィアを殺したいけれども、メアリーは愛しいか。お前はもう、背徳者と言えるのか？ あ  
るいは、魔女だとか……あるいは、悪魔だとか。お前は今、この瞬間、人間になったのかもしれ  
ないぞ？」

ルブルの眼は、明らかに泳いでいた。

水月は窓の方へと向かう。

「楽しくなってきた、なあ、スフィア。お前はルブルを殺したい、と。そして、ルブルはスフィ  
アを殺したいと。私はお前達の戦いが見てみたい。どうなのだろう？ お前達は結局の処、三  
人共、嫉妬や猜疑が渦巻いていて、自分だけが正しいと思いついてるんじゃないのか？」

水月は……デス・ウィングは満面の悪意を二人に対して、向けていた。

寒風の中に、白い粉雪が混ざっていく。

暖炉の焰が消えそうになっていた。

窓から、雪が入り込んでくる。

暖炉の焰が消えたと同時に、ルブルは叫んでいた。

「デルドス、目の前にいる少女を殴り殺せっ！」

ルブルは叫んでいた。

天井が破壊されて、怪物が降ってくる。

そいつは、頭が幾つもある巨人だった。全身に、沢山の顔が縫い付けられており、喜怒哀楽、  
様々な表情を浮かべていた。

そいつは、大きな棍棒を持っていた。

そして、巨体を震わせながら、スフィアの下へと迫ってきた。

「み、み、み、水月さんっ！ 助けてっ！」

思わず、スフィアは叫んでいた。気付くと、水月の姿が何処にも無かった。いつの間に、消え  
たのだろうか。

ルブルはスフィアを見て、せせら笑っていた。

「私は私の事を知ったの。スフィア、どうも私は独占欲と支配欲の塊だったみたい。これまでは  
、世界の全てにそれが向いていたのだけれども、今はメアリーに向いている。私は貴方を赦さ  
ない。手足をもぎ取りながら、殺してやろうと思うの」

彼女の声は辛辣なものだった。鋭利な刃のよう。

棍棒は、スフィアの目の前に振り下ろされる。

スフィアは、必死で右手を掲げていた。

スフィアの右手が、デルドスという名の巨大ゾンビが振り下ろした棍棒の先端へと触れる。し

ゆうううう、と奇妙な音が響いた。

デルドスは、まるで何も無い空間を薙ぐような感覚に陥る。

そして、振り下ろした筈の棍棒を見た。

棍棒の先端は、まるで砂のように崩れ去っていた。

スフィアは、右手を掲げて、デルドスを睨み付けていた。

そして、真っ直ぐに少女は、巨人の下へと突進する。

デルドスは思わず、地面に尻餅を付いていた。

彼に痛覚は無い。

見ると、彼の左足が枯れ木のように衰えて、彼の体重を支え切れなくなってしまっていた。デルドスは少女を見る。少女の右手には、一本の大型のナイフが握り締められていた。

巨大ゾンビは、振り下ろされたナイフを避ける事が出来なかった。

ナイフは、デルドスの胸の辺りに深々と突き立てられる。

数秒して、まるで風船が萎むように、デルドスの肉体は見る見るうちに縮んでいって、身体中に幾つも生えている顔達が、悲鳴を上げながら、老化していって、そのまま、デルドスの意識は暗闇の底へと沈んでいく。

.....スフィアは、感情が爆発してしばらくの間、我を忘れていた。

そして、呆然と立ち尽くしていた。

彼女は気付く。

見ると、目の前には、全身がかさかさに干乾びたゾンビが、苦しみもがきながら、偽りの生命を終えようとする処だった。

「あれ、私がやったの？」

彼女は酷い乖離間に襲われていた。

「あらあ？ デルドスを倒したのね？ 中々、やるじゃない。じゃあ、今度は私を殺しに来る？」

デス・ウィングは何処かに行っちゃったのだけれども、知らないかしら？ 本当に、奴には苛立ち始めているのだけれども」

スフィアが辺りを見渡すと、ルブルの姿も消えている。彼女の声だけが響いていた。

暖炉の火が消えて、暗闇が部屋の大半を覆っていた。これでは、水月もルブルも見つける事が出来なさそうだった。

「あ、えっ、私はどうしたら.....」

自分の右手を眺める。

あの棍棒を受け止めたのだ、骨折くらいしていてもおかしくない。しかし、右手に特に異常は見られなかった。それよりも.....。

「じゃあ、次はミラミスが貴方のお相手をしたんだって。私が向かうつもりは無いわ。だって、私の力はまだ不完全。メアリーが何とかしてくれるって言っているから、それを待つつもり。きっと、彼女は私の期待に答えてくれると思う。スフィア、残念ね」

くすくすくす、と暗闇の中、ルブルは笑っていた。

スフィアは、辺りから、何か変な動物の鳴き声が響いてきたのに気付く。

がしりっ、と、今度は足首を掴まれた。

スフィアは咄嗟に、足の辺りを見る。すると、床下から腕が伸びて、彼女の左足を強く握り締めていた。

スフィアは即座に、右手のナイフをその腕に突き立てる。

すると、簡単にその腕は千切れてしまった。そのまま、千切れた腕は腐敗して行って、骨だけになっていく。

ベリベリベリっ、と。床が剥がれていく。

地面からは、何本もの腕を持ったゾンビが姿を現した。頭の方は骸骨になっており、背中からは、何匹もの犬の顔が生えている。

「どうかしら？ スフィア。私の作り出したオブジェは」

「悪趣味っ！」

スフィアは叫んだ。

ゾンビの動きは、余り早くは無い。スフィアはナイフを振り翳して、敵に切り掛かっていく。この敵も、スフィアの攻撃を受けて、簡単に身体の腐敗が早まって、動くのを止める。

スフィアの怒りは徐々に膨れ上がっていった。

「何なの？ ルブルッ！ 卑怯者っ！ 貴方が向かってきたらいいじゃないっ！」

「スフィア」

暗闇の中で魔女は言う。

「私は完全体じゃない。それから、デス・ウィングが何処かに消えてしまった。外に逃げたのだろうか？ 私は目で追えなかった。私はあいつを倒す為に、計略を練っている処。確かにお前もさっさと殺してやりたいけれども、デス・ウィングは簡単に私を倒せるでしょうから。私は彼女を返り討ちにする方法を考えているの」

スフィアは、頭がこんがらがりそうになってきた。

水月も、ルブルも、二人して自分を馬鹿にしているのかと思った。

どうしようもなく、遣る瀬無い怒りがふつふつとこみ上げてきた。

メアリーの所業に対しては感じなかったもの。

しかし、今は二人に対して、怒りを感じている。水月に対しては、意味の分からない無責任さを感じたから、そしてルブルに対しては、彼女は純然たる敵なんだと認識し始めていた。

感情というものは、分からないものなのだと、スフィアはこの時、感じていた。

複雑なものが交差して絡まり合って、生成されている。

それが、感情というものなのだろう。

グリーフと名付けた力。

それが、スフィアのネガティブな感情の部分に起因しているものなのかもしれない。

今は、右手が酷く力強く感じていた。

「スフィア」

ルブルが暗闇の中、彼女の名前を呼ぶ。

「私の力の名前。私は自分の力に『カラプト』と名付けている。墮落という意味。ちなみに、私

はゾンビを操作する能力が全てだと思っているのなら、それは違うと言っておく」

ルブルの姿が見えない。

ただ、嘲っている事だけは分かった。

「私はゾンビを操れる能力というよりも、“死体を好きなように作り変えられる”という能力なの。生き物の死体を使って、私が好きなように再構築する事が出来る。ゾンビを生み出しているのは、その派生っていうだけ」

暗闇の中で、何かが現われた。

スフィアは、それが何なのか分からなかった。

どうやら、それは壺のようだった。

「ちなみに、この城は、全部、死体を固めて作っているのは分かるわよね？ さて、スフィア。私は貴方に対して、思い付く限りの嫌がらせを幾らでも出来るわよ？」

地面が砂のように溶け崩れていく。

そして、砂と化していく地面が、どんどん壺の中へと収まっていた。

どんどん、床が沈没していく。

気付けば、一面がアリ地獄のようになっていた。

スフィアは必死で、壁の方へと走ろうとしていた。けれども、足がどんどん沈んでいく。そして、スフィアは気付いた。両足は、無数の腕によって掴まれていた。

スフィアは必死になって、腕をナイフで切り落としていく。しかし、腕は次から次へと生えてきた。

彼女は、勢いよく地面へと落下していく。

気付くと、そこは砂漠のように、砂だらけの場所だった。

「ううっ、……痛い……」

どうやら、背中を酷く打ち付けてしまったらしい。

彼女は周りを見渡す。

すると、そこは出口の無い空間に無かっていて、壁の中から何体ものゾンビ達が飛び出してくる処だった。スフィアは引き攣った顔になる。

腰を酷く打ってしまったので、しばらく立ち上がれなかった。

仕方が無いので、スフィアは地面を右手で触り続ける。

すると、地面が見る見るうちに、腐敗していく。

†

ヘリックスから、ディーバの紙幣を渡されて、メアリーは街で宿を取っていた。

何だか、酷い倦怠感に襲われていた。

どうしようもない程に、意気消沈してしまっていた。

何故、先ほど、ローザを、ヘリックスを殺せなかったのだろうか？

……ルブル、私は貴方の役に立ちたいのに。

そう言えばと、ふと、彼女は考える。

何か、自分はずっと強い敵意の最中にいたのだが、何だか、今はぼんやりとしている。

「私は何故、あの時、戦えなかったのかしら？」

他人を懐柔していく。それが、ローザの強さなのかもしれない。

少しずつ、自分の心にある攻撃性が薄れていくかのようだった。

「ふん、明日になれば再び、襲撃する。このまま、私は言いなりにはならない……」

でも、何故なのだろう。酷い安心感さえあるのだ。

スフィアの世話ばかりしていた孤児院時代、何も無かったメイド時代、それから、ルブルといった時にあった何処かで拭い去れない恐怖感。それらのものから、今は解放されているという事なのだ。加えて、今は自分の絶対的な自信に繋がっているマルトリートという強力な能力がある。

確かに、このまま戦いを続けるのが、馬鹿らしくも思えるのだ。

目的そのものが、今、何をすればいいのか分からなくなってきてしまっている。

スフィアの顔がちらついていく。

何故、こんなにも彼女を思う度に、敵意が湧いてくるのだろうか。

それにしても、このディーバの街はメアリーが住んでいたグラニットよりも遥かに豊かで物質に囲まれている。

ローザの思想はきっと、一面的には極めて正しいのだろう。

実際、メアリーもエゴイズムの塊のようなものだ。彼女の言い分はよく分かる。

ただ、これだけは思うのは。

ローザは好きになれない。ルブルは好きになれた。

この違いは、どうしようもない程に大きい。

そして、これも分かっているのは。

自分は、ローザの力によって、攻撃性などを今、奪われてしまっている。

それを、取り戻さない限り、彼女と戦う事が出来ないという事だ。

「つまりは、これも彼女の能力の一端なのでしょうね……。ドゥーム・オーブとは、別の力なのかもしれないけれども。とにかく、今の感情を抑え付けられた状態を抜け出さないと……」

自分の純然な敵意を取り戻さなければならない。闘争意欲をだ。

その宿の一階には、サービスで飲み物が自由に振舞われていた。

バイキングなるものが行われているのだと言う。

メアリーは、基本的には贅沢というものを此れまでの人生で余りした事が無いので、少しぐらい楽しんでもいいのかな？ と思った。

まず、思わず手に取ってしまったのは、甘ったるい匂いのする大きなパンケーキだった。

一人の赤髪の青年が苛立ちながら、ローストチキンを皿の中に入れていた。そして、彼はその後、焼き上がったポテトなどもトングで摘んで取っていく。

メアリーはすぐに、彼が能力者である事を感じ取っていた。

こんな情けない状態にお互いに追い込まれた同士なんだろうなあと、直感的にも分かった。それから、唐辛子とハーブがふんだんに盛られたトマトのパスタに、生姜やニンニクを盛り付けら

れた大きめの肉、メアリーは深く溜め息を吐く。

「美味しいものを食べていると洗脳されそうになるもんだなあ？」

彼はメアリーを見て、何だか強い諦観を示す。

「俺はローザにずっと復讐を誓って生きてきた。けれども、彼女の考え、というか、この街の構造というか、この世界の構造を考えているうちに……」

メアリーはブランデーを口に入れる。

濃厚な味が口の中に広がっていく。

こんなものは、屋敷の中では自分が注いで出している側だった。

赤髪の男は、熱心に肉を口に入れていた。

そして、深く溜め息を吐く。

「駄目だな。ディーバにずっといてしまいたくなる」

「そうね」

二人はいつの間にか、トレーを持って同じテーブルの席に座っていた。

「こうやって、私達は牙を抜かれていくのでしょうかね」

メアリーはワインを口に入れていく。屋敷の中で働いていた頃は、こんなに好き放題に口に入れる事なんて出来なかった。

贅沢の持つ魔力、それはどうしようも無い程に戦う意思を奪うものなのかもしれない。

この街の豊かさは、他の国や地域の資源を食い潰して積み上げられている。

二人は、同時に、深く溜め息を吐いた。

「憎しみだけが、まだ戦う意志を残せる。けれども、俺は……幸せになってもいいんじゃないかと思ってしまうている。これが、ローザの強さなんだろうな。どうしようもなく、今、俺は弱くなってしまっている」

「そうね。……まあ、私は貴方とは過程が違うけれども、目的が一緒。でも、何だろう。贅沢を取るか、愛すべき者の意志を取るのか、果たしてどちらが幸福に生きる事なのかしら？」

欲望というものを抑える事はとてつもなく難しい。

適度に、人の欲望を操作する事によって、自分の欲望を満たす為ならば、他国の顔も知らない者達の飢えや渴きなど、本当にどうでもよくなってしまふものなのかもしれない。

「でも、俺の両親、俺の兄……。彼らの事を思い出して、俺はどんどん食べ物の味を感じなくなっていく。なあ、お前はどうか？」

「私は……。折れそうね。だって、考えてみると。今が一番、安全だから。でも、私が今、仕えている人に対する想いは強いものだと思ってる、そうね」

「俺はやはり、砂を噛むような味がするな。馬鹿にされているとしか思えない。ふざけやがって」

彼は思わず、料理の盛られた食器を叩き割る。料理が辺りに飛び散っていく。

メアリーは騒がれると面倒臭いので、幻覚で、割れた食器を包み隠した。

「これがお前の力か？」

「そうね。ああ、幻覚による透明化、消しましょうか。間違っって割った、って適当に店員に言っ

ておくわ」

赤髪の男の名前はアंकゥと言うらしい。彼が割った食器、ぶち撒けた料理を見て、店員はそつなく、それを掃除しにやってくる。

「私達は似たもの同士なのかしら？」

「かもしれん」

メアリーはふと思う。今更なのだが、彼女の持っているものを根こそぎ奪って、今は彼女よりも幾らでも幸福になれる選択を手に行っているという事になるのだ。

口の中に広がる肉の味が、どうしようもない程に生きている実感を与えてくれていた。

## 十

デス・ウィングは、ルブルの城から飛び降りて、その光景を眺めていた。

城全体が、変形していつている。

ルブルの能力の概要は、おそらくは死体を好き勝手に構築して、彼女の思う通りに作り変える事が出来るんだらうなあとと思った。

ルブルとかいう背徳者に対するの興味が薄れつつあった。

対面して、思っていた以上に、それ程、強力な背徳者ではないのではないのかと思った。

「能力の強さだけではなく……、その狂気の度合いも含めて。大切な者が出来てしまった瞬間に、彼女は人間の領域へと戻っていくのかもしれない。私はそれでは、つまらない。でも、スフィア。私は君の運命の方が気になってきたな？」

スフィアの人生がどのようになっていくのか。それも、水月が強く興味を持っている事象の一つだ。

彼女にとって、他人など、全てが娯楽でしかないのかもしれない。

この世界は、舞台劇でしかないと思っているのだから。

あの狼に会いに行こうと思った。

ディーバの街にいる筈なのだ。

そこに行けば、あの狼に会えるのだらう。

「じゃあ、スフィア。お前が立ち向かえるように私は案内してやった。後はもう、お前が勝手に頑張ればいい。私はお前がこれから、破滅へと向かおうが。立ち上がって、道を切り開こうがどうだっていい。私はお前を助けない。何故ならば、私は悪意でしかないのだからな？」

「やっぱり、あの狼さんの力に興味があるんだね」

気付けば、隣には何処のものともつかない異国のドレスをその身に纏った、他人の死という美少年が佇んでいた。彼はデス・ウィングにしか見えない存在だ。

スフィアは、決して彼の姿を見る事が出来ない。

「ああ、他人の死。あの狼はお前も殺せるのかな？」

「さあ？ それも興味深いよねえ。でも、僕に死なんていう概念なんてあるのかなあ？ それも酷く不可解なんだよねえ。試して欲しい」

「そうだな、試して欲しいものだな」

取り合えず、デス・ウィングと他人の死の二人は、ディーバへと向かう事にした。

生きていたのならば、どうせ、スフィアと合流する事になるのだろう。

「私は、お前のグリーフがどういう風になっていくのか楽しみにしているよ？」

そう言って、彼女は地図を取り出す。

大体の方角は分かった。

彼女は風の中へと、自分の身体を溶かしていった。

## 『他人の死と匿名性』

---

死はいつだって、他人の死でしかなく“自分の死”を人間は知覚出来るのだろうか？

そして、ある物語が展開された場合、それが小説にしる、歴史にしる、名前の存在する人間の死や生存以外にも、匿名性の者達の死が確実に存在する。

名も無き者は“物体”として、現しているのではあるまいか。

死は多くの匿名性によって、存在しているといってもいいのかもしれない。

一人の死は物語だが、数万名の死は匿名性によって覆い隠されている。

かくして、物語における幸福と不幸とは何なのだろうか。

一人の死は物語だが、多くの人間の死は統計の数字でしかない。

たとえ、物語が一見、ハッピー・エンドを迎えているように思えても、匿名性を帯びた人間の側からは、悲惨な終わり方を迎えているという事実も存在する。

たとえば、戦勝国だとか。たとえば、国家における幸福の絶対数だとか、そのように積み上げられた勝利や幸福の下には、大いなる犠牲が存在するといっても、過言ではない。

死はいつだって、他人の死でしかない。

他人の死は、何処までも、自分の死には無関係でしかないのだから。

スフィアはやたら滅多に、ゾンビの集団から逃げ回っていた。

身体中、引っ搔かれたりして、切り傷だらけになったりしていた。

彼女はナイフを振り回す。

ゾンビはそのナイフを恐れながらも、自ら立ち向かっていった。

ナイフでかすった部位は、ぼろぼろと、腐るように剥がれ落ちていく。深く突き立てられるようなものならば、簡単に全身が崩れ去ってしまう。

ルブルは、離れた場所から、スフィア的能力を分析していた。

「あの子、……結構、強い能力者になるんじゃないのかしら？ メアリーも凄かったけれども、もしかすると、あの子も凄く強くなるかもしれない。いいわね、彼女を何とか、此方側に引っ張っても。……メアリーと仲直りさせて、メアリーが私の事を全てだと思ってくれたのなら。あの子を仲間に引き入れてもいいかもしれない」

ルブルは先ほどの激昂が収まりつつあった。

我ながら、少々、取り乱してしまったなと恥ずかしげに思う。

しかし、こんなに自分の中に人間らしい感情が眠っていたとは思ってもいなかった。

「デス・ウィングが言っていたように、私の中で人間みたいなものが芽生えつつあるのかしら？ メアリーに対する感情も、最初は駒みたいなものとしか思っていなかったけれども。けれども、私は彼女の事を愛しく思っている。……私は背徳者じゃ無くなっていくのかしら？」

あるいは、そもそも、背徳者というものは、あくまでも“概念”であって。持って生まれた背徳者と呼ばれている者達の存在そのものの基盤になっているものではないのかもしれない。つまり、背徳者とは蔑称の事であって、結局は人間らしい部分もボーダー・ライン的に存在して、それはとてつもなく曖昧なものでしかないのではないのか。

どんな悪人にも、善性の部分があるように。

背徳者と呼ばれる者でさえも、状況と何かによって起こった出来事による心境の変化によっては、容易く人の領域へと戻っていくものなのかもしれない。

……あるいは、能力者が簡単に背徳者へと変わっていく事も同じものなのだろう。

「って思うと、人間、という生物種は一体、何なのかしら？」

ルブルは柄にもなく、そんな事を真剣に考える。

少しだけ、人間とは、何なのかを再定義する必要があるんじゃないのかと思ってしまった。

とにかく、今は、下の階でルブルが作り出したオブジェと戦っているスフィアを、どのように扱おうかを迷っていた。

……取り合えず、癢に障るので。もう少し、虐めてあげようかしら。

ルブルは、指先を弾く。

スフィアの周りで、地面から巨大な昆虫の脚のようなものが生えてくる。

それは、巨大なヒヨケムシという生き物へと変わっていった。

砂漠に住まう十本脚の蜘蛛だ。

ヒヨケムシが、スフィアの身体を食い千切ろうと迫る。

スフィアは必死で、ナイフを振り回し続けていた。

ナイフが、怪物に触れる度に、怪物は崩れていくが、ルブルの力によって、すぐに再構築されて、少女へと襲い掛かっていく。

背中を脚がかすめる。肩から、鮮血が噴き出した。

ルブルは適度に、スフィアを痛めつけながら、すぐには殺さない事に決めていた。

ヒヨケムシの口腔から、しゅるるうるっ、と糸のようなものが放たれる。

糸がスフィアの脚へと絡み付いていく、彼女は必死で糸をナイフで消滅させていく。

気が付くと。

小蜘蛛だが、天井の辺りから、姿を現して大量に降り注いでいく。

そして、地面の砂粒からも、無数の蜘蛛やサソリやらが、這い出してきていた。

辺り一面は、砂漠のような場所になっているのに。凍えるような冷気を漂わせている。

この怪物達は、本来ならば、砂漠に生息している生き物なのだろうが。ルブルの魔力で作りに出したモンスター達だ、きっと極寒の吹雪の中でも平気で活動をするのだ。

彼女は、自分の作り出す怪物に、絶対の自信を持っていた。

メアリーが散々、言っていた少女がどんな能力を持っていたとしても、作り出した怪物の強さで捻じ伏せられる筈だ。そう思った。

「わ、わ、たす、助けて、水月さんっ！」

スフィアは騒ぐ。

ルブルは、何だか、拍子抜けしてしまっていた。

.....なんか、貴方が言う程、凄い子には思えないけれども、何でそんなに粘着しているのかしら？

ルブルは、半ば、呆れた顔で、走り回る少女を眺めていた。

## 十

ジュダスは眉間に皺を寄せた。

確かに.....何者かが、この地に舞い降りた。

そして、そいつはルブルの城にて、出会った気配と同じものだ。

ジュダスは、再び、何日か前のヘリックスとのやり取りを無視して、自らの力を試したくなってきた。しかし、封印を解くには時間が掛かる。

「かなり、強大な力を持っているな？ やはり、何者なのか確かめてみたいものだ。あのルブルよりも、ローザよりも、遥かに格上だと言えるんじゃないのか？ 俺はそいつと会ってみたい、どのような力を有しているのかをな」

彼は封印を解こうとする。

すると、辺りが震動を起こし始めていた。

自分の全力の力が出せるのは満月の夜のみだ。

満月の夜になれば、自分は全力の力を持って、そいつに挑めるのだ。

「楽しみだな。久々だ。何百年ぶりくらいだろうか？ 俺の全力が出せるのはな」

ディーバの民など、どうせ彼のヘル・ブラストによって、片っ端から死の深淵へと向かっていくだろう。だが、そんなものには興味が無い。どうせ、人間など数十年くらいで死んでいく。ジュダスは何百年もの歴史の単位で物事を考えていた。

ルブルも、ローザも、興味が無い。もし、彼女達が彼を阻もうとするのなら、この手で簡単に引き裂いて、始末してしまおうと考えている。

「近付いてきている。確かにだ。満月までは、まだ早いけど、挨拶くらいは交わしておきたいものだ。どのような姿をしているのだろうか？ 覚えておく必要がある」

彼は、再び、分身を肉体から引き出そうとしていた。

もう、ヘリックスの力無しでも、分身を出現させる事が可能になっていたのだった。

この波動を放っている者は、これまで生きてきた中でもかなり稀有な存在だ。

会わない理由など、何も無かった。

彼は全身を奮わせる。

彼の肉体は黄金色の光を含む黒色に輝き始めていた。

## 十

二人は、食後のコーヒーを飲んでいた。

二人共、ミルクと砂糖がふんだんに入ったものが好きだった。

「復讐とは何の為に行っているものだと思う？」

アंकゥと名乗った青年は、メアリーに訊ねる。

「私の場合は、自己正当化と利己主義を徹底した先にあったものだったわね」

メアリーは言う。

「そうか、俺はローザに両親と兄を殺された。それ以来、復讐しか俺には無かった」

どうしようもないくらいの憤りが彼の中から、湧き上がっていくのが分かる。

メアリーは、彼を分析、観察していた。

自分の復讐に対する感情と、彼の復讐に対する感情は別種類のものなのだろう。

「ヘリックスとかいう奴の言葉に俺は丸め込まれてしまっている。なあ、俺は幸福になるつもりなんて無い。必ず、復讐を成し遂げたいんだ。それはもうどうしようもない衝動なんだ」

彼は剣呑な表情をずっと崩さなかった。

対するメアリーは、迷ってしまっている。

右腕が酷く疼いていた。ルブルから、別の物と替えられた誓いの為の右腕だ。

この右腕は、ルブルにとっての保険なんじゃないのかと今になってメアリーは思ってしまう。メアリーが裏切らないかどうかと。

.....マルトリートによって、面倒ながらも、短時間ならば右腕を実体化させる事が出来るだろう。もし、その場合は別にそれ程、生活に支障をきたさないのではないのか？

ルブルを裏切って、ローザの側に付くのは、酷く魅力的な提案のように思えた。

そして、メアリーにとっては結局の処、ルブルの存在は自分が自由になる為に必要な手段でしかなくて、結局の処、彼女は自分自身が何処まで行っても、エゴの塊なんじゃないのかと思ってしまう。

上手い事、ルブルの側にしばらくの間、付いていて、いずれ変わってしまうであろう戦局に乗って、ローザの側に付いてしまうべきなのだろうか。

どっちにせよ、今は浮遊しているような状態だった。

ヘリックスとローザの提案の上手い部分は、メアリーの実力を認めて、なおかつ、彼女を緩やかに裏切らせようとしている処だ。

そもそも、このディーバという国はよく出来ていると思った。

どんなに犠牲になる者達が多かろうと、自分達の幸福が犠牲になる為ならば、一向に構わない。そういった共犯関係によって、この国は維持されているのだろう。

メアリーはアンクゥに訊ねる。

「貴方は、復讐の為にだけに、貴方の能力を使いたがっているのかしら？」

「.....そうだよ。それ以外に、理由なんて無いだろう？」

「貴方は自分のエゴイズムの為に力を使おうとは思わないの？ たとえば、貴方の力で他人を支配したいとは思わない？」

「俺はローザを憎み、殺す為だけに今も生きている。ローザと同じ事はしない。考えるだけでも馬鹿馬鹿しい」

彼は自分の中にある真っ黒な部分を吐き出すように言った。

憎しみとはどういったものなのだろうか。

メアリーは考える。

メアリーは自分の中のどうしようもない衝動の為に、沢山の人間を殺した。

しかし、アンクゥの場合は、殺されてしまった誰かの為に憎しみを強く持っている。

アンクゥの考えならば、メアリーのような者は復讐されるべき対象なのだろう。

.....愚かそのものね？

思わず、彼女はそう思った。

彼が、内心、どんな事を考えているのか分からない。

だから、もっと深く聞いてみようと思った。

「じゃあね、私は提供された宿に戻るわ。明日になれば、ローザを殺しに行っているかもしれない。ヘリックスとはそういう約束を交わしている」

そう言って、彼女はアンクゥを背にして、料理店を出る。

何だか、彼女はどう現しているのか分からない感覚に陥っていた。

グラニットの貴族達が食べていた料理、それに手を付ける事はメイド達は許されなかった。メアリーはいつも、貴族達の食べる料理に憧れていた。けれども、先ほど口にしたのは、おそらくあの貴族達よりが口にしていたものよりも、更に豪華なものなのだろう。

ディーバの住民になれば、あのような食事を当たり前のように口にすることが出来る。

メアリーは別に、他人がどれだけ不幸になろうと何とも思っていない。

自分の幸福のみを求めて、グラニットの住民を虐殺した。

それを、後悔するつもりなんてない。

けれども、しこりとなって残っているのも事実だ。

だが、何故なのだろうか。ルブルの下を離れたくないという感情も芽生えてしまっている。

彼女は、街の中をぼんやりと歩き回っていた。

自由な選択が与えられ過ぎていて、少しだけ不自由ささえ感じ取ってしまっている。

自分が何をすればいいのか分からないような気がする。

スフィアは今、不幸だろうか。彼女がもし苦しんでいるのだとすれば、自分の優越感は何処までも強まっていくばかりなのだろう。

何年もの間、憎悪し続けていた彼女、生きながらにして、地獄を味わえばいいと思っている。

ヘリックスは、もし、明日、仲間になる選択をしたのならば、それなりの地位も与えると言っていた。そして、服も、もっと良い物を纏う事が出来ると。大きな家も与えるとも言っていた。

自分はどうすればいいのだろうか。期限は一応、明日という事になっているのだが.....。

.....一週間後に変えて貰えないかしら？ どの道、私はこの生活をもっと楽しみたい。

それから、しばらく考える時間が欲しい。

ふと、思い付いた事がある。

もし、ルブルがディーバ中を纏めて侵略してしまえば、ディーバの快樂は、全部、ルブルと自分のものにする事が出来る。.....どちら側に転んでも、悪くないな、と思った。

根本的に、どうしようも無い程に人間に対する軽蔑感が、メアリーの中には根付いている。きっと、こんな風に人格が形成されてしまったのは、スフィアのせいなんじゃないのか。彼女が余りにも、純粹過ぎるから.....。

彼女はディーバの街路を歩き続けていた。

何処の家も裕福そうだった。

そして、街を歩く人々からは、絶えず談笑が聞こえてくる。

何だか、羨ましいな、と思った。

そう言えば、孤児院とかグラニットの一般市民は、みんな楽しそうだったなあと、彼女は思い出す。過去がとても幸せな時間を送っていたのだと思ったし、貧困に喘いでいる者達の方が、かえって幸福そうに思えたものだった。

貴族の処で働く事は、グラニットの一般市民からしてみると、凄い事なのだと言われてもいた。

「私は、何もかも壊してしまって、自由を獲得した。私は単純に、人から愛されたかっただけなのだろうか？」

スフィアはみんなから、愛されるのだろうと確信していた。それだけが無償に許せなかった。

自分の中にある病理に根付いているもの。

本当は、何もかもを壊してしまいたいのもかもしれない。

正当性のある復讐行為と、自分のエゴの為に他人を一方的に憎悪するという事、しかし、や

はり、殺人は殺人なのだろう。

メアリーは、アンクゥが正しさを持って生きているというのは分かる。

けれども、彼女は正しさを生きていない。

彼女は、自分はそれでいいのだと思った。

自分の初期衝動は、今いる場所が苦しくて、抜け出したい。

そればかりを強く考えていた。

そして、力をたまたま手にした。それ故に、あそこまで容赦の無い殺戮行為を行ってしまった。自分の衝動の全ては、自分のエゴに還元されていく。

「私はどちらへ向かえばいいのかしら？」

罪悪感なんて、あるのだろうか？ 分からない。

もし、罪悪感が無いのだとすれば、ルブルの側に付こうと思っている。しかし、罪悪感のようなものがあるのだとすれば、ローザの側に……違う。

「ローザも他者を踏み躪って生きている。もし、罪悪感があるのだとすれば、二人共、この世界にとって害以外の何者でも無い。ふん、何て、滑稽なのかしら」

彼女は深く溜め息を吐いた。

## 十

デス・ウィングはディーバへと辿り着く。

その気になれば、彼女に距離などさほど、意味を為さなかった。

ディーバの地を踏んで、彼女は此処がかなり裕福な場所なのだという事を理解する。

逆に言うならば、多分、かなり他国の資源を奪って栄えている国でもあるのだろう。

「成る程な。多くの者達から略奪を繰り返して発展させていった国なのかな？」

彼女はせせら笑う。

こういう人間の歪んでいる部分が、彼女はどうしようもないくらいに大好きだった。

それにしても、街行く人々は、良い身なりをしている者達ばかりだった。

ホームレスらしき者達を見かけない。

デス・ウィングは、街行く人々の何名かに気になった事を訊ねてみる事にした。

「此処にホームレスとかってのはいないのか？」

「なんだそりゃ？」

彼女が最初に話しかけたのは、恰幅の良い中年男性だった。

「家が無い、まあ、浮浪者って奴だ。物乞いでその日の金を得ている奴だとか」

「なんだそりゃ、何処の国の話だよ」

「じゃあ、聞くけれども、ここら辺でドラッグが蔓延っている場所だとか。殺人の件数とか、そういったものはどうなっているんだ？」

男は困ったような顔になる。

「人殺しとかはあるよ、そりゃ。でも、そんなに無い。喧嘩して負けただとか、浮気のせいでだ

とか。まあ、此処は平和な国なんだ。そんな大きな出来事って無い。何でも、此処の姫であるローザ様が頑張って、何十年も前に国を建て直して以来、此処はずっと平和が続いている。それに、ドラッグってのは何だ？」

「ああ、そうだな。人間の脳を狂わせる薬だ。それを楽しんで生きている奴もいる。貧困国は場所によっては、食べ物よりもドラッグの方が安上がりだから。それでトリップして、空腹を忘れていたりとかもある。此処の街には、そういうものは無いのか？」

男は首を横に振って、急いでいるから、とデス・ウィングの下から離れていった。

デス・ウィングはふうん？ と改めて街の概要に関して考える事にした。

……どんな場所にでも、陰はあるんじゃないのか？

どうしても、そう思わずにはいられない。

此処をもっと探索してみたくなった。

どうしようもない程に、まともに整備されて、小綺麗な国は、きっと、もうどうしようもない程に、汚い部分も持っているのだから。

「ローザに会ってみるかな？ 彼女が何者なのかはかなり気になる処だ」

先ほど、街に辿り着く際に、城のある場所を探してもよかったのだが、一見してみると、それらしいものは見つからなかった。

街ゆく人々に質問をしていく。

ローザに関して思う事だとか、ローザの城は何処にあるのかだとか。

彼女はローザの城へと向かっていった。

長い階段の先にあるのだが、デス・ウィングにとっては距離など、ほぼ意味が無かった。

城は、大きな森に囲まれた場所にあって、天空からは見つけづらかった。彼女は此処に来る際に、どうりで見つけ辛いなと思ったものだった。

「ルブルもそれなりに面白そうな奴だったが、ローザはどうなんだろうな？」

彼女は少しだけ期待を胸に膨らませていた。

支配者というものの精神構造には興味がある。それも、歪んだ形で国を維持している支配者の精神には、酷く関心を持ってしまう。

デス・ウィングは城門の前に来た。

そして、城門に近付いて、障壁など何も無いかのように、彼女は城門をすり抜けていく。

そして、そのまま、彼女は城の中を彷徨っていた。

兵士達や執事などが歩き回っていたのだが。誰も彼女の存在に気付く者などいなかった。

どうん、と彼女は何か強いエネルギーを、二つ程、感じ取っていた。

一つはおそらくは、ローザだろう。

そして……もう一つは。

……あの狼か。この城の中にいるのか。あいつ、やはりローザよりも強い悪意を放っている。

彼女はひとまず、ローザの下へと向かう事にした。

あの狼と会うよりも前に、この国の女王と話してみたい。

デス・ウィングは、天蓋付く真っ白なシーツに包まれた寝台のある場所へと辿り着く。

そして、彼女はふふっと、挑発的な笑みを浮かべた。

「お前がローザか？」

寝台の中からは、シーツ越しに人影がゆらめく。

「何かしら？ 貴方は何処から入ってきたの？ ヘリックスは？」

「さあ？ お前はローザなんだろう？ 私は死の翼と言う者だ。私はお前の考え方だとか、感じているものだとかに興味があって、此処へとやってきた」

彼女は唇を三日月に歪める。

「ローザ、私はお前など簡単に罅り殺しに出来る。しかし、それはしない。私はお前にもルブルにもとても興味があるのだからな？」

「あら。貴方はジュダスみたいな事を言うのね」

ジュダス……あの狼の名前か。

あの異質な影の力を使う怪物……。

「ジュダスカ、私はあの狼の能力にとっても興味を持っている。あいつは一体、何なんだ？」

「彼はこの城の中に代々、封印されていた怪物よ。言ってしまうと、ディーバの守り神なのかもしれない。彼は死の化身のようなもの。私は彼を切り札だと捉えているのだけれども、やはり、手が付けられなくなりそうで。彼を始末するにはどうすればいいのかを考えているわ。貴方はお強いのかしら？」

「まあ、確かに……私は強いかもしれないな？」

二人の間で、しばしの間、沈黙が降りる。

「貴方の目的は何、別に私を本当に殺しに来たわけじゃないでしょう？」

「お前の歪みに興味がある。それから、ジュダスの能力に。私は人間の悪意が先にあるものと、私はどうすれば死ぬるのかを考え続けている」

「ふうん？ 変な人ね。それに勝手にこの部屋の中へと入り込んで、とても無礼だし」

「私のような奴は嫌いか？」

「いえ」

ふふふっ、と女はシーツの中で笑う。

「貴方のようなタイプは私は大好きよ。貴方も、私の仲間になって頂けないかしら？ 私はディーバを守り続けたい。この街の者達は、永遠に、幸せで居続ける必要があるのだから」

「成る程な」

デス・ウィングは唇を三日月形に歪めた。

「ちなみに、私はルブルに加担するつもりは無い。お前の政治の方針にも口を出すつもりは無い。私は見守りたいというわけだ。いや、傍観したいだな。さて、それでいいかな？」

「ジュダスは、貴方と戦いたがっているみたいね。貴方なんでしょうね。ジュダスが感じている強大な何かというのは」

ローザはシーツから顔を出す。

二人は、しばしの間、お互いを見据え合っていた。

デス・ウィングはふうっ、と一息付く。

「じゃあな、私はもうそろそろ出るよ。邪魔したな」

「今度は、ヘリックスの許可を通して入ってきて欲しいわね」

「分かった」

そう言って、デス・ウィングは城の外へと出て行った。

途中、彼女を認識出来る者は誰もいなかった。

十

スフィアはルブルの城を逃げ続けていた。

巨大な蜘蛛が彼女を追ってくる。

スフィアはナイフを振り回して、蜘蛛を倒して回っていた。

……ううっ、私、本当にどうすればいいんだろう？ 私、本当に弱いなあ、水月さん、水月さん……っ！

普通に考えれば、ルブルにナイフを突き立てるのがもっとも良案な気がする。

しかし、魔女は何処に行ったのか分からない。

とにかく、砂漠の中の廃墟のような場所を走り続けていた。

砂漠の筈なのに、温度は氷点下になっていて、寒風も吹き荒れている。

「どうしよう……どうしよう、私、どうすればいいのかな？」

どうしようもない事だけは分かっている。一人で立ち向かうしかないのだと。

メアリーの顔をもう一度見る。その為だけに此処まで来たのだから。

「ルブルっ！ 出て来いっ！ 私と相手しなさいっ！」

ひとまず、何か出口は無いかと探してみる。何も無い。

仕方が無いので、スフィアは壁にナイフを突き刺して、壁を老朽化させ続けて、出口を作り出そうと試みる。けれども、壁を壊しても、壊しても出られそうになかった。

十

デス・ウィングは城の前に出る。

城門の辺りには、門番をしていた兵士達は何名か倒れていた。

彼女は兵士達の傍に向かう。

兵士達は、みな、何か恐ろしいものを見て発狂してしまったかのような顔で、絶命していた。

彼女は息を飲む。

どんっ、と何者かが彼女の前に降りてくる。

デス・ウィングは少しだけ、息を飲む。

銀色の毛皮から、黄金と黒色の光を放っている巨大な狼が彼女の前に佇んでいた。

「ようこそ、ディーバへ。ローザには、もう会ってきたのか？ 俺には、挨拶無しか？」

デス・ウィングは、まじまじと、対面している狼を眺める。

恐ろしいくらいに美しさを誇る獣だった。

彼はデス・ウィングの全身を舐め回すように眺めていた。

「お前、ジュダスというのか？」

デス・ウィングはせせら笑う。

お互いに、相手の両眼を見据え合っていた。

そして、互いに一步も引かない。

「魔女ルブルのいるウィンディゴで、お前の気配を知ったんだが」

ジュダスは言う。

「私はお前がルブルと戦っているのを見た。お前は面白そうだと思ってな？」

ジュダスはあざ笑う。

その狼からは、激しい神々しさと禍々しさの両方が備わっていた。

彼は唸り続ける。

「そう、俺の名はジュダス。地獄の大公、死を撒く者ジュダスだ。俺は疫病そのものとも、言われている。お前は何なんだ？」

「私か？ 私はデス・ウィング。悪意を撒く者だ」

二つの背徳者は、お互いを目視し続けていた。

デス・ウィングは、掌にある指先を閉じたり開いたりするのを繰り返していた。

ジュダスは、こめかみをぴくり、と動かす。

「お前の力の名は？」

ジュダスは訊ねる。

「『ストーム・ブリンガー』と呼んでいる。お前に私を殺せるのか？ 験してみたい」  
瞬間。

デス・ウィングは、指先を突き出すように、ジュダスへと向けた。

ジュダスは飛び跳ねる。

デス・ウィングが指先を向けた場所は、深い森になっており、森にある何本もの大木が、粉々に碎け散っていく。

彼女は左半身に違和感を覚えていた。

見ると。

肩先から、左腕がごっそりと、削り取られていた。

ジュダスは、口元から、食い千切った彼女の腕を吐き出す。

「ふん。お前は不死者なんだろう？」

そう言って、彼は口から腕を吹き出した。

デス・ウィングの周辺に、霧が集まっていく。

そして、次第に、彼女の左腕は新しく作られていく。

「そうだな、私は不死身だ。霧の肉体を持っている。誰も私を殺せない。どんな能力者も、これまで私を殺害する事が出来なかった。そう、私は不老不死なんだ」

「ほう？ それはそれは、凄い事だな？ だが、俺の『ヘル・ブラスト』でも死なないのか？

験してみるのはいいかもしれないな？」

ジュダスの周辺から、影が集まってくる。

それは、人間が見れないもの、認識出来ないもの、死の先という暗闇そのものだった。

「俺のヘル・ブラストは、何者をも、死の世界へと引きずり込む。アンデッドでも、俺の前では死んでいく。どうだろう？ お前がどれ程、不死身なのかどうかは知らないが、俺の能力を受けてどれだけ平気でいられるのかな？」

デス・ウィングは自然と笑っていた。

初めてかもしれない。

こんなにも、彼女を畏怖させる相手に出会ったのはだ。

「ああ、ジュダス。そうだ、私はお前のその能力に興味があって、お前と対面したかったんだ。お前は私を殺せるんじゃないのか？ それは、とても興味深いんだ」

彼女は、右手から、何かを取り出していた。

くる、くる、と彼女を取り巻く霧が集まってきて、それがより一層、整った形へと変貌していく。

それは、刀だった。細長い、小柄の人間程の長さはある刀だった。

ジュダスは唸る。

「ただでは殺されてやるつもりなど無いのだろうか？」

「勿論、確かに私は死にたいとは思っているが。同時に、自分の全力を出し切ってみたいという期待もあるんだ。私はどれだけ強いのか？ 私はどれだけ不死なのかってのにも、ずっと興味を持ち続けているのだからなあ？」

そう言いながら、デス・ウィングは、長い長い刀を振り回し続けていた。

「どうかな？ ディーバとは遠く離れた場所でやるつもりは無いかな？」

デス・ウィングは提案する。

「何故だ？」

ジュダスは首を捻る。

「此処は人間が多過ぎる。巻き込むのも何だろうな、とってな」

それを聞いて、狼はせせら笑った。

辺り一面に影が飛び散っていく。

影は、暴風雨のように、ディーバの街を走り回っていた。

ジュダスの全身に満ちた闇が、より強大で、より金色に輝きながら、辺りを覆っていく。

「やはり、お前も人間を何とも思っていないんだな？」

デス・ウィングは淡々と言った。

「逆に聞くと、お前は何故、人間ごときの価値を重く置くのだ？ 人間など、そこいらの蟲けらと何が違う？ お前らは地べたを這いずる蟲共を踏み潰す事に贖罪感など抱くのか？」

「……………確かにそうだ、同感だが。私は花や虫が好きだよ。鳥や動物も。出来れば、無意味に殺したくは無いと思っている」

彼女の視線は何処までも、冷たかった。

「ローザもブルも同じように人間を見ている。人間という種を、どのような道具と見ているかの違いかしかない。ジュダス、私達、背徳者は人間を同族だなんて思っていやしない。だが、どうだろう？ 私はまだ人間というものに自分と別種の存在ではないという、人格を見い出しているのだろうか」

ジュダスは跳ねる。そして、ローザの城の塔へとよじ登っていた。

彼は咆哮する。

ヘル・ブラストにより発生した影が、更に唸りを上げて、犠牲者の数を増やしていくのだった。遠くで、沢山の悲鳴が聞こえてくる。

「高い場所が好きなんだな？ お前の傲慢さをよく現している気がするな？」

デス・ウィングは、持っていた刀を振り回す。

「ジュダス、私は全力を出そうと思う。お前は全力を出せるのか？」

ふん、と狼は鼻で笑う。

「満月の日は今日じゃない。満月の日は、俺は持てる全てを出し尽くす事が出来る。デス・ウィング、お前は俺の本当の力を知りたいのか？」

「いや……」

彼女は、両手を開いては、閉じる、という動作を繰り返す。

「お前は、出来るならば、今、殺す」

彼女は長剣を、狼の下へと振った。

ジュダスは……。

いとも簡単に、それをかわす。振った剣から、幾つも折り重なった風の刃が生まれて、やがてそれが竜巻へと変わっていく。

「デス・ウィング、お前は人間が好きなんだな？」

「……………いや、スフィアを見て、ほんの少しばかり、まだ生きてもいいかな、と思えたくらいだ。お前の能力は本当に惜しいんだが、此処で死んで貰う」

竜巻が、唸りを上げながら、竜のような形へと変わっていった。

二つの闇が、交差する。

ジュダスは、デス・ウィングの腹を深く食い千切っていた。

デス・ウィングの刃が、ジュダスの右肩に食い込んでいた。

「本来ならば、此処で勝負は決まっているんだが。生憎、私は不死者だ。ジュダス、お前はどうかなんだ？」

狼の身体の中に深々と入り込んだ剣は、狼の体内で風の刃を作り出していた。

デス・ウィングを取り囲むように、鈍い光を放った影が彼女を取り込もうとする。

お互いに、一歩も引かなかった。

「俺の不死性はどの程度のものか知らん。しかし、お前がその力で、俺の肉体をバラバラに破壊する前に、お前は死の闇の中へと飲み込まれていくんじゃないのか？」

彼はまるで、怯まなかった。

ジュダスの体内の中で、激しい暴風雨が吹き荒れて、全身から風の刃が吐き出されていく。

デス・ウィングの身体は、真っ黒な影によって、ヘル・ブラストの生み出す冥界への誘いに飲み込まれていく。

「なあ、ジュダス。お互い、死ぬのかな？」

「貴様と共に死ぬつもりは俺には無いが？ どちらが根負けするかはやるだけの意味はあるな？」

二人が撒き散らす力と力の競り合いが、一面に衝撃波となって飛び散っていく。

ローザの城の一部が破損する。大森林の樹木が削り取られて、巨大なクレーターが生まれる。天空へと向かって、荒れ狂う風の刃が放たれて、天が黒雲によって覆われていく。

そして。

二つの悪意が荒れ狂う唸りとなって、ディーバ中を襲っていた。

†



アンクゥは街を歩いていて、真っ黒な影が走り回っている事に気付いた。

これが、何なのかが分からない。もしかして、ヘリックスと一緒に会った、あの巨大な狼、ジュダスの力なのだろうか？

ディーバの人々が次々と死んでいく。

彼は記憶がフラッシュバックしていく。

ローザの食卓にされた、ヴィシャスの街の人々。殺されていった父親と兄、泣き叫ぶ母。自分はどうすればいいのかが分からない。あの時はとてつもなく無力だった。

ディーバも、ローザも、アンクゥにとっては憎むべき存在でしかなかった。

「俺は……………」

彼は頭の中が真っ白になる。

どう感情を形にすればいいのかが分からない。

当然、ローザと同じように、ディーバも深く憎んでいた。この街は、アンクゥのヴィシャスや、その他の街などを食べ物にして存続しているのだ。

心の奥底から、何かが這い上がってくるかのような感覚だった。

何もかもが壊れてしまえばいいという衝動だ。

この光景はきっと、望んだ結果に違いない。……………。

「あの怪物が暴れているみたいね」

気付くと、メアリーが城の方を見上げて、アンクウの傍に立っていた。

「俺はどうすればいいと思う？ 俺は憎いんだ。この街の住民も、ローザも。みな、死んでしまえばいいと思っている。この事態を俺は願っていたんだらうな？ 自分の力だけじゃ、ローザは倒せないから……………」

遠吠えが聞こえてきた。

城の辺りの森で、破壊音が鳴り響いていた。

十

正しさとは何なのだろうか？ 分からない。

二人共、迷っていた。

自分達の抱えている憎しみの感情をどうコントロールすればいいのかを。

「私は……人間なんて、踏み潰してやる。ルブルと一緒に。だから、ディーバがどうなろうと知った事じゃないんだけども」

彼女は複雑そうな顔をして、アンクウを見る。

「私の壊したいものは、私自身の手で壊したいのよね……」

メアリーは、かなり迷っていた。彼女にとって、人間というものに対する感情が分からなかった。

「メアリー……」

アンクウは言う。

「お前は、お前はまだ、人間に戻れるんじゃないのか？ 背徳者じゃなくて、そう、悪魔ではなく、人間に戻れるんじゃないのか？」

彼女は彼の言葉を聞いて、更に険しい顔になる。

「後悔なんてしていない。グラニットの人間を虐殺した事を。私の自由を阻む者達は死ぬべきだった。けれども、私は今、どうしようもない程に自由で、幾らでも選択が与えられている。私は何なのかしら？」

彼女は、自分の不安定な感情を整理切れずにいた。

衝撃音が鳴り響いた。

巨大な狼が城の頂上に登ったかと思うと……、狼が再び、地上へと跳ね降りる。その後に、ひたすら、轟音が響き渡っていた。

街そのものが悲鳴を上げているかのようだった。

影から逃げ惑うような人々は、祈りの声を上げる者達もいた。おそらくは、この辺りに根差している宗教の神の名前を叫ぶ者達もいた。

みな、生きたがっていた。

どうしようもない程に、人々は必死の叫び声を上げていた。

けれども、無情に、人々が、死の影へと飲み込まれていく。

アंकゥは言う。

復讐の感情、それが何処か遠くへと飲み込まれていきそうだった、と。

そう、彼は彼女に述べた。

「少しだけ……、何もかも馬鹿馬鹿しくなって、放り投げてしまいたくなる。他人に好き勝手に目的を荒らされるって事ってさあ。怒りとか、憤りとか、最初、持っていた意志の力だとか。そんなものが馬鹿みたいに思えてくる。俺の復讐心は本物だったんだろかってな」

メアリーは深く溜め息を吐いた。

苦しかった地点から抜けられて、今はもうどうしようもないくらいに自由だ。逆に、自由過ぎて、酷い倦怠に襲われてしまう。ルブルの事を考えて、彼女に対する感情も整理し直してしまっている。

「私は……魔女が怖かったんだと思う。ルブル……。もう、そろそろ折れてしまうかもしれない。私は私の弱さを強さに変えてきただけだった。イメージを形に出来る力、それは私の強さそのものだった。何なのかしら？ 他人に荒らされて……」

メアリーは何だか、強く憤っていたみたいだった。

人が次々と死んでいく。

二人して、呆けたように、

二人には、影の攻撃を避けるだけの力はあった。無差別に唸る波を、それぞれ、自身の能力によって、その軌道を読み取る事が出来た。

ソリッド・ヴァルガーの空間把握によって、影の軌道が見える。

マルトリートの幻影作成によって、影を避ける事が出来る。

二人は、絶対的な安全圏から、このどうしようもない絶景を閲覧し続ける事が可能となっていた。

無償に、何もかもが馬鹿みたいに思えてしまう。メアリーはそう思った。

「なあ、俺は死をずっと覚悟していた……」

「私もよ。自分の命なんて、どうだっていいから。苦しい、この世界なんて壊れてしまえって思った。スフィアっていう子がいて、その子に対する憎しみは、逃げていただけなんだと思う。スフィアは私にとっての幸福な存在の象徴だった。あの子に対して、立場の違いが羨ましかったから。あの子だけは不幸になればいいと……」

彼女は上手く、何かを言葉に出来ないみたいだった。

「アंकゥ、私はまだこの感情に浸っていたい。私は私の人生を認めたいから。たとえ、この先に空虚と絶望しかなかったとしても……ねえ、アंकゥ。私は押し付けられた不幸を生きるんじゃないかって、自ら選び取って、不幸になりたいと、今、思ってしまった。多分、それが私が生まれた意味なんじゃないかって」

赤髪の男は、メアリーの横顔を眺めていた。

彼女は今という時間を刻みたいんだろなあ、と漠然と思った。

「望んで不幸を手に入れる、か。幸福と不幸、多分、その二つは正反対のものなんかじゃなくて、強さと弱さが表裏一体であるかのように……。俺も今は思う。多分、俺はもっと自分の弱さを超えなければならないんだと。他人に良いようにされたくない。それがたとえ、まともな意味で幸せな道であったとしても。犠牲の下で手に入れた幸福って何なんだろうな？ クソみたいだ。俺は復讐に生きると誓った日から、普通の幸せを生きる事は捨てた筈なんだ。ああ、畜生」

分かったのは。

二人の思いは、一緒だった。

お互いの視線を確認し合う。

「あのクソみたいな狼を……」

「一緒に倒しに行きましょうか」

メアリーは背中から、翼を生やした。翼は巨大な物となって、広がっていく。

とにかく、絶対の安全圏から、この場に居続けるのは酷く苦痛だった。

「苦しみと戦いの中で、多分、生きている実感があるんじゃないかって、俺は思っている。俺はローザともジュダスも戦う、メアリー、お前は？」

「……………ルブルは怖いけれども、愛しく思う。多分、あれは私自身でもあるんだ。だから、怖いよ。自分の向かう先が形となったもの、どうしようもなく愛しくて、どうしようもなく怖い。だから、一緒にいたいと思う。私は彼女を裏切れない……………」

二人は、お互いに、自らの人生を好きなように語り、吐き出し合っていた。

お互いに、どうしようもないくらいに、分かり合っている気がした。

「生き残らないか？ お前、罪悪感とかってある？」

彼はグラニットの人々を虐殺した事に対して、罪の償いが出来ないか、と暗に訊ねていた。メアリーは首を横に振る。

「無いわね、善行なんてするつもりは無い。私は闇へと向かう。アンクゥ、貴方は正義を目指せばいい。私は死ねば、地獄へ落ちればいい。奈落の底へと向かいたいから、私は私の力で多くの者達を殺す前に誓ったのだから。死ねば、地獄に落ちればいい。けれども、この気持ちの悪い世界は壊す、と」

「そうか、お前は不自由な悪を……。俺は、正義の復讐を……。どちらも正しくないんだろうな、俺達は死ぬべき者達なのかもしれない。命の価値なんて分からない。分からないなりに、自分の命が何の為にあるのか考えようとして……」

空が暗雲に包まれていく。

城の辺りで、戦いが熾烈を極めているみたいだった。

メアリーは、いくつもの巨大な羽を空中に作り出す。そして、自分の目が届く範囲にいる人々に対して、影に飲み込まれていきそうな者達を、救い出していく。

アンクゥも、一定の空間を削り取る事によって、何名かの人々の命を救った。

目の前にいる者達以外には、特に対処をしようと思わなかったし、二人共、やはりそれほど、ディーバの住民に対して特別な感情を抱く事が出来なかった。

多分、復讐心は時間が経過して解消してしまうものと、解消出来ないものがある。

メアリーが、作り出した翼の一部を、寝台のような形へ変える。

アंकゥに乗れという合図だ。アंकゥは、翼の寝台のように変形した部分に乗り込む。

メアリーは、翼をはためかせて、空へと舞い上がる。

二人は、黒雲が渦巻く場所の中心部へと向かっていった。

「幸福も不幸も信仰なんじゃないのかしら？ ルブルと会う前に、世界各地の宗教を調べた。宗教ってのは、どうすれば幸せになれるかばかりを語っている。人間の望みなんて、どうせ、どうすれば幸せになれるか、ばかり。現世で幸せになれるか、あの世とか来世で幸せになれるかだとか。多分、みんな何か縋り付いて生きている、滑稽極まり無いわね？」

そう言って、彼女は皮肉めいた事を言う。

多分、世界なんてそんなもので構成されているのだろう。

全部、何か縋って、生きる意味だとかを見つけれたりしているのだろう。

渦巻く竜巻は、まるで神話の戦いのようだった。

メアリーとアंकゥは、息を飲みながら、舞台へと近付いていく。

十

氷帝はローザの寝室の中へと入り込んだ。

ローザは、ぼうっと、何も無い空間を眺めていた。

「姫様……、ジュダスが……」

「分かっている……」

部屋全体から、唸り声が聞こえてきた。

人間ではない、昆虫の金切り声や、機械の金属音のような。

「私の『ドゥーム・オーブ』を全力で使う。ジュダスも、デス・ウィングも始末する。そして、ルブルも……二度と、人間には戻れないかもしれない。それでも、私は私の街を愛しく思っているから。あの二人には消えて貰う。私も死を覚悟しなければならないみたいね……」

ぞわりっ、と氷帝は震えていた。

ローザの眼は、まるで底知れない静謐さを醸えていた。

十

ルブルはウィンディゴで一番、高い場所である時計塔から、遙か遠くの地平線の向こう側で、天候に異常が生じている事を知った。

「もう、スフィアはどうでもいいわね。……メアリー、大丈夫なのかしら？ あの子、多分、何処かで、まだ私を信じていないでしょうけれども。まあ、いいわ。私もそんなものでしかないから」

彼女は、人形を取り出した。

「クルーエル、メアリーを助けに向かいましょう？ 私の愛しい弟。貴方の全力を使うのよ。私も、私の全力を使うから」

彼女は『カラプト』を街全体へと使う。

街がばらばらに解体されて、組み換えられていく。

それは、テントや鉄骨を組み換える作業にも似ていた。

出来上がったのは、巨大な翼を持つ骸骨のドラゴンだった。

彼女は、ドラゴンの背中に乗る。

## 十

ジュダスとデス・ウィングは、お互いを牽制し合っていた。

どちらも、中々、消耗しない。

ジュダスは、影によって人々を飲み込む事によって他人の命を吸収して、自分の傷を容易く再生させていた。対するデス・ウィングは、肉体を損壊されても、霧の身体故に平気でいた。お互いを殺害する手段は、ひたすら、互いの消耗を待つばかりだった。

ジュダスは遠くから近付いてくる気配に向けて吼えた。

「で、貴様らは何だ？」

彼は叫ぶ。

巨大な翼が、森を包むように広がっていた。

「ああ、俺達はその何だ。“偽善”だっ！」

アンクゥは声高に叫んだ。

口にして、彼はとても恥ずかしそうな顔をしていた。

ジュダスは馬鹿にしたような視線を二人に向ける。

「そうか、偽善か。俺は今、悪意と戦っている。お前らに興味は無い。見逃してやるから、さっさと引く事だなっ！」

狼は吼えた。

更に、ヘル・ブラストによる影が蔓延していく。森全体が、影によって飲み込まれていき、生命が朽ち枯れていく。

森全体を喰らい尽くして、ジュダスの放っている黒色の光は、辺り一帯を覆い尽くし始めていた。

アンクゥは……。

ソリッド・ヴァルガーを全力で、ジュダスに向かって、叩き込む。

そして、メアリーが、追撃として、イメージにより作り出した無数の剣や岩石などをジュダスに向かって、降り注いでいく。

デス・ウィングはしばしの間、困惑していた。

「お前ら……何だ？ 私の戦いなんだが……」

彼女は呆けたような声で言った。

アंकゥは、自身の能力を、連続して狼へと叩き込んでいく。

爆撃のような音が、周囲に鳴り響いていく。

「貴方は何？」

メアリーは、デス・ウィングに向かって訊ねる。

デス・ウィングは、どう答えればいいのか分からない表情になる。

「お前は……スフィアの事はもういいのか？」

「何で、あの子の名前を知っているの？」

今度は、メアリーが少し、驚いたような顔になる。

デス・ウィングは、気まずそうな顔をする。

「お前らが殺し合ってくれるのを見たかったんだが。スフィア、あいつ、駄目だよ、どうしようもない、今頃、ルブルの城で死んでいるか。一人で泣き喚いているんじゃないのか？」

デス・ウィングは……。

メアリーの作り出した、大量のナイフを、全身に突き刺されていく。

「ふうん？ あの子をおもちゃにしているのは私だけなんだけれども？ 貴方は何なの？ 貴方はスフィアに、何かしたのかしら？」

デス・ウィングが、身体に突き刺さったナイフを、一本、一本、引き抜いていく。

彼女はナイフが刺さっていた部分から、霧が噴き出してきて、肉体の損壊が修復されていく。

「お前はスフィアが大嫌いなんじゃなかったのか？」

「……人間の感情って複雑で。貴方は、どうも、ルブルやローザやジュダスと同じ臭いがするわね。性根が腐り切っている感じがする。まあ、私もまったく人の事は言えないのだけれども」

デス・ウィングは鼻で笑いながら、メアリーを見ていた。

メアリーは、軽蔑するように彼女を睨む。

お互いに、どうも、虫が好かない感じだった。

メアリーは、どうしようもないくらいに、彼女も不気味に思えて仕方が無かった。ルブルやローザとは、違った感覚で気味が悪かった。

「貴様らの馴れ合いの最中悪いんだが」

大地が振動する。

咆哮が響き渡る。

狼はアंकゥの全身を右足で押し潰しながら、デス・ウィングとメアリーの二人を睨んでいた。

「ローザがどうやら、能力を発動させているようだが？ 俺だけで無く、お前ら全員も始末するらしい。どうする？」

そう言って、ジュダスはアंकゥを蹴り飛ばして、二人の下へと放り投げる。

まだ、赤髪の男は息があった。どうも、ジュダスは手加減したみたいだった。

「私はディーバの奴らは、みんな共犯だと思うな？」

デス・ウィングはジュダスに言った。

「ジュダス……、もういいんじゃないかと私は思うけれど？　もう、みな、ぼろぼろだろう。これから、苦しみ、悲しみながら、生きていくかもしれない。私達は全員、邪悪なんだが、正しい部分を持っていても、いいんじゃないのか？　何が正しいか知らないが。たとえば、人間にもう少し、期待するだとか……」

「ふん……」

狼は鼻で笑った。

「デス・ウィング、出来れば、満月の夜にもう一度、この俺と戦ってくれないか？」

メアリーは不思議な顔で、巨大な狼を眺めていた。

「あら、貴方はもういいのかしら？」

「お前らのせいで、興が殺がれた。しかし、数百年ぶりに楽しめた。俺はディーバを離れる。しかし、やはり人間の世界は何も変わらないな？　欲望の渦によって、積み上げられている。これだけは言うておくが、背徳者という概念は、人間の裏の部分を目指す単語みたいなものだ」

ジュダスはそう言って、つまらなそうな顔で、再び、雄叫びを上げる。

すると、影が徐々に収束していく。

ディーバ中で荒れ狂っていた死の嵐は、あっけなく収束していく。

「じゃあな？　俺は自由だ。お前らも好きにすればいい」

ふと、ジュダスは思い出したように止まる。

そして、何だか、どうしようもないくらいに人間のような眼で、三名を見ていた。

「それからこれも言うておく、お前ら、この世界にはだ。死んだ方がマシな事もあるのだと、生まれてこなければよかった命もあるのだとな？」

何か韜晦を込めるように、彼は言うて、今にも走り去ろうとしていた。

「あら、それは無いんじゃないかしら？」

唸るように、一面に声が響き渡る。

城の塔の一角だった。

真っ白なドレスを身に纏ったローザが、四名を眺めていた。

「私のディーバをよくもこんな風にしてくれたものね？　ジュダス。私は、まず、お前は始末する。それから、デス・ウィング、お前もやっぱり、トリッキーで理解不能だから、始末する。ああ、それから」

ローザは、満面の笑顔で他の二人を指差した。

「貴方達は見逃す。何処にでも好きな処に行くといいわ」

メアリーの顔は引き攣った。彼女は思わず、こめかみが引き攣る。

「それは私達はつまり……」

「ええ、馬鹿にしている。私の敵では無いと思っているわ。ルブルとかいうのも、私の敵じゃない。あちらの方はさすがに、死んで貰うつもりだけれどもね？」

「そう」

メアリーは、マルトリートを発動させていく。

彼女の顔は、怒りで引き攣り始めていた。

「もう、この辺りは私の“食卓”になっている。婚礼の儀式も始まっている。大人しく、死んで貰えないかしら？ デス・ウィング、私は貴方を殺せないかもしれないけれども、追い払う事くらいは出来るかも。永遠にね？」

デス・ウィングは、ローザに対して嘲る笑みを浮かべる。

何も無い虚空の中から、何かが生まれようとしていた。

まず、最初に見えたのは、大きな目玉だった。

メアリーは思う、おそらくあれは何かの胎児なんじゃないのかと……………。

大地が波のよううねる。

ローザの肉体が変形していった。

「もう、人間には戻れないかもしれないけれども、仕方無い事なのよ。貴方達が悪いのだから……………」

気を失っていたアंकウは目を覚まして、顔を上げた。

「ヘリックスの次元転移に似たような事を、私は出来る。あるいは、私は彼に出会ってから、私の能力が成長したのかもしれない。私は私の破壊のイメージを私の中へと取り込む」

轟音が、何処からか、何度も響き渡っていく。

「食卓の最後の力、この辺り一帯を亜空間へと変えるつもりよ」

ローザはそれだけ言った。

十

スフィアはルブルの城の中で、物陰に隠れていた。

とにかく、今はただただ逃げたかった。夢の中にでも逃げたかった。

深い孔でも掘って、そこに隠れてみようか、そんな事を考えていた。

ぽつり、と。

一つの人影が現われる。

スフィアは直感的に、何だか、その人影には縊ってもいいかな？ と感じた。

「ねえ、助けてっ！」

スフィアは叫ぶ。

そいつは、ぱちくり、と瞬きを、よく繰り返していた。

「ああ、大丈夫かい。僕はヘリックス、君の名前は？」

「私はスフィア、よかった。このまま、死んじゃうんじゃないかと、私……………」

ルブルの城からは、気付けば、怪物達の音が無くなっていた。

ヘリックスは、床を指先でなぞっていく。

そして、地面から、魔方陣が出現した。

「じゃあ、行こうか。僕の住んでいる国に、連れて行ってあげるよ」

十

ルブルのドラゴンは巨大な翼を広げていた。

ドラゴンは、空を高速で飛び続けていた。

ローザの国、ディーバに辿り着くまでは、あっという間だった。

「何かしら？ あれは……？」

彼女は眉間に皺を寄せていた。

ルブルは、ぼんやりと考えていた。

もっと、メアリーと色々な事を話したいなど。

「クルーエル、私、人間みたいになっちゃったのかなあ？」

彼女は少しだけ、戸惑う。何だか、ぼんやりと、幸せってこんな感覚なのかなあと思った。本当は、誰か自分の話を聞いてくれる相手が欲しかっただけかもしれない。

話し相手がいるのは、こんなにも楽しい事だったなんて思わなかった。

一緒に料理を作る話なんかをしようと思った。

彼女と一緒にやりたい事を指折り数えていく。

「私、……人間になれないかなあ？」

自然と彼女はそんな事を呟いていた。

どんな風に会話をすればいいかわからない。

ルブルは細長い箱を大切に持っていた。

「ふふふっ、メアリーの右腕」

彼女はそれを、とても愛しそうに抱き締めていた。

彼女の一部を手にする事によって、いつだって、彼女が傍にいるような気がする。

「何かしら？ あれ……」

ルブルは思わず、驚いた顔になる。

それは、巨大な樹木のような形をしていた。

「何？ 私のカラプトみたいなものかしら？」

## 十

樹木の幹は、所々がこぶのように膨らんでいき、様々な人の顔のような形になり始める。

あらゆる人の命のエキスが脈動しているかのようだった。

その樹木の形は、内臓のようにも見えた、まるで生命が河のように流れているかのようだった。

笑い声が響き渡っていく。

それはまるで、歌のようだった。

アंकゥとメアリーは息を飲んでいく。

そいつは、とにかく、生理的嫌悪感を催す化け物へと変わっていく。

まるで、底知れない悪夢そのものが現実に現われたかのようだった。

「人間の幸福は一定数、分量があると私は思っているわ。だから、犠牲になるべき者と富を享受する者の両者が必要なのだと私は考えている。ドゥーム・オーブは、人間の欲望に働き掛けてくる力そのもの。人間が生存したい、子孫を残したいと思う願望に働き掛けている。ディーバは言わば、私の子供のようなもの、私の民はみな、幸福になる必要がある。たとえ、どんなに他国において犠牲を強いたとしてもね？」

めきり、めきり、と音がする。

「命は平等では無いの。分かるかしら？」

こきゅり、こきゅり、と彼女の肉体は原型を止めなくなっていく。

「メアリー、アंकゥ、貴方達はヘリックスや氷帝と同じように、私の民になる道を選ぶべきよ。そうすれば、貴方達の苦しみは何も無くなるのだから。私は力のある者は、たとえ、他国の者達でも受け入れたいし、個人的に私は貴方達が気に入っているしね？」

ぞわわわっと、音階が外れた音が周囲に響き渡っていく。

不協和音の嵐が舞っている。

「だから、貴方達の態度も、見逃してあげる。貴方達は私にひれ伏すべきね？ 私にひれ伏せば、貴方達はあらゆる幸せを享受出来るのよ？ そうだ、貴方達の力を使って、ディーバをもっと豊かに、もっと色々な幸福の形を作りましょう？」

メアリーは変形していく化け物を睨み付けていた。

「下らないわ。私は与えられた幸せよりも、勝ち取った不幸を選ぶ。美味しいご飯を食べて、理解のある人間に巡り会えて。……私はそういう部分の幸福は享受しようとは思うけれども、私は世界と戦うつもりだし、自分自身の闇の部分とも戦うつもりでいる……っ！」

メアリーは、巨大な戦斧を、化け物へと変身したローザに向ける。

そして、くるくる、と回した。

幻影で作り出したものには、重量が無かった。

だから、彼女の華奢な腕でも、どんな破壊力を持つものでも軽々と手にする事が出来た。

心臓のような樹木の部位が、戦慄いて、声へと変わっていく。

「貴方の幻影のイメージを実体化する力、とっても惜しいんだけどね？ じゃあ、仕方無いか。こうするわよ？ 貴方には、深い深い眠りに落ちて貰う。脳を破壊して、昏睡状態に陥って貰おうかと。でも、力だけは使えるように、生かしてあげる。そう、そうする事に決めたわ」

「成る程、私にお人形さんになれて事ね？ ルブルの方は、私を人間と認めたわ」

アंकゥは、立ち上がった。

全身が、酷く痛い、ジュダスが加減してくれたせいか、特に骨や内臓などにも異常は無く、能力を発動させる意志も、まだまだ残っている。

彼は、自身の力を、奇形的な樹木へ向けて、送り込み続ける。

空間を爆撃して、破壊する能力ソリッド・ヴァルガー。

その力が、樹木を体内から爆破させていく。

「ははははっ、私はこの形態になると、もう人間の姿には戻れないかもしれない。でも、ディーバ全体なら、この姿でも守れる。私は樹木となって、ディーバ全体を守護するつもりでいるわ」

破壊された部分が、簡単に再生していく。

アंकゥは唸り声を上げる。

いつの間にか、ジュダスとデス・ウィングが消えていた。

「メアリーッ！ あの二人は？」

メアリーは、幾つもの大砲の幻影を作り始めていた。

「ローザも気付いているだろうけれど、彼女が変身している際に、二人共、去っていった。やっぱり、彼らはディーバの人達なんて、どうだっていいんじゃないかしら？ 私達もかもしれない。……………デス・ウィングにお願いされてね、あるものの幻影を作り出して欲しいって言われて」

アंकゥは攻撃を続けながら、メアリーの話聞く。

「何を作ったんだ？」

「満月」

アंकゥは何だか、呆れたような顔になった。

どうやら、あの二人はまだ戦いを続けるみたいだった。ジュダスは満月の時に、全力を出せると言っていたか……、アंकゥは、彼らが本当にどうしようもない戦闘狂なんじゃないかと思いはじめ。

「俺は……本当に、まともなんだって気がしてきたよ」

「私も自分はかなり狂っていると思うけれども、やっぱり、本当に頭がおかしい人達には適わないみたいね……………」

メアリーは額に指を置いて項垂れる。

巨大な枝状の鞭がしなる。

メアリーの左肩が、深く刻まれる。

彼女は声にならない悲鳴を上げた。

マルトリートで作った武器が、その瞬間に、簡単に消滅していく。

「うっ、くっ……………っ！」

彼女は少しだけ、泣きそうな顔をしていた。

「やっぱり、駄目だ。私は自分が傷付けられる事に弱い……。ああ、本当に駄目ね……」

そう言いながら、彼女は距離を離そうとする。

樹木の枝が次々と伸びて行って、メアリーの周りに集まっていく。

メアリーは必死で、防御の為の幻覚を作成しようとする。

彼女は、ぜいぜいっ、と深く息を吐いていた。

アंकゥは、今度は、メアリーを取り巻く枝の群生を攻撃する。

そして。

その隙を突いて、アंकゥの背中が深く切り裂かれた。彼は地面へと突っ伏す。

どんどん、押される一方だった。

怪物は、変形を重ね続けていく。

メアリーの透明な幻覚の盾が、作成した先から、あっという間に破壊されていく。

ローザは強かった。

彼女は、やはり、ディーバの守り神のような存在になりたいのだろう。

絶望感さえ過ぎてきた。

しかし……。

突然の事だった。

樹木の大部分が何か巨大なものによって、爆撃されていた。

樹木全体が、爆破炎上していく。

「あら、頑張っ、持ちこたえているじゃない？」

メアリーとアンクゥは、空を見上げる。

すると、巨大な白骨のドラゴンに乗った黒い長髪に真っ黒なドレスの女が二人を見下ろしていた。

「あれ、そこの赤髪君、何だっけ？ 私の名前はルブル、よろしくね。それから、メアリー、助けにきたわよっ！」

メアリーは、包帯を作って、左肩の傷口を押さえる。

「あら、ルブル。助けに来てくれたの。私の事をそんなに思ってくれていたのね……」

「何、当たり前、言っているの？ だって、私達、仲間じゃない？」

メアリーは驚愕し、しばしの間、茫然自失とした顔になる。

「そうなの、私よりも何倍も何十倍も酷い、ただのサイコなんだと思っていた……」

メアリーは、指先を額に当てて、唸る。

「ああ、そうだ。スフィアって子に会った」

「あら、そうなんだ？」

「私の城の中に放置していたけれどもね？ 多分、死なないんじゃないかなあ。ディーバの様子はどうも変だったから、此処まできたの。ふふふっ、メアリー、生きていてくれてよかった」

ルブルは何だか陶然としたような表情をしていた。

奇形の樹木は、破壊された部分をただちに修復させていった。

ルブルの白骨ドラゴンは、再び、口腔に熱を集めていく。

メアリーも、意志の力で、自身のマルトリートをもた発動させていく。

アンクゥも負けていなかった、ルブルへの追撃として、能力を使っていく。

巨大な真っ赤なクラゲのような怪物が、樹木の中から現われる。

ルブルは、すかさず、人形を取り出した。

人形の眼球が、ぎょろり、と動く。

「クルーエル、あいつを倒せっ！」

石化ガスが、散布されていく。

クラゲは、徐々に石と化していった。

クルーエルの力は、圧倒的に強かった。

ローザは、戦慄している。

そして、ローザは地面へと崩れ落ちていく。

三人は、ふうっ、と一息付く。

ルブルは、ドラゴンを地面へと着陸させた。そして、ドラゴンから降りると、メアリーを強く抱き締めた。

## 十

そこは、ウィンディゴとディーバの途中にある、吹雪が吹き荒れる場所だった。

デス・ウィングは、小さな光の球体を手にしていて、メアリーに言われている、これを空に上げれば、一気に巨大になって広がるのだと。

デス・ウィングは、光の玉を空へと向けて放り投げた。

すると、それは空に浮かんでいって、満月へと変わっていく。

「これでいいのか？ 本物でなくて、すまないが」

「ああ……。本物の時と、同等の力が出せる筈だ」

ジュダスは満月の光を浴び続ける。

彼の身体が変身していく。

彼は、満月の光を肉体に吸っていた。

狼の肉体から、人型へと変わっていく。

そこに立っていたのは、精悍な顔立ちをした筋骨逞しい肉体をした、黒髪に銀色の混ざる美青年だった。真っ黒な毛皮のコートを羽織り、その下に、皮膚に食い込む真っ黒なタンクトップを身に付け、煤けた色の黒色のズボンと黒色のブーツを履いている。

「そうか、お前は元々は人間だったのか」

「まあ、そんな処だな。満月の夜にだけ、人の姿に戻れる。狼の姿の時は、全力の状態なんかじゃない。さてと」

彼は右腕を掲げる。

彼の右手の中には、漆黒の光が収束していく。

「ヘル・ブラストによって得た死のエネルギーの力を凝縮させている。この力を使えるのは、人型の時だけだ。デス・ウィング、お前も全力を出せ。お前は不死身なんだろう？ 俺のヘル・ブラストはどれだけ不死身の化け物を殺せるのか興味がある。お前は死にたいんだろう？」

「ああ、そうだ」

デス・ウィングは、左手で長い剣を掲げた。

ジュダスの全身は、真っ黒な影によって覆われていく。

デス・ウィングは右手の指先に、風のエネルギーを収束させていく。

そして、それを指先で弾いて、ジュダスへと向けた。ジュダスはあっさりと、その攻撃を避ける。撃ち込んだ風の弾丸が、ジュダスの背後の地面に、大きな孔を開ける。

そして、デス・ウィングはその攻撃が命中しないと知ると、次は、指を広げて、空中の何も無く空間を、引っ掻くように、指を動かす。

まるで、爪のような形で、風の刃がジュダスを襲った。彼の全身から伸びる影は、真っ黒な怪物の形へと変貌して、風の刃を食らっていく。

ジュダスの右腕と、デス・ウィングの剣が交差した。

辺り一帯が、闇と風によって飲み込まれていく。

お互いに、死力を尽くして戦い続けていた。

デス・ウィングの肉体が、服ごと、さらさらと、溶け崩れていく。

霧の肉体を持っている彼女は、ジュダスの能力によって、崩壊を始めていた。

「私は……………死ぬのか……………？」

何だか、酷く安らかな気持ちに陥っていた。

どうしようもない程に、眠たかった。

ジュダスの拳が、彼女の腹へとめり込んでいた。そこから、彼の能力が、彼女の肉体を侵食していた。

「お前はこんなものか？ 俺ごときに殺されるのか？」

「いや、お前は強いさ。もう、いいかなって思ってもいる……」

彼女は静かに眼を閉じる。

「お楽しみの処、申し訳ないんだけどさ」

悪意を撒く者と、死を撒く者は、それぞれ振り返った。

そこには、一人の少年が佇んでいた。

「僕の能力の名前は無い。名付ける意味を感じなかったからね、次元を転移する力なんだけれども、僕はこの能力を使う事によって、行った事のある場所に印を付けて、空間と空間を行き来する事が出来るんだ。それで、ローザ様と同じように、力を限界まで使ったら、自分の身も危険になるんだけどさ」

ヘリックスは、強い覚悟の灯る瞳をしていた。

「ねえ、ジュダスとデス・ウィング。二人共、せめて、どちらか一人でも、道連れになってもらうよ？」

にっこりと、少年は柔和に笑った。

辺り一面が、魔方陣のようなものを描いていた。

既に、デス・ウィングも、ジュダスも、その方陣の中へと飲み込まれていた。

「くっ！」

デス・ウィングは思わず、己の失態に舌を打つ。

ジュダスの肉体は、深い体毛を帯びていき、全身が変形していく。

彼は元の狼の姿へと戻っていかうとしていた。

「ヘリックス、これは何だ？」

彼は少年に訊ねる。

「僕の全力の能力、何処か物凄く遠くの亜空間へと飛ばすんだ。僕と一緒に、誰かを道連れにしてね。君達二人共、一緒に消えてようか。ディーバの為に、あるいは、この世界に生きるあらゆる人々の為に……」

ふん、とジュダスは鼻で笑う。

彼は足元を動かそうとするが、既に、足から先が消えかかっている。

「デス・ウィング……」

彼は言った。

「何だ？」

「俺の勝ちでいいか？ 俺とお前の戦いはだ」

「いいが……私は今、お前の能力で死ぬつもりでいるんだが、ヘリックスの能力で、何処か遠い場所へと向かうのもいいかもしれない。そこでは、もっと簡単に死ねるかも……」

「そうか……」

瞬間。

デス・ウィングの上半身と下半身が分断される。そして、既に狼の姿へと変わっていた、彼の右腕によって、彼女の上半身は、遙か遠くの場所へと吹っ飛ばされる。

一帯が、暗闇へと飲み込まれようとしていた。

しばらくの間、彼女の意識は朦朧としていた。

そして、起きた現象を目の当たりにする。

氷の大地に、巨大な大穴が開いていた。それは、地下深くまで広がっている。

いつの間にか、ジュダスとヘリックスの姿は、何処かへと消失してしまっていた。

彼らは、この世界ではない、何処か遠くの場所へと飛んでいってしまったのだと、彼女には分かった。

「ああ、クソ、また死に損ねた」

彼女は、とても悔しそうに悪態を付いたのだった。

十

スフィアは、ディーバの街の中を彷徨っていた。

ヘリックスと名乗った少年に連れてこられた。

そして、此処に放置されている。

「私、本当にどうしよう……」

少年は、ちょっと、別の場所へと向かうと言っていた。そして、多分、もう二度と会わないだろうとも言っていた。

彼女は何だか、へたりこみそうになった。とにかく、とても疲れていた。

スフィアは、とぼとぼと、街を歩き続ける。

街中では、人々が泣き叫んでいた。沢山の人が死んでいったと述べる。

「私……どうしよう」

そう言えば、お腹が減った。

何か食べ物を口にしたのは、そう言えば、いつだったのだろう。

それから、疲労で身体が悲鳴を上げていた。

二つの人影が、彼女の目の前に現われた。

見知った顔だ、嬉しさと同時に、恐ろしさが込み上げてきた。

ルブルとメアリーが立っていた。

その邂逅は、当たり前のように、訪れた。

「ああ、スフィア。久しぶり、元気していた？」

メアリーは、自分の妹のような相手に訊ねる。

「メアリー、どうしたの？ また会えてよかったよ。会いたかった、そこにいる魔女さんとは何で一緒にいるの？」

「そうね、私は悪者だから。貴方とは違って、人間を踏みにじりたい存在なのだから」

スフィアは首を横に振った。

「メアリー、また昔のように戻ってよ。私はとても寂しいから」

「そうね、でも、……………私は貴方と、会ったら、何を言おうかずっと考えていたんだけど、ルブルから聞いたんだけど、貴方も力が使えるようになったんでしょう？」

「そうだよ」

スフィアは、右手の中から、ナイフを取り出した。

「これで切り付けたものを、老いさせたり、崩壊させたりする事が出来るんだよ……」

「そう」

メアリーは、一瞬にして、スフィアとの距離を縮めた。

そして、彼女の右手を強く握り締める。

「このナイフで、私を刺せる？」

スフィアは、言われて、首を必死で横に振る。

「これで、私を殺して、前に進みなさい」

メアリーは、恐ろしい形相で、彼女の眼を見ていた。

スフィアは困ったような顔を浮かべる。

その様子に、苛立ったかのように。

ルブルは一瞬にして、メアリーの首を落としていた。

ぽん、ぽんぽん、とメアリーの首が地面を転がっていく。

「ごめんね、スフィア。メアリーは、私の代わりに貴方を選んだ、私はそれが憎らしくて堪らなかった。じゃあね、貴方、私が憎いでしょう？」

スフィアは崩れ落ちる。

メアリーは死んだ。

メアリーは死んだ。……………。

自分の親友は、もう、この世界に存在しないのだと……………。

しばらくの間、彼女の頭は真っ白になっていた。

スフィアは、右腕で、ルブルの身体に触れる。

すると、みるみるうちに、ルブルの全身は崩れていく。

「やるわね……………、とても悔しいわ。じゃあね、さようなら、元気でね……」

漆黒のドレスの女は、優しく微笑む。

ルブルの肉体は消滅した。

スフィアは呆然としながら、自分の右腕を眺めていた。

まるで、この右腕は呪われているかのようだった。

どう言えばいいかわからないが、スフィアは、自分の足で立って、前に進まなければならないなあ、と思った。誰かに縋るんじゃなくて、自分一人で強くなれたらなあと……。

けれども、やっぱり、スフィアはどうしようもないくらいに立ち上がれそうになかった。

メアリーはもういない、彼女は死んでしまったのだと。

「私、一人で生きられるかな？ どうすればいいのかな？」

空の向こうに訊ねてみる。

答えは返ってきそうに無かった。

今は、絶望の淵にいても、いいかなと思った。絶望の底の底には、自分を強くしてくれる何か眠っているかもしれないのだから。だから、この苦しきも、悲しみも、受け入よう、ありのままに。

## 十

スフィアがいた場所から、数十メートル先で、ルブルはメアリーの手を引いていた。メアリーは先の戦いでの負傷のせいもあって、かなり体力的にも、精神的にも消耗仕切っていた。

「メアリー、これでいいのよね？ でも、よく私達の幻覚を作ったわね。正直、疲れ切ったでしょう？」

メアリーは、ふうっ、と大きく息を吐く。

「これで、私はあの子の中からいなくなった。そう思いたい。あの子と私はもう何も関係の無い、赤の他人。それぞれの道を歩まなければならない。私はこれからどうしようか……」

誰しも別れがあるんだと思う。メアリーはそう、ルブルに告げた。

どうやっても、思い通りにならないものは存在する。

「私と一緒に来てくれるんでしょう？ 地獄の果てまでも」

「そうね、でも、せめて、ディーバとかグラニットからは、とっても遠い場所に行かない？ 貴方の弟のクルーエルも連れて」

「そうね」

スフィアに見えないような位置で、ルブルは白骨のドラゴンを羽ばたかせる。

ルブルとメアリー、それからルブルの弟であるクルーエル。

三人で何処か遠い場所へと向かおうと思う。

この地は、多分、汚れに塗れ切ってしまっている。

きっと、世界の果てはもっと面白いのかもしれない。

ルブルは、優しく、メアリーの頬を撫でる。

「大好きよ、メアリー」

メアリーは、思わず、恥ずかしげな顔になる。

「私もよ、ルブル……。私、スフィアに抱いた感情はその」

「ふふふっ、分かっている」

メアリーは、ああ、滑稽だなあと思った。メイドをしていた頃の事、他のメイド達は、みなそのうち男と結婚する者達ばかりだった。ずっと、独身だと肩身が狭くなる、それは分かっていた。どんな相手とも、一緒になるつもりなんて無かった。

「私、……同性愛者なんだと思う。……多分ね。……スフィアに恋していたんじゃないかなあと。はあ、どうしよう」

「これからは、私がいるじゃない」

ルブルが、指先で彼女の唇を撫でる。

これから、向かう先は破滅かもしれない。

どうしようも無い程に、二人共、この世界の中で狂った存在でしかないのだから。

二人共、目の前には、暗闇ばかりがあった。

もう、戻れない。

悪を生きるしかないのだろうなあ、とメアリーは覚悟していた。……………。

ぱさり、とメアリーの頭が真っ白な布に覆われる。

それは、ウェディング・ベールだった。

「婚約指輪、買いにいきましょう？ メアリー」

ルブルは、うっとり笑う。

メアリーは、彼女の顔を真摯に見つめる。

「分かったわ、ルブル……………」

他人に対しての支配欲と独占欲が強い者同士、一緒になろう、とメアリーは思った。お互いに支配し合って、二人だけの世界に向かえばいい。それは、もうどうしようもなく、閉ざされた世界なのだろう。けれども、そういった幸せしか望めないのだろう。

メアリーはルブルを強く抱き締める。

そして、二人で唇を重ね合わせて、誓いの口付けを交わした。

十

氷帝という名の老人は、半壊した城の中にいた。

隣には、赤髪のアクウが地面に寝そべっていた。

「お主、わしと一緒にディーバを再建しないか？ わしらで、ローザ様の後を継がぬか？」

「分かった。……出来れば、以前とは違う、もっとまともな国を建築したいな。他国を犠牲にしないように。それが復讐の代わりになるならな……」

老人は、彼の意図を悟ったように言葉を口にしていく。

二人はしばらくの間、沈黙していた。

アクウは考える。

ディーバの住民達は、富を貪る事によって、暮らし続けていた。

そして、彼らはこれまでの代償を支払う事になるのだろうか。

「俺が王様か？ 馬鹿みたいだ。はあっ、何なんだろうな」

彼は深く溜め息を吐いた。

結局、復讐は成し遂げられたのだろうか。少なくとも、ローザは死を迎えた。けれども、このもやもやとした気分は何なのだろう。

生き残る事が、果たして本当に幸せだったのだろうか。

生きていれば、何とかなる。そんな言葉を何処かで聞いた事がある。

「俺は俺の復讐の感情を、これからも、抑える事が出来るのかな？」

まだ、何も分からなかった。

ふと、彼は思う。

メアリーも、あのルブルとかいう女も、彼自身も、本当は死ぬべきだった。

おそらくは、この世界に生きてはいけない命なんだったと思う。

けれども、運命が捻じ曲げられたような気がする。

そして、死んでいった街の人々、彼らの事をアंकゥはよく分からない。

匿名的で、顔もよく思い出せない人々だ。

彼らとアंकゥ達を違えるのは何だったのだろうか？

たまたま、偶然、自分は生き残っただけなんじゃないのか？

彼は思う。

結局、復讐を成し遂げられたという事なのだろうか。ローザは死んだ。けれども、どうしようもなく、酷い空虚感に襲われている。

「俺は、俺の力をコントロールする事が出来るのだろうか？」

彼は項垂れていた。

国王にならないかと、氷帝は言う。

彼は国を作るという使命を与えられている。

理想的な国家にはしたいと思う。しかし、どのような国家ならば正しい国家になるのだろうか？ 何もかもが、分からなかった。……………。

彼は、ああ、と。深い失望を抱いていた。

……ローザを批判する事が、何も出来なくなってしまっている。

## 十

デス・ウィングの身体は、服ごと完全に復元していた。

彼女は、氷の舞台の上を歩き続ける。

何か、とてつもない喪失感に襲われていた。

「私はどうしたものかな」

死んでしまいたいという感情を消す事は出来そうにない。

生きる目的も、そんなに持っていなかった。

「いつか、店を開こうかな。アンティーク・ショップがいい。人間の作り出してきた、ろくでもないものを集めて売ってしまおう。そして、みんなに悪意を配っていくんだ。そうする事によって、もっと人間の病んでいる部分、歪んでいる部分を鑑賞する事が出来るのかもしれない」

彼女は酷く、自分の人生を空しく思っていた。

無意味に生き続けるという事が、どうしようもなく苦痛に思えて仕方が無かった。

「まあ、いい。どうせ、人生なんて、死ぬまでの暇潰しなんだ。どうせ、死後の世界なんて無いんだし、地獄なんてのも、現象として現世に存在しているだけで、死後には意識なんてものは無くなるだけなんだし……………」

彼女は何も無い虚空を見つめていた。

何もかもが、つまらなかった。

「私はいつ終われるのだろうか？ 何だろう、全てが下らなく思えて仕方が無い、私はどうしようもないくらいに、何も無いな。空っぽだ」

彼女は、一人、話し続けていた。

吹雪は降り続けていく。

空には、何も無いように思えた。

デス・ウィングは、しばらくの間、自分の両腕を眺めていた。自分の肉体は、一体、何によって構築されているのだろうか。自分の存在は何の為にあるのだろうか？

どうしようもなく、思考の迷宮の中へと入り込んでいく。

「また、探すか。私は私の生きる意味を、それはもう、どうしようもない程に、仕方が無い事なんだろうな」

彼女は深く溜め息を吐いたのだった。

「本当に君は滑稽なんだよね。あるいは、僕の存在もかな？」

異国風のドレスを纏った美少年である、他人の死は、彼女の傍に佇んでいた。

そして、くすくすっと笑い声を上げる。

「まあ、いいさ。私は、スフィアも含めて、みんな不幸になればいいと。思い通りにならない。ジュダスのせいだ。私に希望を与えたから……、私は死ねるんじゃないのかと。楽になれるんじゃないのかと。みな、不幸になればいいと思ったのに……」

「違うね、君はそんな事を本当にしたいんじゃないかと、人々の可能性を探っている。違うかい？」

デス・ウィングはしばしの間、無言だった。

「じゃあ、一緒にまた歩こう？ デス・ウィング、僕と一緒に。人様の死を傍観し続けに、どうしようもない、現実という地獄を鑑賞しに行こうよ？」

他人の死は笑っていた。

デス・ウィングは沈黙する。

取り敢えずは、スフィアの事が気がりだった。

あの少女は、これから、どのような運命を辿っていくのだろうか。

取り敢えず、スフィアの下へと戻ろうと思った。彼女と旅を続けるのもいいかもしれない。自

分達とは、一体、何なのかと思案を続ける為の旅をだ。

END

